

学部・研究科等の現況調査表

教 育

平成20年6月

東京芸術大学

目 次

1. 美術学部	1-1
2. 美術研究科	2-1
3. 音楽学部	3-1
4. 音楽研究科	4-1
5. 映像研究科	5-1

1. 美術学部

I	美術学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 I	教育の実施体制	・ ・ ・ ・ 1 - 3
	分析項目 II	教育内容	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 6
	分析項目 III	教育方法	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 1 1
	分析項目 IV	学業の成果	・ ・ ・ ・ ・ 1 - 1 5
	分析項目 V	進路・就職の状況	・ ・ ・ 1 - 1 9
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2 2

I 美術学部の教育目的と特徴

東京芸術大学美術学部は、前身となる東京美術学校以来120年を超える歴史の中で、美術各分野において時代を代表する作家・研究者・教育者を輩出してきた。本学部は、こうした伝統の中で培われてきた創造性を身に付け、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮できる人材の育成をめざしており、具体的には以下に示すような目的と特徴を兼ね備えている。

教育目的

- 1 本学部は、絵画（日本画・油画）・彫刻・工芸・デザイン・建築・先端芸術表現・芸術学等の領域において、これまで世界的な芸術家を輩出し、我国の芸術の指導的役割を果たしてきた。こうした伝統や遺産を継承しつつ、優れた芸術家、研究者、教育者を育成する。
- 2 本学部は、美術分野における教育研究を多方面から行いつつ日本の芸術文化の独自性を深めるとともに、多様な世界の芸術文化と交流しあう国際的な芸術教育の拠点づくりを行う。
- 3 本学部は、芸術表現の新たな研究領域や分野に積極的に取り組み、新しいメディア芸術などについても積極的に教育に対応し、芸術を広く時代を開いていく表現者や研究者の育成を行う。
- 4 本学部は、教育研究の成果を社会に発信するとともに、芸術のある豊かな社会環境の育成に貢献する。

教育の特徴

- 1 本学部における教育の最大の特徴は、主として工房やアトリエを中心として教員と学生が一体となって制作活動を行うことで、学生の実作能力や独創的な創造性の開発を図ることにある。
- 2 教育内容については、これまで蓄積してきた基本的な美術各分野の技法等を重視しながらも、現代に生きる学生が持つ個性や創造性を尊重して表現指導を行うことに留意している。
- 3 本学部は、前身である東京美術学校時代から蓄積した貴重な美術品を収蔵する東京芸術大学大学美術館と共同して、収蔵された各種美術品を積極的に取り入れた教育・研究を行う。

想定する関係者とその期待

本学部が想定する関係者とは、唯一の国立芸術大学という立場から、広義には美術に深い関心を寄せる全ての人々ということになるだろうが、狭義には、在学生及び卒業生・美術領域と関連する企業や公共機関ということになる。したがって、本学部に寄せられている期待とは、在学生に対して創作研究の良好な環境を提供し、高いレベルの教育を施し、優れた人材として社会に送り出すことと考える。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

美術学部は、絵画科（日本画・油画）・彫刻科・工芸科・デザイン科・建築科・先端芸術表現科・芸術学科の7科から構成され、古美術研究施設及び写真センターを学部附属機関として有している（資料 1-1 参照）。本学部の教育研究組織は、美術の諸領域をカバーしていること、特に日本画や工芸といった主に日本の伝統的造形芸術に関する知識や技術を専門的に行う学科から、技術等の進歩によって新しく生まれた表現や「美術」の分野を超える領域横断的な教育を行う先端芸術表現科（平成 11 年度設置）を設けていることが特徴となっている。

また、学内共同利用施設である大学美術館とは博物館学課程（学芸員資格）に関する科目を共同で開設し、芸術情報センターとも情報教育に関する科目（デザイン科必修科目「芸術情報演習」・建築科の必修科目「CAD 図法演習」など）の開設を通じて密接に連携している。

資料 1-1 美術学部の教育研究組織 ※（ ）は入学定員。※教員数は資料 1-2 を参照

学科	専攻	専任教員の専門分野
絵画(80)	日本画(25)	日本画
	油画(55)	油画, 版画, 壁画, 油画技法材料
彫刻(20)		石彫, 木彫, 金属, 彫塑
工芸(30)		彫金, 鍍金, 鍛金, 漆芸, 陶芸, 染織, 木工芸, ガラス造形
デザイン(45)		視覚・演出, 視覚・伝達, 視覚・構成, 空間・演出, 空間・設計, 機能・演出, 機能・設計, 映像・画像, 環境・設計, 描画・装飾造形
建築(15)		建築設計, 構造計画, 環境設計, 建築理論
先端芸術表現(30)		地域と芸術, 言語と身体, 科学技術と表現, 素材と創造性
芸術学(20)		美学, 工芸史, 西洋美術史, 日本・東洋美術史, 美術教育, 美術解剖学
附属古美術研究施設		日本・東洋美術史
附属写真センター		写真

(参考) 学内共同教育研究施設 ※〈 〉は教員数

施設名	教員の専門分野
大学美術館 〈6〉	博物館学, 美術史,
芸術情報センター 〈1〉	情報学

資料 1-2 専任教員等の数 (H19.5.1 現在)

学科	専任教員数							学内 兼務 教員	学外兼務教員			教育 研究 助手
	性別	教授	准教授	講師	助教	助手	合計		教員からの兼務	教員以外からの兼務	合計	
絵画科	男	10	7	1	2	0	20					
	女	0	0	0	0	0	0					
彫刻科	男	5	2	0	1	0	8					
	女	0	0	0	0	0	0					
工芸科	男	7	5	1	1	0	14					
	女	0	0	0	1	0	1					
デザイン科	男	6	4	0	2	0	12					
	女	0	0	0	0	0	0					
建築科	男	5	2	0	1	0	8					
	女	0	0	0	0	0	0					

先端芸術表現科	男	3	6	0	0	0	9					
	女	2	0	0	1	0	3					
芸術学科	男	5	7	0	1	0	13					
	女	0	1	0	2	0	3					
古美術研究施設	男	0	0	0	0	0	0					
	女	0	0	0	1	0	1					
写真センター	男	0	0	0	1	0	1					
	女	0	0	0	0	0	0					
合計	男	41	33	2	9	0	85					
	女	2	1	0	5	0	8					

本学部の専任教員は大学設置基準で定められている専任教員数を満たしている(上記資料1-2参照)。

本学部では、実技指導を中心とする授業の占める割合が高く、授業の準備(モチーフや使用する教材等の用意や管理)に係る負担は、座学で行う講義に比して大きい。そのため、本学部で行う教育研究を円滑に行えるよう、教育研究助手制度を整備して、専任教員と協同して学科等の運営や実技指導の補助にあたる者を配置している。

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

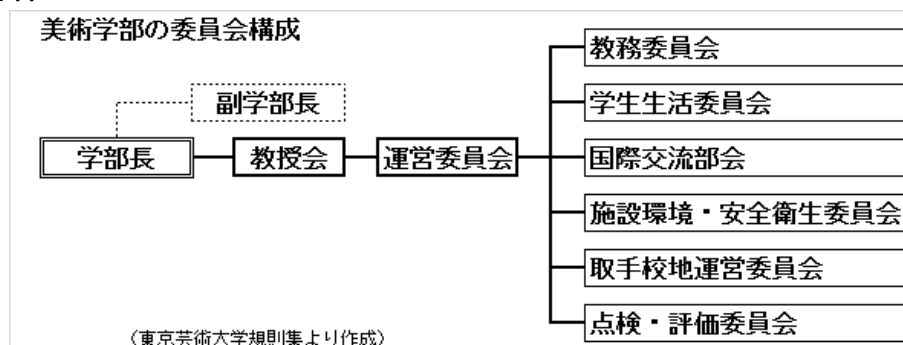
(観点に係る状況)

本学部は、美術の諸領域における実技教育が、専門教育の中心となっている。そのため、多くの専門実技においては、学年別や課題別等の少人数のグループ指導が指導方法としてとられている。実技の指導においては、グループ指導とは言え、個々の学生と教員の間で適宜意見のやりとりをしながら、個々の学生の個性やスキルに応じたマンツーマン的な指導を行うことになるため、教員は日常の学生の反応を見ながら、適宜指導方法を見直して授業を進めている。この実技科目に関しては、課題ごとあるいは学期末に講評会等を開催し、教育内容及び学生の到達点を教員相互にチェックする体制をとっている。

こうした日常的な見直しや講評会や学科会議での教員同士のディスカッションを通して認識された問題を意識しながら、次年度の実技課題等を検討し、決定している。

本学部全体の運営にかかる体制は、資料 1-3 のとおりである。このうち、教務委員会は本学部全体の教育内容、教育方法の改善に関する役割を担っており、教育課程表の改訂や共通科目(※観点「教育課程の編成」)の科目の見直し、あるいはFD等の事項について検討する組織として位置付けている。

資料 1-3



上述のとおり、実技教育に力点をおく本学部では、各科ごとのアトリエや工房での指導が中心となっている。これは、専門ごとの高い技法や表現法の修得や芸術感覚の涵養には適している教育方法である。しかし一方で、本学部の総体としての意味や方向性、あるいは学科を超えた横断的教育研究についての議論や考察が生まれにくく、教育指導方法が固定化しやすいという問題を含んでいる。この点を克服するため、美術学部共有のアトリエスペースや工房を設定し、臨時的・横断的な取り組みを促すと同時に、学部長のリーダー

シップのもとに平成 18 年度に「芸術と教育—美術学部教育の現在」と題した学内での相互理解と自己点検・評価を行う特別プロジェクトを実施した。



このプロジェクトには全教員が参加し、学部長が各科・専攻ごとに行った教員との対談、各科・専攻の授業風景・学期末講習会の取材などを基に、本学部の教育現場の実像を明らかにするとともに、本学部を俯瞰・比較・考察し、冊子と DVD からなる報告書にとりまとめた。このプロジェクトは F D の観点からも重要なものと位置付けており、学科単位で講義・実習などの内容を再検討し、それぞれの内容が教育目的に適したものであるかどうかの吟味を行う機会を提供した。

このプロジェクトの報告書は、『芸大素述 —美術学部の教育現場から—』として、大学関係者だけでなく、受験生をはじめとする美術に興味がある一般の人々にも広く読んでいただくために、平成 19 年 7 月に書籍として刊行もしている。

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準にある。

（判断理由）

本学部の基本的組織編成は、資料 1-1 及び資料 1-2 (P. 1-3～1-4) のとおりである。教員 1 人当たりの学生数は 11.0 人となっており、都内の私立大学の美術・芸術系学部 (8 学部) との平均値 29.8 人と比較すると際立って充実した値となっている。

また、平成 19 年度に行った在学生アンケートで本学の魅力は何であるかを問うた中で、「専門分野で活躍する先生が多い」という項目に対する肯定的意見 (4 段階評定のうち、あてはまる＋ややあてはまる) が新入生 77.8%, 2 年生以上 73.8% となっていること、さらに、本学部の入学者選抜は高い倍率を維持し、毎年ほぼ定員どおりの入学者を確保していることから、美術の各領域について学ぶ意欲のある学生の期待に応えていると考える (資料 1-4 参照)。

資料 1-4 美術学部入試状況 (平成 19 年度入試)

学科		入学 定員	定員 平均 超過率 (H16-19)	志願 者	受験 者	合格 者	入学 者	倍率
		人	倍	人	人	人	人	倍
絵 画 科	日本画	25	1.00	(1) 624	(1) 602	25	25	25.0
	油画	55	1.04	(1) 1636	(1) 1610	55	55	29.7
彫刻科		20	1.03	279	269	21	21	14.0
工芸科		30	1.08	365	349	32	32	12.2
デザイン科		45	1.00	(4) 1137	(3) 1077	45	45	25.3
建築科		15	1.00	112	110	15	15	7.5
先端芸術表現科		30	1.01	(4) 235	(2) 214	31	30	7.8
芸術学科		20	1.02	(4) 119	(3) 101	(1) 21	(1) 20	6.0
計		240		(14) 4507	(10) 4332	(1) 245	(1) 243	18.8

(※志願者～倍率は H19 入学者選抜、() は外国人留学生で外数。)

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学部の授業科目は、履修の指定方法により必修科目と選択科目に、授業の種別により専門科目と共通科目に区分される。専門科目は、各科(専攻)の専門教育の中心をなす授業科目で、履修が原則として当該科(専攻)の学生に限られる科目(他科・専攻学生は履修が認められても卒業要件単位とならない科目)である。共通科目は、各科・専攻の枠を超えて、学部内に共通に開設される授業のことであり、教養科目、外国語科目、体育・スポーツ科目、専門基礎科目に大別される。共通科目の一部は、学科・専攻により必修科目として指定されている(資料1-5中「指定科目」として表示)が、基本的には学生の個人の興味に応じて学年進行に係わりなく選択制としている(資料1-5, 1-6 参照)。

資料1-5 美術学部卒業要件単位数

科・専攻		必修科目			選択科目	合計単位数
		専門科目	古美術研究	指定科目	共通科目	
絵画科	日本画	90	10	4	22	126
	油画	90	10	4	22	126
彫刻科		90	10	4	22	126
工芸科		88	10	16	16	130
デザイン科		84	10	16	16	126
建築科		102	10	16	20	148
先端芸術表現科		72	10	24	24	130
芸術学科		※80	10	16	20	126

※外国語科目 16 単位を含む

共通科目のうち、教養科目や専門基礎科目には、芸術情報センターと連携して開設する情報処理に関する科目、保健管理センターと連携して開設する健康教育に関する科目、音楽学部で開設している科目など幅広い内容の科目が含まれており、総合的な教養教育を図ることを可能としている。

専門実技科目に関しては、各科・専攻において、技法や技術の習得の必要性から学年進行制を基本とし、1年間を複数の課題に分割して、それぞれを別の教員が担当し(年間スケジュールの例については、資料1-7(P.1-8)参照)、半期ごとに行う合同講評会などで複数教員による相互チェックを行っている。また、実技を主とせず、理論を主とする芸術学科においても1,2年次に絵画や彫刻に関する基礎造形実技が必修となっていることは、教育課程上の特徴と言える。

また、本学部の教育課程の大きな特徴の1つに、全学科・専攻を通じて、「古美術研究」を必修としていることがあげられる。古美術研究においては、本学部附属古美術研究施設(奈良市)を拠点に主として奈良・京都の古美術(国宝級を含む様々な美術工芸品や文化財等)を寺社、博物館、研究施設等で実地に見学、鑑賞し、研究することで、美術を専攻する学生の基礎的視野を広げ、各自の専門分野の研鑽に資することを目的としたもので、これは「伝統の上に新しい創造を行っていく」という本学部の基本姿勢を示すものである。

さらに、これらの卒業要件単位に係る科目のほかに、教職課程(教育職員免許状)及び博物館学課程(学芸員資格)を開設しており、これらの資格の取得を目指す場合、必要に応じた実技又は理論の科目を履修することとしている。

資料 1-6 美術学部教育課程(カリキュラム)修得単位年次表

例 1 : デザイン科 ※実技の年間スケジュールは資料 7 参照

区分	基礎課程		専門課程		修得単位数
	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	
必修	デザイン基礎実技Ⅰ(4) 〔デッサン 塑造〕 デザイン実技Ⅰ(14) 観察と表現 〔視覚 空間 機能〕 デザイン技法Ⅰ(2) 〔毛筆 タイポグラフィ パース レタリング〕	デザイン基礎実技Ⅱ(4) 〔デザイン技法Ⅱ〕 デザイン実技Ⅱ(14) 発想と表現 〔視覚 空間 機能 映像・画像 環境 描画・装飾〕	デザイン実技Ⅲ(16) 構想と表現 〔視覚 空間 機能 映像・画像 環境 描画・装飾〕	デザイン実技Ⅳ(12) デザイン表現 〔視覚 空間 機能 映像・画像 環境 描画・装飾〕 卒業制作(14) 〔視覚 空間 機能 映像・画像 環境 描画・装飾〕 上記領域を中心とした 研究と創作	84 単位
			専門科目(4) グラフィックデザインⅠ(2) グラフィックデザインⅡ(2) プロダクトデザインⅠ(2) プロダクトデザインⅡ(2) スペースプランニングⅠ(2) スペースプランニングⅡ(2) 映像論Ⅰ(2) 映像論Ⅱ(2) ※左記の 講義科目 より4単位 を履修		
	20 単位	18 単位	20 単位	26 単位	
			古美術研究(10)		10 単位
		指定科目： 1・2年次 図学Ⅰ(4)又は図学Ⅱ(4) 2年次 デザイン原論(4),芸術情報演習(デザイン)(4) 1～4年次 日本美術史概説(4), 西洋美術史概説(4), 東洋美術史概説(4), デザイン概説の うちから1科目を履修			
選択	共通科目				16 単位
	合計				126 単位

例 2: 芸術学科

区分	基礎課程		専門課程		修得単位数
	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	
必修	基礎造形実技Ⅰ(8) 素描 絵画(油画) 映像メディア表現	基礎造形実技Ⅱ(8) 絵画(日本画) 彫刻	論文作成演習(2)		80 単位
				卒業論文(14)	
	外国語(16) 美学・美術史演習(12) 美学・美術史特殊講義(16)				
		古美術研究(10)			
	指定科目:西洋美術史概説(4) 日本美術史概説(4) 東洋美術史概説(4) 美学概論(4)又は美学史概説(4)				
	共通科目				
選択	合計				126 単位

※外国語は、英・仏・独から2つ以上選び、そのうち1ヶ国語は上級まで履修すること。また、英語は、中級から履修すること。

資料 1-7 デザイン科実技年間カリキュラム

月	週	1年生		2年生		3年生		4年生	
4	1	ガイダンス		ガイダンス	プレゼンテーション	ガイダンス		ガイダンス等	
	2	デザイン基礎実技Ⅰa	デザイン基礎実技Ⅰb	デザイン実技Ⅲa		デザイン実技Ⅲa	デザイン実技Ⅳa	デザイン実技Ⅳa	
	3	デッサン	塑造	構想と表現		構想と表現	箕浦	尾登	
	4	中島	(彫刻科教員)	松下		長濱	達見	清水	
5	5	デザイン基礎実技Ⅰb	デザイン基礎実技Ⅰa	デザイン実技Ⅱa	アニメーション	「都市」		「メッセージ」	
	6	塑造	デッサン	発想と表現		デザイン実技Ⅲb			
	7	(彫刻科教員)	中島	発想と表現		構想と表現		デザイン実技Ⅳb	デザイン実技Ⅳb
6	8	デザイン実技Ⅰa 観察と表現 (機能・設計) 長濱 「にぎる」		尾登	アニメーションⅠ	モデリング	古美術研究 A/B班別の実施	デザイン実技Ⅳb	デザイン実技Ⅳb
	9			「トキのカタチ」				中島	池田
	10			「生活」				河北	長濱
	11			「伝統とデザイン」				橋本	
7	12	デザイン実技Ⅰb 観察と表現 (視覚・伝達) 松下		中島	アニメーションⅠ	モデリング	池田・中島 「伝統とデザイン」	河北	池田
	13			「生活」				松下	橋本
	14			「生活」				橋本	
15							プレゼンテーション期間		
夏期休業									
10	1	「植物園」		デザイン実技Ⅱd	タイポグラフィⅡ	金属	デザイン実技Ⅲc	デザイン実技Ⅲc	卒業制作 学生のテーマにより各研究室ごとに指導。 池田政治 中島千波 河北秀也 尾登誠一 箕浦正一 達見智幸 清水泰博 長濱雅彦 松下 計 橋本和幸
	2			発想と表現			構想と表現	構想と表現	
	3			(映像・画像)			達見	清水	
	4			「コマーシャルメッセージ」			「セルフプロジェクト」	「エコ・サステイナブル」	
11	5	デザイン実技Ⅰc 観察と表現 (空間・設計) 橋本 「住まう」		デザイン実技Ⅱe	樹脂	デザイン実技Ⅲd	デザイン実技Ⅲd		
	6			発想と表現		構想と表現	構想と表現		
	7			(環境・設計)		河北	尾登		
	8			清水		「雑誌の創刊」	「家族のカタチ」		
12	9	デザイン実技Ⅰd 観察と表現 進級課題 (視覚・構成) 達見 「本」		デザイン実技Ⅱf	レンダリングⅡ	デザイン実技Ⅲe	デザイン実技Ⅲe	卒業制作講評 全教員 卒業制作提出・採点 全教員	
	10			発想と表現		構想と表現	構想と表現		
	11			進級課題		箕浦	橋本		
1	12	プレゼンテーション期間		進級課題		「マイルーム」			
	13			(視覚・演出)					
	14			河北					
	15			「地域とデザイン」					

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本学部では分析項目Ⅰで既述のとおり、各学科・専攻におけるアトリエや工房を中心とした実技科目においては、少人数のグループ指導という特徴を活かして、随時学生からの要望を吸収し、現代的なニーズとしてのコンピュータを活用した内容やプレゼンテーション技術の教育など教育内容や教育方法の見直しを逐次行っている。

共通科目については、美術学部全体の視野から教務委員会で開講科目を決定し、アンケートなどで聴取した学生の要望に応じた変更を行っている。平成18年度には、芸術情報センターと連携して行っている情報処理教育に関する科目について大幅に見直し、19年度より資料1-8の科目のとおりとした。また平成19年度に行ったアンケートの結果、学生から

要望が多かった「中国語」について、20 年度より新規に開設することとした。このほか、音楽学部で開設されている科目の一部についても本学部学生の履修を認め(資料 1-9 参照)、さらにお茶の水女子大学と単位互換を可能とするなど、学生の多様な興味に応えられる環境となっている。

資料 1-8 芸術情報センターと連携して行う科目

芸術情報特論	DTP デザイン演習	芸術情報演習(デザイン)
CAD 図法演習	DTP デザイン演習初級	サウンドプログラミング演習
コンピュータ基礎演習	Web モーショングラフィックス演習	グラフィックスプログラミング演習
Web デザイン演習	3Dグラフィックス演習	コンピュータプログラミング演習
Web デザイン演習初級	実写映像演習	情報機器概説
	スタジオサウンド演習	

資料 1-9 他学部等開設科目

<音楽学部開設科目中、本学部で履修可能な科目>		
演劇論	音響学	音響技術史
歴史	芸術文化環境論	身体芸術論
フランス文学	西洋音楽史	録音技術概論
経済学	日本・東洋音楽史	ジャズ・ポピュラー音楽理論
思想史	西洋音楽史概説	コマーシャルにおける映像と音楽
宗教学	日本音楽史概説	現代ダンス概説
ドイツ文学Ⅱ(小説と戯曲)	東洋音楽史概説	日本音楽概論
英米文学	音楽民族学概説	声楽実技演習
イタリア文学	音楽音響学	サウンドデザイン演習
※アートマネジメント概論	文化環境論	※芸術運営演習
芸術論	※芸術運営論Ⅰ:基礎概論	芸術批評演習
映画史	芸術運営論Ⅰ:音楽マネジメント1	脚本読解演習
メディア・リテラシー	芸術運営論Ⅰ:音楽マネジメント2	文化研究
メディア論1:基礎理論研究	※芸術運営論Ⅰ:著作権	リズムのフィールドワーク
メディア論2:応用分析編	※芸術運営論Ⅱ:文化政策	音響表現論1
ポップ論	※芸術運営論Ⅱ:経営学	舞台技術論1(舞台機構)
音楽文化史	※芸術運営論Ⅱ:NPO論	舞台技術論2(舞台照明・舞台音響)
創造の今日と未来	※芸術運営論Ⅱ:社会事業マネジメント	サウンドアート概論
劇場技術論	※芸術運営論Ⅱ:地方自治体の文化行政	音響心理学概論
劇場芸術論	※芸術運営論Ⅱ:マーケティング	芸術特論
演奏録音研究	※芸術運営論Ⅱ:芸術支援	
<言語・音声トレーニングセンターが提供する科目>		
英語会話Ⅰ(中級)	英語総合講座Ⅰ(英語表現法)	仏語初級表現法
英語会話Ⅱ(上級)	英語総合講座Ⅱ(言語習得)	実用フランス語
英語会話Ⅲ(上級)	英語原典指導	仏語原典指導
英語作文Ⅰ(中級)		
Advanced Writing(英作文上級)	独語会話(中級)	伊語会話(中級)
実用英語Ⅰ	実用ドイツ語	実用イタリア語
実用英語Ⅱ	独語作文(上級)	伊語原典指導
	独語原典指導	

学芸員資格に関しては、全国で年に1万人を超す有資格者が生まれているものの、文部科学省「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」で「粗製乱造」「使い物にはならない」と批判があり、今後、実務経験を重視した高度化や「上級学芸員」を認証することなども検討されているところである。本学部の博物館学課程では、このような全国的状況に先んじて、従前より、学内共同利用施設である大学美術館と連携して、美術館教員の指導のもと、収蔵品を活用して、古美術品の取り扱い方や展示の仕方などの知識と技術を修得させ、一定の実務能力を身につけさせることとしている。

また、近年、芸術の文化的側面だけでなく、社会的・経済的側面での価値への認識が広がり、全国的に「アートによる町おこし」を行う自治体等が増えてきており、アートイベント等のマネジメント能力あるいは知的財産に関する知識をもった人材の需要が高まってきている。本学部は、そうした知識を持つことが卒業後に表現者として活動していくことを望む学生にとっても有用であるという考えから、アートマネジメントや知的財産に関する科目を開設(専門基礎科目、デザイン科専門科目)しているほか、音楽学部開設科目から履修できる(資料 1-9(P.1-9)中、※印の科目)こととした。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

各学科・専攻の教育課程は、専門分野を学ぶにふさわしい内容となっている。また、上述のとおり、学生や社会からの要請に応える授業科目の開設や、授業内容・指導方法の見直しを常時行っている。

実技科目については、各学科・専攻ごとの学年進行によることを基本とし、各学科・専攻のアトリエや工房で授業が行われるため、学生と教員の意見交換がしやすい状況となっている。

また、共通科目等の講義科目においても、オフィスアワーを決め、学生の質問等にこたえる体制としている。(各科目ごとのオフィスアワーは、シラバスに掲載。記載例は資料 1-10 を参照。)

資料 1-10 シラバス記載例

専門基礎科目

科目番号	1A231	授 業	日本・東洋建築史	教員名	光井 渉
通年	金 3	科目名	History of Japanese and Asian architecture	4単位	学部生
授業テーマ	この講義は、江戸時代以前に日本列島で展開した建築と都市・集落について解説します。講義はおおむね時代順に沿ったテーマを各回毎に設定し、社会的・技術的な背景とともに代表的な建築作品等を紹介し、現代の生活空間に継承されている多種多様な建築の形の意味を考えていきます。				
授業計画及び内容	各回のテーマは下記のを予定していますが、進行状況に応じて適宜変更する可能性があります。 【前期】○日本の建築（ガイダンス）／○建築の誕生（原始住居）／○美意識の誕生（神社建築）／○技術と空間（飛鳥・奈良時代の寺院1）／○空間の大型化（飛鳥・奈良時代の寺院2）／○都市建築の理念（平城京と平安京）／○都市住宅の原形（御所と寝殿造）／○和様の感覚（平安時代の建築）／○災害と復興（重源と大仏様）／○禅宗の建築（禅宗様）／○中世的世界の建築（密教建築） 【後期】○舗設から部屋へ（中世住宅）／○もてなしの空間（座敷飾りと書院造）／○綺麗と数奇（茶室と数奇屋）／○戦乱と惣構（中世京都と土豪屋敷）／○権力の象徴（城郭建築）／○現代都市の起源（城下町）／○町に暮らす（町並みと町家）／○村に暮らす（農村と農家）／○専用住居の誕生（武家住宅）／○賑わいの空間（近世寺社境内）				
受講に当たっての留意事項	『日本建築史図集』は講義中に使用するので常時持参すること。また、『日本建築様式史』の関連項目を授業前に参照しておくのが望ましい。				
成績評価方法	試験を予定（前後期それぞれ1回）				
教科書／参考書	『日本建築史図集』、日本建築学会編、影国社／『カラー版日本建築様式史』、太田博太郎監修				
備考(オフィスアワー)	月曜日 17:30～18:30 総合工房B棟4階 光井研究室				

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学部のカリキュラムは、分析項目Ⅱで示した資料 1-5, 1-6, 1-7 (P. 1-6～1-8) のとおり、実技を中心としたものであるが、各専門分野に応じて必要とされる講義科目を指定(「指定科目」)し、実技教育の内容と連動するような工夫を行うと同時に、実技課題の学年進行が最も効果的となるように、「古美術研究」を配置している。

また、実技科目では、フィールドワーク、ワークショップなどや社会で活躍するアーティスト等を招聘した特別講義・集中講義を組み入れることにより、実践的な指導や伝統技法、現在の美術分野の動向などを取り入れることができるような工夫をしている。(資料 1-11, 1-12 参照)さらに、課題終了時や学期末に行われる、講評会や学内に設けられている展示スペース等を使用してのプレゼンテーションを通じて、学生間でのディスカッション、学生と教員間でのディスカッション、教員間でのディスカッションが行われ、成績評価の透明性を担保する仕組みとして機能している。また、学生の優れた作品等の展示も積極的に行い、学生の自主的な取り組みや競争を促すことに活用している。

そのほか、例えば、週 1 回、学生 2～3 人が制作等について発表し、教員・学生全員で討論する場を設定した(工芸科 鍛金)、研究室ごとに個別相談日を設定し、随時指導教員がコンセプトから表現技術に至るまで具体的にアドバイスをを行う(デザイン科、先端芸術表現科)、学生に年間目標、計画を作成、提出させ、各自の目的に合わせた指導を行う(工芸科 鍛金、陶芸)など、各学科・専攻ごとに学生の指導について様々な工夫をしている。

資料 1-11 平成 19 年度特別講義・講演(全学科対象)

日付	題目	講師氏名	講師所属等
4 月 18 日	オーストラリア現代美術シーンと自作について	ピーター ヘネシー	作家
5 月 9 日	『美術館、ギャラリー、もう一つの場所ー現代美術の生まれる所、生きる所』	アラナ・ハイス	ニューヨーク P.S.1 現代アートセンター館長、ニューヨーク近代美術館副館長
5 月 31 日	「わたしたちの過去に、未来はあるのか」	岡部昌生 港千尋	アーティスト 写真家・写真評論家
6 月 11,12 日	フォトグラムに関する講義・実技指導	杉浦邦恵	美術家
6 月 22 日	木造建築物の現代的意義	中村義明	中村外二工務店代表取締役
7 月 11 日	「クリエイティブ・インタヴェンション(創造的介入)ーオルタナティブ・スペース、アーティスト、パブリック」	マーガレット・シュウ	台湾、オルタナティブ・スペース Bamboo Curtain Studio 主宰
7 月 19 日	ヨーロッパのジュエリー史と現代の動向	コーネリア・ホルツァハ	ドイツ フォルツハイム装身具美術館館長
9 月 14 日	「美術作品に見られるさまざまな物質を解き明かす」	アントニオ・スガメロッティ	ベルジャ大学教授
10 月 3 日	「オキナワ・カメラ 2007/沖縄写真をめぐって」	比嘉豊光 北島敬三	写真家 写真家
10 月 23 日	「ヨーロッパにおける「風景を熟視する」	ラファエル・ミラーニ	ローマ大学教授
11 月 16 日	世界の建築家	二川幸夫	(A,D,A,EDITA Tokyo)
11 月 23,24,25 日	映像表象の技術を学ぼう	百束昭幸 内田英治 高木敏文	(共催):ペタアートネットジャパン
12 月 6 日	クシユトフ・ウ・オディチコ特別講演会	クシユトフ・ウ・オディチコ	マサチューセッツ工科大学 先端視覚研究所 教授
1 月 29 日	ヨーロッパの現代美術の現状と諸問題について	バーバラ・ホルツ	オーストリア SECESSION 館長
2 月 9,10,11 日	映像表象の技術を学ぼう	百束昭幸, 内田英治, 高木敏文	(共催):ペタアートネットジャパン

資料 1-12 平成 19 年度 特別講義・集中講義・ワークショップ等(例:絵画科油画専攻)

日付	題目	講師氏名	講師所属等
4 月 20 日	パリへー洋画家たち百年の夢「出品アーティストによる座談会」	小川佳夫・佐藤利成・森江秀夫他	作家
4 月 25・26 日	バンコク コンドミニウムで	佐藤利成	作家
5 月 28 日	山口晃 集中講義	山口晃	作家
6 月 18 日	バトル十番勝負	O Jun 長谷川繁	作家
6 月 27, 28 日	版画制作の実演(自作についての説明, 作品鑑賞も含む)	田村文雄	作家
7 月 2 日	展開の可能性 2007	是枝開	神奈川県立美術館主任学芸員・作家
7 月 10, 11 日	キャンパスの製作過程の見学		日本画材工業(株)工場
10 月 10, 17, 31 日	支持体研究(「キャンパスの使命, 日本のキャンパス製造の歴史と現況」, 「世界のキャンパス製造の現況と展望, 今後の展開」, 「麻生地の手張り方法, キャンパス手張り, 再度・タッキング, バックタッキング方法」)	船岡廣正 船岡義正	日本画材工業(株)代表取締役 日本画材工業(株)製造部
10 月 19 日	ウィーンの版画事情(自作についても含む)	ミヒエル・シュナイダー	ウェプスター大学ウィーン校視覚文化助教授
10 月 24 日	日本の伝統的水性木版画技法の公開講義と実演	安達以作 牟及び彫師, 摺師	アダチ伝統木版画技術保存財団理事長ほか
10 月 29 日	見たままに	押江千衣子	作家
11 月 6 日	アクリル絵の具について	マーク・ゴールデン他	ゴールデン社最高経営責任者
11 月 7 日	「時代と絵画」～中村宏の「タブロオ機械」と「図画事件」～	中村宏	アーティスト
11 月 13, 14 日	社会とアート	秋元雄史	金沢 21 世紀美術館館長
11 月 19 日	自作について(褒賞の選考も含む)	筆塚稔尚	東京造形大学非常勤講師
12 月 3 日	現代アートの＜現在＞を読みとく。	市原研太郎	美術評論家
12 月 7 日	「近代洋画」再考～藤田嗣治, 青木繁, そして熊谷守一～	山下裕二	明治学院大学教授
12 月 10 日	「『絵画』という問題」	本江邦夫	多摩美術大学教授・府中美術館館長
12 月 11 日	＜＜驚田めるろ氏による作品講評ディスカッション＞＞	驚田めるろ	金沢 21 世紀美術館学芸員

観点 主体的な学習を促す取組

(観点到に係る状況)

本学部は、実技教育を中心とした学部であるため、アトリエや工房などの作品制作の場について、授業時間外の使用を認めている(アトリエ等の面積は資料 1-13 参照)。本学部の時間割は基本的に午前の実技科目、午後講義科目が配置されているので(取手校地は逆)、学生は、講義科目を履修していない空き時間や授業時間外もアトリエ等で課題制作や自由制作を行っている。

資料 1-13 アトリエ、実習室、工房等の数

校地	学部生用		大学院生等と共用	
	室数	面積(㎡)	室数	面積(㎡)
上野	43	3,686	106	8,204
取手	10	1,548	52	4,856

アトリエ等の時間外の使用時には、担当教員あるいは教育研究助手が輪番制で残るなどの工夫により、指導や機材の管理、施錠等を行うなど、可能な限り対応している。

また、前観点に既述した授業中や課題終了時や学期末に行われる講評会やプレゼンテーション時のディスカッションや個別相談等は、学生が作品制作について自ら試行錯誤を積み重ねつつ、主体的に取り組んでいくためになくはない確認点となっている。

さらに、本学部では、優秀な学生に対する各種の顕彰制度を設けている(資料 1-14 参照)。特に学部教育の集大成である卒業制作に関しては、全学生の作品を展示した卒業制作展を大学美術館と東京都美術館で毎年実施し、作品を一般に公開すると同時に図録(作品を制作しない芸術学科の卒業論文の概要も含む。)を作成・刊行し、優秀作品の買い上げや各賞を授与している。平成 18 年度からは、学生の実作活動の成果を広く社会に発信するため「藝大アートプラザ大賞」という学内コンペティションも設けた。このコンペでは、大賞、準大賞、藝大 BioN 賞の各賞を授与するほか、入選作は藝大アートプラザでの作品販売の機会を得られ、芸術家・作家としての自覚を促すことも目的としている。

これらの顕彰制度等は、学生のキャリア形成の観点からも意味があり、学習意欲を高めるという効果を生んでいる。

資料 1-14 美術学部・美術研究科の顕彰制度一覧

No	奨学金等名	対象学科・専攻
1	安宅賞	全学科・専攻
2	平山郁夫奨学金	全学科・専攻
3	〇氏記念賞	油画
4	俵奨学金	油画(版画)
5	久米桂一郎奨学基金	油画, 彫刻
6	内藤春治奨学基金	工芸(鍍金)
7	原田賞奨学基金	工芸
8	伊藤廣利奨学金	工芸, 美術教育
9	藤野奨学金	工芸(鍛金), 美術教育
10	吉田五十八奨学基金	建築
11	野村賞	全学科・専攻(※博士課程のみ)
12	上野芸友会賞	油画
13	菅原安男奨学基金	彫刻
14	セプテーニ奨学基金	油画(版画)
15	陶社会奨学金	工芸(陶芸)
16	お仏壇のはせがわ賞	文化財保存学(保存修復)
17	卒業・修了作品買上	全学科・専攻
18	サロン・ド・プランタン賞	全学科・専攻
19	芸大デザイン賞	デザイン
20	吉田五十八修了制作賞	建築
21	吉村順三卒業制作賞	建築

(参考)

外部団体が卒業・修了制作(論文)に対して直接に授与等するもの

1	台東区長賞(台東区)
2	取手市長賞(取手市)
3	荒川区長賞(荒川区)
4	杜賞(本学部同窓会)
5	上野恩賜公園「芸術の散歩道」東京都知事賞(東京都)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

本学部に限らず「美術」分野の大学に入学するには、他分野の大学とは全く異なる勉強をして受験に臨むことになる。つまり、本学部に入学者は、高校生の時点で明確に「芸術を学びたい」という意欲をもっており、自発的に学習を積み重ねるという経験をしてきていると言える。また、在学生アンケート(平成 19 年 6 月実施。回収率 16.5%)においても本学の魅力として「自分の好きな勉強ができる」とした者が 90%近くいることから、本学部の学生の学習意欲はもともと高いと言える。さらに専門分野によっては、自宅で制作を行うことが難しいものもある。

こうした背景から、本学部ではアトリエ等の制作場所の確保や時間外使用についての要求が大変高く、アンケートの自由記述でも学生からは「もっと広く」「もっと長く」という要望が大変多い。本学部では、資料 1-13(P. 1-12)のとおりアトリエ等を整備しているが、そうした高い要望の全てを十分に満足させることは難しい。

しかしながら本学の校舎面積(アトリエ等以外の講義室、その他も含む)は、都内の他の美術系大学に比して 1.5 倍～2 倍弱の面積を持っていること(朝日新聞社刊『大学ランキング 2008』に掲載されている学生 1 人当たりの校舎面積から比較した結果)、教員とともに学科・専攻の運営を行う教育研究助手を配置して、時間外の使用にもできるだけ対応していることから期待される水準にあるとした。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力**(観点に係る状況)**

講義科目については、シラバス又は第1回目の授業時に、授業のテーマ(目的)及び授業計画や内容、成績評価方法(試験実施するのか、レポート提出かなど)をあらかじめ学生に周知している(シラバスの記載例は資料1-10(P.1-10)参照)。

実技科目については、進度段階があるために学年に従って履修することを原則としている(分析項目Ⅱの資料1-6, 1-7(P.1-7~1-8)参照)。芸術学科を除く実技系の各科・専攻では、各課題に対する作品の提出によって成績が評価される。原則として、実技科目の成績は、担当教員だけでなく、各科・専攻の全教員の合議によって決定される。実技系の各科・専攻では、当該学科・専攻の中心科目(資料1-6(P.1-7)で例として挙げているデザイン科の場合、「デザイン実技Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ又は卒業制作」)が不可の場合、原級に留まることになる。

また、本学部では、各課題での制作作品や卒業制作について、展覧会、出版物或いはWebなど様々な方法で公開している。このような発表を通じて、外部の専門家からの批評や一般の美術を楽しむ人々からの声を聴くことは、教育成果つまり学生が身に付けた学力や資質・能力の水準を確認するということであり、かつ、学生が自らの能力の向上について考える場としての役割もある。在学生アンケートによれば、コンクールや作品公募等に応募したことのある者は、1年生16.7%, 2年生以上20.5%, 学外で展示、発表等を行ったことのある者は1年生17.8%, 2年生以上57.4%となっており、学生が自主的に成果発表を行っている例も多い(成果発表事例については資料1-15, 卒業生を含む学生の受賞については別添資料1-①(P.1-27~1-29)を参照)。

資料1-15 教育成果の発表例

※下記は大学、学部あるいは学科・専攻が組織として関与した学生の成果発表事例。学生が個人的に学内外で行った個展、グループ展、公募展等への出品は含まない。

	展覧会名(会場)	会期	出展学生学科・専攻等	概要
1	アート・パス'07 (取手校地)	H19.12.7 ～ H19.12.9	取手校地学生	取手校地の学生が中心となった年に一度の大規模な作品発表。大学という場が300を超える作品を持つ大展覧会場に姿を変え、また、学生の企画したイベントも多数行われる。展示される作品は、授業の課題によるものや有志によるもの等さまざま。またワークショップ、公開討論会、体験講座等、一般来場者が見るだけでなく、参加できるイベントも多数開催。
2	取手アートプロジェクト 2007-はじまりは隣の家 のアーティスト- (取手校地及び取手市 内各所、利根町、柏 市、松戸市)	H19.11.9～ 11.25の金土日 祝 9日間	美術学部・美術 研究科の各学科・専 攻、音楽学部 音楽環境創造科	取手アートプロジェクト(通称TAP)は、東京芸術大学と取手市行政機関(市役所、教育委員会・取手市文化事業団)および市民(アート取手・とりで美術ピラミッド)が、三位一体となって実行委員会を組織し、平成11年より毎年行なっている文化事業。本学からは美術学部先端芸術表現科、音楽学部からは音楽環境創造科が中心となり、それぞれ授業の一環として企画・運営に取り組んでいる。

3	東京芸術大学 卒業・修了制作展 (東京都美術館, 大学 美術館, 同陳列館, 同 正木記念館, 絵画棟, 彫刻棟, 中央棟, 総合 工房棟, 大学会館, 大 学美術館前広場 他)	H20.2.21 ～ H20.2.26	美術学部・美 術研究科の 各学科・専攻	美術学部卒業者, 美術研究科修士課程及 び博士後期課程修了者の卒業・修了生作 品を展示。学部生は, 東京都美術館・大学 構内, 大学院生は大学美術館・陳列館(大 学構内)で開催。(先端芸術表現科・専攻は ドキュメントのみの展示で作品展示は, 別に 開催。)芸術学科・専攻の卒業論文の概要 も含め, 作品集を刊行している。
4	「Project the Projectors 2008」 先端芸術表現科 卒 業・修了制作展 (横浜BANKart NYK(学 部4年), 横浜ZAIM(修 士2年))	H20.1.19 ～ H20.1.27	美術学部先 端芸術表現 科	1999年度に設置の先端芸術表現科の卒業 制作展。今回は, 学部6期生と修士4期生に よる。「project the projectors」という展覧会 名は2003年度(第1期)から継承しているも の。このテーマは「企画者」という意味である projectorたちが, 自分自身をさらに前方に (pro)投げる(ject)ことをあらわしている。
5	学生交流展 『美の環』 (大学会館他)	H19.10.4 ～ H19.10.14	美術学部・美 術研究科	本学に留学している中国人学生, 韓国人学 生を中心として日本人学生の作品も含め3カ 国の美術作品を通して, 共通点や際につい て相互理解を深めるもの。
6	藝大アーツin丸の内「ア ート展」(丸ビル)	H19.11.9 ～ H19.11.10	美術学部・美 術研究科	学生たちによる十二支をテーマとした作品の 展示
7	第2回 藝大アートプラ ザ大賞入賞作品展(藝 大アートプラザ)	H19.12.4 ～ H19.12.24	美術学部・美 術研究科	芸術と社会との新しい出会いの場として設 立された藝大アートプラザにおいて, 今回初め て, 学生の制作活動の一端を学外に発信す ることを目的としたアートコンペである「藝大ア ートプラザ大賞」(第2回の作品テーマは「生 命」)を実施した。厳正な審査を経て選ばれ た入選作品を展示した展覧会。展示とともに 販売も行った。
8	東京芸大 SPRING BOARD 2007 Part1 (上野駅 Break Station Gallery)	H19.4.3 ～ H19.4.19	日本画, 油画 美術教育	本展は, 6回目の開催となる。平成18年度の 買い上げ賞(本学では, 卒業する学部生と 修了する大学院生による, 卒業・修了制作 展を例年2月下旬に開催しており, 成績優秀 な作品は買い上げられ, 大学に保管されるこ とになっている。)を受賞した学生たちによる, 成果発表のグループ展。卒業・修了制作展 に発表されたものと関連する作品が, この展 覧会のためにあらたに制作され, 発表され た。本学大学美術館が企画協力。 Part1は3名, Part2は6名が出展。
9	東京芸大 SPRING BOARD 2007 Part2 (上野駅 Break Station Gallery)	H19.4.21 ～ H19.5.10	日本画, 油画 彫刻, 建築, 美術教育	
10	五人五色(上野駅 Break Station Gallery)	H19.8.25 ～ H19.9.27	日本画, 油 画, デザイン	本学藝祭実行委員会との共同企画展。参 加学生は, 学部生, 院生とさまざまで, 科も ばらばら。上野駅という多くの人が毎日通る, 日常的な場所で展示出来る素晴らしい機 会。5名が参加。
11	芸大生による動物日本 画展 (上野動物園西園のズ ーポケット(動物園ホー ル1階))	H19.11.20 ～ H19.12.2	日本画	美術学部日本画専攻2年生が, 上野動物 園内で動物をスケッチし, それをモチーフに 動物画制作に取り組んだ作品の展示。動物 画は, 日本画における伝統の一つである「花 鳥画」の大半を占める重要なテーマであり, 日本画教育の根幹を成すとさえいわれてい る。作品24点を園内で展示。
12	版画の彩展2007 第32回 全国大学版画 展 (町田市立国際版画美 術館)	H19.12.1 ～ H19.12.16	版画	全国の美術系大学の版画作品展。選ばれ た美術作品は収蔵される。研究室では学生 に学外におけるコンペに積極的に参加するこ とを奨励しており, 本学版画専攻の学部4年 生3名・大学院修士課程1年生8名, 合計1 1名が参加。

13	「金属のコトバ」展 東京藝術大学鍛金研究室卒業修了制作 (天王洲セントラルタワー アートホール(1F))	H19.5.14 ～ H19.6.29	鍛金	卒業作品, 修了作品の展示(9名)
14	JAPAN TEX 2007 クリエーターズタウン『触 覚の化現』 (東京ビッグサイト)	H19.11.21 ～ H19.11.24	染織	全国30校の学生による作品展示。学生たちが、国内の企業や団体から提供された3つの素材〈糸・布・和紙〉を使用し、平面・立体・半立体の作品を制作して、JAPANTEX会場で発表するもの。本学染織専攻生が取り組み、研究室スタッフも指導に当たった。
15	Places and Spaces I Have Never Been 国際交流デザイン展 ー日本・イギリス・韓国ー 東京藝術大学, UCCA 芸術大学, 中央大学校 の3校の授業交換による 学生作品 (大学美術館陳列館)	H20.1.10 ～ H20.1.20	デザイン科	授業交換というかたちで学生作品の交流展を3年間通して行っていく企画。第2回目としてUCCA芸術大学出題の“Places and Spaces I Have Never Been”をテーマに3大学の学生が制作を行い、各校10作品(計30作品)選出し展示した。この交流を通してそれぞれの国におけるデザイン意識を探ると同時に教育や文化を比較し、お互いに刺激のある作品を生み出す場としていくことを目的としている。(昨年の第1回は本学デザイン科の3年生の授業である『伝統とデザイン』を課題に行った。)
16	「すわる・はかる・あむ ー 藝大建築科教育100年 のあゆみー」 (総合工房棟4階)	H19.9.25 ～ H19.10.8	美術学部建築科	東京美術学校で本格的な建築教育が開始されてから100年の節目であることを記念して、美術学部建築科の特色ある教育プログラムとして知られている椅子制作(昭和25年～)・古建築実測(昭和35年～)・機関誌「空間」の刊行(昭和46年～)の成果を、建築科卒業生の協力を得て公開・展示したもの。
17	学部一年生椅子展 「都市を読むための椅子」 (総合工房棟2階多目的ラウンジ)	H18.9.25 ～ H19.10.8	美術学部建築科	本展は、学部1年生が課題として制作した「椅子」を展示するもの。「すわる・はかる・あむ」と同時開催。
18	学部二年実測展 (総合工房棟4階メディア スタジオ)	H19.9.25 ～ H19.10.8	美術学部建築科	建築科演習科目として実施している実測の成果図面の公開展示。「すわる・はかる・あむ」と同時開催。なお、本年度の実測対象は東京国立博物館内に所在する歴史的建造物3棟(九条館・春草廬・転合庵)。
19	1年生実技:概念構築 展覧会“Flake box” (取手校地メディア教育 棟1階ピロティ, ギャラリー)	H19.5.14 ～ H19.5.20	美術学部先端芸術表現科	学部1年生の実技プログラム〈概念構築〉の成果発表展覧会。入学から1ヶ月半の1年生のはじめての作品展示。
20	TRUNK TRANCE (取手校地 メディア教育棟1階 ピロティ)	H19.7.13	美術学部先端芸術表現科	佐藤研究室による作品展。限定されたユニークな場所や条件を選び、研究室メンバー全員で実験的な表現を試みるプログラム。
21	SOUND AND VISION 2007展(ZAIM)	H19.10.12 ～ H19.10.21	美術学部先端芸術表現科	〈音と光〉を軸に、見えざる物を見せて行く作業を行っているアーティストを中心に、音と光の作品を集めた展覧会をおこなった。
22	先端芸術表現科 安宅 賞・平山賞受賞展 「デジャメーヴュ 既／ 未視感」 (絵画棟1階ギャラリー)	H19.10.29 ～ H19.11.2	美術学部先端芸術表現科	平成19年度に安宅賞を受賞した笹川治子さん(学部3年), 平山郁夫賞を受賞した佐々木友輔さん(学部4年)による展覧会。先端芸術表現科としては初の試み。

観点 学業の成果に関する学生の評価**(観点に係る状況)**

在学生及び卒業・修了生アンケートでの関連設問の回答結果は、資料 1-16 に示す通りである。このアンケートによれば、1 年次における授業の満足度は 85% を越えており、十分な評価を得ているといえよう。2 年生以上の学生で能力の向上を実感している者は 64.8% で、この数値は必ずしも高いとは言えないが、本学を第 1 希望として入学する者がほとんどを占め、潜在的に期待値が高いという背景を考えれば、十分な評価を得ていると考えられる。これは、卒業生の冷静な目による評価が 80% を越えている点からも妥当な判断といえよう。

資料 1-16 在学生アンケート及び卒業・修了生アンケート関連設問抜粋(1)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	大学進学の際、本学はあなたの第一希望でしたか	第 1 希望	1 年 88.9% 2～4 年 91.8%
	(学部 2～4 年生の方)あなたは、入学前に比べて自分の能力が向上したと思いますか	想像以上に向上した＋向上した	64.8%
	受講している授業の内容や進め方についての満足度 専門教育科目(実技科目)についての満足度	満足である＋どちらかといえ ば満足である	1 年 85.6% 2～4 年 66.4%
	受講している授業の内容や進め方についての満足度 専門教育科目(講義科目等)についての満足度	満足である＋どちらかといえ ば満足である	1 年 82.2% 2～4 年 68.0%
	本学での教育・学習、学生生活などに関して、全体として「良い」、「楽しい」と感じるなど、満足していますか	満足である＋どちらかといえ ば満足である	1 年 83.3% 2～4 年 78.7%
卒 業 ・ 修 了 生	あなたの大学時代の生活は、全体としてどの程度充実していましたか	非常に充実していた＋どちら かといえれば充実していた	83.8%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか 専門教育科目	とても役立っている＋役立 っている	81.3%

※卒業生アンケート：平成 19 年 8 月実施。卒業後 5 年以上経過した者から約 2000 名を抽出して行った。

回収率 25.6%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

観点ごとの状況で既述のとおり、展示等の実施状況(資料 1-15(P. 1-15～1-17)参照)、受賞の状況(別添資料 1-①(P. 1-27～1-29)参照)、アンケートでの在学生・卒業生からの意見の聴取結果等(上記、資料 1-16 参照)などからみて、学生からの高い期待に対して、全体としては十分な評価を得ていると考えられる。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業後の進路の状況

(観点に係る状況)

在学生アンケートによれば、学部卒業後の進路について、本学部2年生以上の42.7%が進学又は留学を考えており、就職を考えている者は34.5%、作家活動あるいは起業を考えている者が26.4%であった。(複数回答した者あり)

実際の進路状況は、半数以上が大学院へ進学しており、多くの学生が表現者等としてさらに高い水準を目指して研鑽を重ねていることが分かる(資料1-17 参照)。就職者の就職先は、本学部の教育内容を反映して、デザイン関係、広告関係の企業・職種となっている(資料1-18 参照)。また、統計上未定・他となっている者は、作家活動等を目指して制作等を行っている者が多く含まれていると考えられる。

資料 1-17 美術学部 平成 20 年 3 月 卒業者の進路状況

(H20.5.1 までに判明した分)

区 分	卒業者	就 職		非常勤 自営	進 学				未定・ 他
		教 職	企 業 等		大学院 (本学)	学部等 (本学)	他大学等 (国内)	海外 留学	
日本画	27			2	13				12
油画	52		1	3	33				15
彫刻	20				16				4
工芸	31		1	2	23				5
デザイン	46		11	4	20				11
建築	18			1	12				5
先端芸術表現	30		3	4	12				11
芸術学	17		7	1	7				2
計	241		23	17	136				65

資料 1-18 最近3年間の卒業生の主な就職先企業等

ブリモジヤパン(宝飾), エムアウト(宝飾), 東京トレーディング(宝飾), 任天堂(ゲーム), ILYA(インテリア), 新日本印刷(印刷), 日立工機(プロダクツ), アルビオン(デザイン), 博報堂(広告), 博報堂プロダクツ(プロダクツ), 資生堂, マッキャンエリクソン(広告), 日建スペースデザイン(デザイン), 近江デザイン事務所(広告), NHK(制作), ヒロタ(服飾), ベルエトワール(宝飾), アサツディ・ケイ(広告), GONZO(アニメ), GKデザイン機構(広告), 三恵企画(イベント企画), ディスコ(広告), 電通(広告), 日本デザイン機構(広告), POLA化粧品(パッケージ), 船場(商業施設デザイン), 伝創社(広告), ピークス(出版), アダチ版画研究所, 大倉陶園(洋食器), 花王(デザイン), アデックスデザインセンター(グラフィック), 任天堂(ゲーム), 内田洋行(総合職), レブハウス(デザイン), イリア(デザイン), コクヨ(デザイン), パナソニック(広告), ユーコー(ゲーム), 精クリエイティブ(商品企画), アナミコレクション(デザイン), ユーリーグ(出版), 小学館(出版), 日刊スポーツ(記者), 福音館書店(出版), 水戸芸術館(舞台技術), ボルテージ(モバイルコンテンツ)

なお、卒業生アンケートによると、企業等に勤めているものが27.8%、教員として勤めている者が27.8%、自由業(=作家活動を行っている者)47.3%となっている。(勤めながら

作家活動をしている者などがいるため合計は 100%を超える)また、卒業後も個展の実施やコンクール等への参加或いは生涯学習指導など、本学での専門を活かした活動を行っている者が多いことが分かる(資料 1-19-1, 1-19-2 参照)。

資料 1-19-1 卒業生アンケート:現在の職業

(複数回答可 単位%)

会社員、 会社役員、 団体職員	高等専門 学校 教員(大学、 高等専門 学校以外)	教員(大学、 高等専門 学校以外)	公務員 (教員を除く)	自営業主又は その手伝い	自由業(芸術家、作 家、演奏家など)	パートタイマー ・フリーター	学生	主婦(夫)	その他	無回答
27.8	17.0	10.8	3.3	14.5	47.3	6.6	0.4	11.2	8.7	0.4

資料 1-19-2 卒業生アンケート:本学卒業・修了後の創作活動状況

(複数回答可 単位%)

参加したことがある 公的なコンクールや コンペティション等に	受賞したことがある 公的なコンクールや コンペティション等で	個展やコンサートな どの活動をしている	新聞、雑誌などの メディアで紹介され たり、執筆したこと がある	専門性を生かし て、ボランティア活 動、地域活性化活 動、生涯学習指導 などを行っている	その他	該当なし	無回答
41.1	28.6	46.5	47.7	25.7	7.1	13.3	4.6

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

在学生及び卒業・修了生アンケートにおける回答結果からみて、保護者或いは本学卒業生の勤務先等からは、十分な評価を得ていると考えられる(資料 1-20 参照)。

また、本学部在学生或いは卒業生は、活発な創作活動・成果発表を行っており(資料 1-15, 資料 1-19-1, 1-19-2 参照)、その活動に対しては、受賞(別添資料 1-①(P. 1-27~1-29)参照)に見られるように高い評価を得ているだけでなく、社会からの関心も高く、別添資料 1-②(P. 1-30~1-32)に例を示したとおり、新聞等でその活動が数多く紹介されている。

資料 1-20 在学生アンケート及び卒業・修了生アンケート関連設問(2)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在学生	あなたの保護者は、あなたの入学後の本学に満足していると思いますか	満足していると思う+どちらかといえば満足していると思う	1年 93.3% 2~4年 89.3%
卒業・修了生	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか(専門教育科目)	とても役立っている+役立っている	81.3%
	(企業、団体等に所属している方)職種や仕事は、大学時代の専攻等とどのようなかわりを持っていますか	非常に関係のある仕事である+どちらかといえば関係のある仕事である	87.0%
	(企業、団体等に所属している方)所属先での、東京芸術大学又は卒業生・修了生への評価をどのように感じていますか	非常に高い評価を受けていると感じる+どちらかといえば高い評価を受けていると感じる	77.8%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

本学部の卒業生の半数以上が、表現者等としてさらに高い水準を目指して本学大学院へ進学していることは、本学部の教育指導に対する学生の肯定を示していると考えられる(資料 1-17(P. 1-19)参照)。

また、アンケート結果(資料 1-20(P. 1-20)参照)や受賞の状況(別添資料 1-①(P. 1-27～2-29)参照)、新聞記事等(別添資料 1-②(P. 1-30～1-32)に現れている社会の本学部在学生・卒業生への評価や関心の高さ等から見て、在学生、卒業生、就職先、社会一般など各関係者からの期待に十分応えていると考えられる。

Ⅲ 質の向上度の判断

美術学部では、アトリエ等を基盤とした少人数精鋭教育を行い、従来から質の高い教育内容を保持してきたと考えている。一方、これまでの教育方法に加え、本中期計画期間内に以下のような新たな取り組みを開始し、さらなる質の向上が実現できたと判断している。

①事例1「共同利用施設の活用」(分析項目：Ⅰ教育の実施体制)

(質の向上があったと判断する取組)

美術学部の教育実施体制の特徴は、アトリエなど創作の場を活用し、教員と学生による1対1のやりとりを重視した実践的少人数教育は百年以上の伝統である。この伝統を発展的な取組みとして教育の初期段階で学科の枠を超えた横断的なつながりを持つことが新たな表現の創造にとって重要であるとの考えから、取手校地の開設(平成3年10月)や総合工房棟を新設(平成16年)した。これにより、それまでの各科単位の固定したアトリエに加え、共通工房や共同利用スペースを利用した幅広い創造的な制作スペースの活用が可能となり、学生の自主的取り組みや学科横断的な取り組みが促進された(下記資料1-21参照)。例えば、金属工芸系の工房を例に挙げると工芸科以外の学生も多く利用していることが下記の資料より見て取れる。また、学年が高くなるほど技法などへの要求も高くなり新設した各種工房はそれに応える指導者および設備を備えており、レベルの高い教育を可能にしている。

資料1-21 平成19年度共通工房使用状況

	講座 使用者	日本画		油画		彫刻		工芸		デザイン		建築		先端		美教		計	
		実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ	実数	延べ
工 機 械 室	金工工房	学部	1	22	2	24	1	2	5	75	5	87	3	21	4	34		21	265
	大学院	1	11			3	17	9	95	1	51							14	174
	教員等			1	2		5	1	2			1	1	1	1	2	16	6	27
	計	2	33	3	26	4	24	15	172	6	138	4	22	5	35	2	16	41	466
造 室	金工工房	学部	0	0	3	77	1	57	1	31	4	94	1	20	2	37		12	316
	大学院					2	54	7	128	1	16							10	198
	教員等					1	5	2	47									3	52
	計	0	0	3	77	4	116	10	206	5	110	1	20	2	37	0	0	25	566
表 面 処 理 室	金工工房	学部	2	5	5	28			14	338								21	371
	大学院			1	1			6	144									7	145
	教員等							2	41									2	41
	計	2	5	6	29	0	0	22	523	0	0	0	0	0	0	0	0	30	557
木 材 造 形 工 房	学部	26	93	14	116	1	1	7	74			14	76	4	34			66	394
	大学院	1	35	6	66	1	1	12	466	1	3			1	12	1	5	23	588
	教員等	1	1	2	2	3	22	5	208							3	13	14	246
	計	28	129	22	184	5	24	24	748	1	3	14	76	5	46	4	18	103	1228
塗 装 造 形 工 房	学部	1	23	7	84	3	77	9	80	5	38	1	2	5	56			31	360
	大学院			5	111			6	73	1	15			1	7			13	206
	教員等																	0	0
	計	1	23	12	195	3	77	15	153	6	53	1	2	6	63	0	0	44	566
石 材 工 房	学部	1	17	3	30	5	80	6	144	2	53	1	15	4	12			8	351
	大学院			7	73	8	84	1	5	1	3					1	18	9	183
	教員等			4	15	6	30							1	1	2	122	13	168
	計	1	17	14	118	19	194	7	149	3	56	1	15	5	13	3	140	53	702

※このほか安全講習、公開講座に使用。

②事例2「プレゼンテーション教育への取り組み」(分析項目：Ⅱ教育内容)

(質の向上があったと判断する取組)

美術学部では、基本的な技術・技法の教育に力を入れてきた。しかしながら、近年の美術作品の多様化や社会性の拡大、ネットワークの急速な進展など高度情報化社会を迎え芸

術表現や社会への情報の発信方法が大きく変化してきている。近年、作品の性格をわかりやすくプレゼンテーションする技法の教育が注目されてきている。また、パーソナルコンピュータの急速な発展によりそれを用いた新たな芸術表現技法が生まれることが考えられる。このニーズを受けて、芸術情報センターと連携した計算機教育やプレゼンテーション教育を開始し、一定の成果を得ている（資料 1-8 (P. 1-9) 参照。また、例として下記、資料 1-22 の平成 18 年度に開講した建築科対応の C A D 図法演習シラバスを参照）。また、デザイン科では、自己の創作研究の内容をいかに第三者に伝えるか、また作品におけるコンテンツの重要性の高まりを受けて、平成 16 年からデザイン技法のひとつとして社会で活躍する一流の専門家による「プレゼンテーション」授業を開講し、学生の伝達能力の質の向上をはかっている（資料 1-7 (P. 1-8) 参照）。

資料 1-22 C A D 図法演習シラバス

科目番号	5A401	授 業	CAD図法演習	教員名	古積 新一
通年	金 4	科目名	(美術学部専門基礎科目・建築科専門科目)	4 単位	学部生、大学院生、建築科1年 (必修)
授業テーマ		コンピュータ支援による設計・製図はCAD (Computer Aided Design) と呼ばれ、建築やデザインのみならず、産業界のあらゆる分野の設計業務に幅広く利用されている。この授業ではCADの概要を学習し、JISで定める製図法に則って、平面図形や立体図形の幾何学的性質を理解しながら、自分の専攻分野でのCADを活用する能力を身に付ける。			
授業計画及び内容		〈前期〉 1 ガイダンス 2 コンピュータの基本操作 3 CADの基本概念 4 2次元図形作画 5 2次元図形作画 6 2次元基礎製図実習 7 三面図と投影法 8 3次元基礎モデリング 9 〃 10 レンダリング&テクスチャマッピング 11 3次元基礎モデリング実習 12 〃 〈後期〉 1 CADとCAM／CAE、ネットワーク 2 シミュレーション 3 3次元応用モデリング 4 〃 5 3次元応用モデリング実習 6 〃 7 プレゼンテーション 8 ビデオ編集ソフト／機器の操作 9 CGアニメーション 10 〃 11 CGアニメーション実習 12 〃 (前後期とも13回目以降は、進度調整のための予備日とする。)			
受講に当たっての留意事項	演習設備の関係で定員25名となる。応募者多数の場合、建築科1年 (必修) を除き、抽選となる場合がある。				
成績評価方法	出席と演習課題作品での総合評価				
教科書／参考書	資料配布およびWEBページ				
備考(オフィスアワー)	電子メール kozumi@fa.geidai.ac.jp 随時				

③事例 3 「講評会の積極的活用」(分析項目：Ⅲ教育の方法)

(質の向上があったと判断する取組)

従来から美術学部の各科では、実技課題の講評会を積極的に行い、学生対教員・教員対教員が公開の席で作品に対する評価をぶつけあうことによる教育効果を重視してきた。それと同時に、多くの教員、多くの学生が参画することにより視点や視野の拡大にもつながる。これも少人数個別教育のなせる成果で、本学の特徴でもある。その経緯をふまえ、さらに講評会をFDの一環としても位置付け、教員間で実技課題の内容を互いに理解し、その質の向上をはかる場として活用している。なお講評会の頻度と参加者に関しては建築科の事例を資料 1-23 として以下に掲載した。

資料1-23 平成19年度 建築科講評会一覧

月 日	課題名	学 年	参 加 教 員
5月15日(火)	建築基礎Ⅰ	1	片山・稲葉・福井・武石
5月17日(木)	住宅Ⅰ	2	北川原・榎木
5月17日(木)	中規模建築Ⅰ	3	西沢・柳澤
5月31日(木)	地区設計	4	菊池・高田・赤松
6月6日(水)	住宅演習	2	堀・榎木
7月4日(水)	家具	1	黒川・羽藤・福井・武石
7月4日(水)	住宅Ⅱ	2	山口・六角(美)
7月4日(水)	集合住宅	3	片山・高橋・稲葉
7月4日(水)	プレディプロマ	4	北川原・榎木
7月11日(水)	前期合同講評会	全	谷口・黒川・益子・六角・北川原・片山・光井・野口・柳澤・高田・菊池・高橋・堀・山口・西沢
11月7日(水)	教育施設	2	黒川・羽藤
11月14日(水)	設計基礎Ⅱ	1	益子・光井・六角(美)・野村・福井・武石
11月21日(水)	卒制中間審査会	4	黒川・益子・六角・北川原・片山・金田・光井・野口・柳澤・高田
12月5日(水)	中規模建築Ⅱ	3	川村・高田
12月6日(木)	架構	2	金田・地引
12月12日(水)	後期合同講評会	全	谷口・黒川・益子・六角・北川原・片山・金田・光井・野口・柳澤・高田・川村
1月16日(水)	卒制講評会	4	黒川・益子・六角・北川原・片山・金田・光井・野口・柳澤・高田
1月17日(木)	修制修論講評会	院	黒川・益子・六角・北川原・片山・金田・光井・野口・柳澤・高田
1月25日(金)	科内コンペ	1 ～ 3	黒川・益子・六角・北川原・片山・金田・光井・野口・柳澤・高田

④事例4「学生作品の外部への公開」(分析項目:Ⅳ学業の成果)

(質の向上があったと判断する取組)

美術学部では、課題及び卒業制作の作品を積極的に外部に公開する機会を設け(資料1-15(P.1-15～1-17)参照)、学生にも外部展覧会等への出品を奨励している。そのために、デザイン科のプレゼンテーションルームの開設や彫刻科の玄関ギャラリーの新設など学内ギャラリーの充実に努めた。これらのギャラリーが学内外に公開している。近年はネットワークを用いたギャラリーも多く新設しており、直接お越しいただけない多くの方々へも成果を公開するように努めている。これには著作権の問題も内包しており、学生の制作に加えての新たな課題として認識が生まれるなど勉学の幅を広げる効果がある。これらのことは自ら展覧会を主催して学ぶことであり、まさに生きた教育効果があると考えている。さらに、これらのことは、学生の学業成果を発表する意味に加え、美術学部における教育内容を社会に提示し、その批評を受けるという意味でも重要なものと位置づけている。公開された成果は、各種報道機関で取り上げられ(別添資料1-②(P.1-30～1-32)参照)、ま

た多くの外部機関の賞を受賞するなど（別添資料 1-①（P. 1-27～1-29）参照），顕著な成績をあげている。これらのことは学生の立場からすると自信にもつながり，さらなる創作意欲の向上を醸し出すと同時に幅広い生きた知識を身につける絶好の機会であると考えている。

2. 美術研究科

I	美術研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	2 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・	2 - 3
	分析項目 I 教育の実施体制	・ ・ ・ ・ ・	2 - 3
	分析項目 II 教育内容	・ ・ ・ ・ ・	2 - 6
	分析項目 III 教育方法	・ ・ ・ ・ ・	2 - 9
	分析項目 IV 学業の成果	・ ・ ・ ・ ・	2 - 16
	分析項目 V 進路・就職の状況	・ ・ ・	2 - 20
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	2 - 23

I 美術研究科の教育目的と特徴

東京芸術大学大学院美術研究科は、これまで美術各分野において数多の時代を代表する作家・研究者・教育者を輩出してきた。本研究科は、こうした伝統の中で培われてきた創造性を身に付け、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮しつつ、国内外の美術各分野で指導的な立場に立つことができる人材の育成をめざしている。そこで本研究科は個別指導の徹底と高度な芸術研究を行うことを特徴とし、以下に示す教育・研究環境の整備に努めている。

1 東京芸術大学大学院美術研究科では、創作者・研究者として指導的な役割を期待される個々人の才能を伸ばすため、個人の意志と創造力を重視した創作研究の実践に特に配慮した教育を行う。この中で徹底した実技教育を実施し、カリキュラムもそれを重視した構成を採用している。

2 東京芸術大学大学院美術研究科では、自由で斬新な創造性を発現するための創作研究を行うため、教員の指導のもとにある研究室のほかに、各種アトリエや工房などの教育環境充実に特に配慮している。

3 東京芸術大学大学院美術研究科では、現代の美術が求められる社会性という観点から、大学構内という枠を超えて、学生が主体的かつ積極的な創作活動をおこなうための環境の提供に努め、学外に複数の創作拠点を確保し、様々な面での社会交流の中で学生の創造力を伸ばす試みを行っている。これは大学の社会貢献という観点にも貢献するものである。

4 東京芸術大学大学院美術研究科は、創作者・研究者として活動することが期待される個々人の才能を伸ばすには、互いに切磋琢磨する研究環境の充実が重要と認識し、そのために各種奨励制度等を用意すると同時に、講評会などの場を活用している。

5 東京芸術大学大学院美術研究科では、高いレベルの創作研究活動を学生に要求するには、教員が率先垂範して高度な創作研究活動を行うことが必須であり、そのための体制を確保している。

想定する関係者とその期待

本研究科が想定する関係者とは、美術学部と同様に、広義には美術に深い関心を寄せる全ての人々、狭義には在学生及び修了生・美術領域と関連する企業や公共機関である。しかし、より高度な創作研究活動を行う研究科には、美術の各分野で指導的な役割を担う人材の供給が期待されている。

Ⅱ 分析項目ごとの水準の判断

分析項目Ⅰ 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

美術研究科修士課程は、絵画、彫刻、工芸、デザイン、建築、先端芸術表現、芸術学の7専攻と、大学院独立専攻である文化財保存学の8専攻から構成されている。博士後期課程は、美術専攻と文化財保存学専攻の2専攻からなり、美術専攻には日本画、油画、彫刻、工芸、デザイン、建築、先端芸術表現、芸術学の8研究領域、文化財保存学専攻には保存修復、保存科学、システム保存学の3研究領域から構成されている。

本研究科の専任教員は専攻または研究領域に即してそれぞれ配置されている。システム保存学については、本研究科の連携研究機関である東京文化財研究所(台東区上野公園13-43:本学上野校地と隣接)の研究者を本学専任教員として配置している(資料2-1, 2-2, 2-3 参照)。

資料2-1 学部と研究科の関係※()は平成19年度入学定員。

美術学部	美術研究科	
	(修士課程)	(博士後期課程)
絵画科	絵画専攻(41)	美術専攻(25)
彫刻科	彫刻専攻(15)	
工芸科	工芸専攻(28)	
デザイン科	デザイン専攻(22)	
建築科	建築専攻(16)	
先端芸術表現科	先端芸術表現専攻(24)	
芸術学科	芸術学専攻(21)	文化財保存学専攻(10)
	文化財保存学専攻(18)	

資料2-2 美術研究科の教育研究組織 ※教員数は資料2-3を参照

専攻	専任教員の専門分野
絵画	日本画、油画、版画、壁画、油画技法材料
彫刻	石彫、木彫、金属、彫塑
工芸	彫金、鍍金、鍛金、漆芸、陶芸、染織、木工芸、ガラス造形
デザイン	視覚・演出、視覚・伝達、視覚・構成、空間・演出、空間・設計、機能・演出、機能・設計、映像・画像、環境・設計、描画・装飾造形
建築	建築設計、構造計画、環境設計、建築理論
先端芸術表現	地域と芸術、言語と身体、科学技術と表現、素材と創造性
芸術学	美学、工芸史、西洋美術史、日本・東洋美術史、美術教育、美術解剖学
文化財保存学	保存修復、保存科学、システム保存学

(教員総覧、各学科HP、設置資料等より作成)

資料2-3 専任教員等の数 (H19.5.1現在)

専攻	専任教員数							学内 兼務 教員	学外兼務教員			教育 研究 助手
	性別	教授	准教授	講師	助教	助手	合計		教員からの兼務	教員以外の兼務	合計	
絵画専攻	男	10	7	1	2	0	20	9	4	33	37	113
	女	0	0	0	0	0	0					
彫刻専攻	男	5	2	0	1	0	8					

	女	0	0	0	0	0	0					
工芸専攻	男	7	5	1	1	0	14					
	女	0	0	0	1	0	1					
デザイン専攻	男	6	4	0	2	0	12					
	女	0	0	0	0	0	0					
建築専攻	男	5	2	0	1	0	8					
	女	0	0	0	0	0	0					
先端芸術表現専攻	男	3	6	0	0	0	9					
	女	2	0	0	1	0	3					
芸術学専攻	男	5	7	0	1	0	13					
	女	0	1	0	2	0	3					
文化財保存学専攻	男	11	3	0	1	0	15					
	女	0	1	0	1	0	2					
合計	男	52	36	2	9	0	99					
	女	2	2	0	5	0	9					

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本研究科では、美術学部と同様に美術の諸領域における実技指導が教育の中心になっており、各専攻のアトリエや工房、研究室での少人数のグループ指導をおこなっている。このことは、専門性の高い大学院レベルの教育に必須と考えており、個々の学生と教員の間で適宜意見のやりとりをしながら、学生の個性やスキルに応じたマンツーマン的な指導を行っているため、教員は日常の学生の反応を見ながら、適宜指導方法を見直しながら進めている。また、適宜あるいは学期末に講評会等を開催し、教育内容及び学生の到達点を複数の教員でチェックする体制をとっている。こうした日常的な見直しや講評会や教員会議での教員同士のディスカッション等をつうじて、教育内容や方法について改善を行っている。

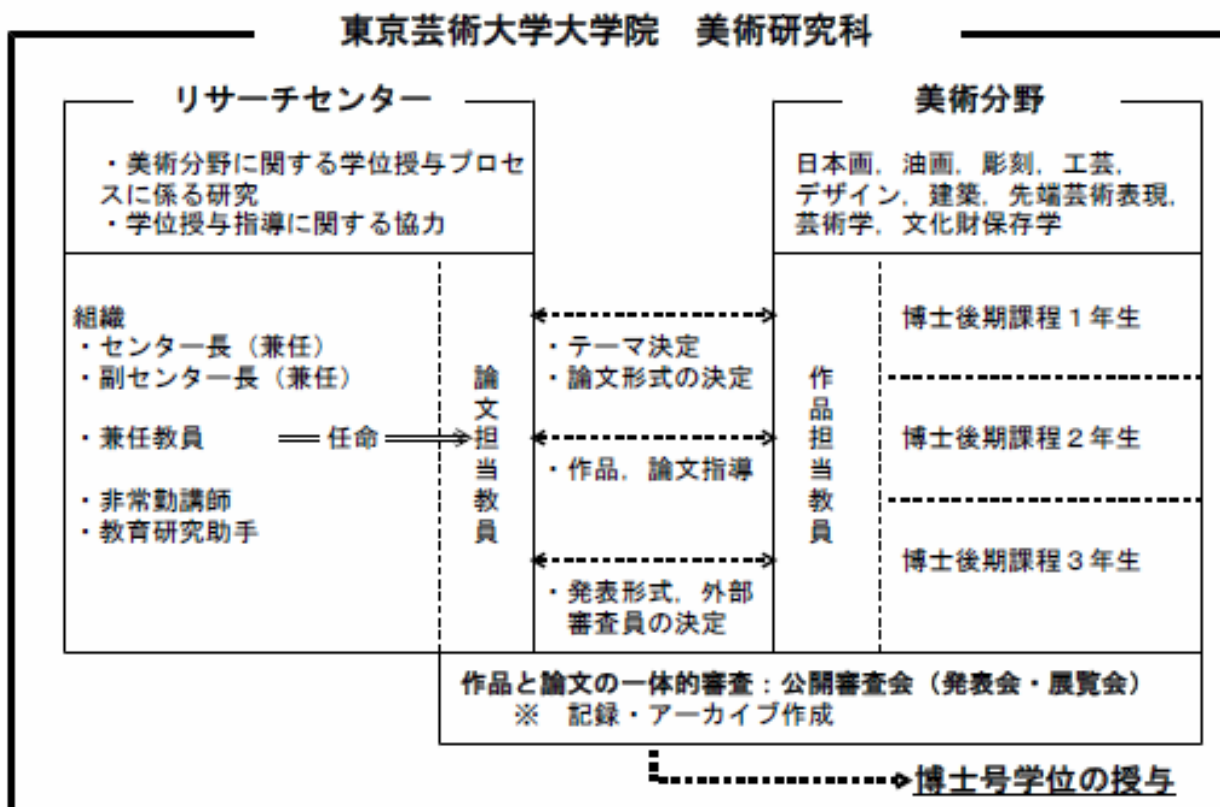
さらに、本研究科は美術学部との一貫性が大変強い(資料 2-1 参照)ため、研究科全体の教育内容、教育方法の改善、あるいはFD等の事項については、「美術学部教務委員会」で一体的に検討することとしている。

さらに、各科ごとのアトリエや工房での指導を中心としていることから生じる本研究科(あるいは美術学部)としての総体としての意味や方向性、あるいは学科や専攻を超えた横断的教育研究についての議論や考察が生まれにくく、教育指導方法が固定化しやすいという問題を克服するため、研究科長(学部長)のリーダーシップのもとに平成18年度に「芸術と教育－美術学部教育の現在」と題した学内での相互理解と自己点検・評価を行う特別プロジェクトを実施した。このプロジェクトはFDの観点からも重要なものと位置付けており、学科や専攻単位で講義・実習などの内容を再検討し、それぞれの内容が教育目的に適したものであるかどうかの吟味を行い、報告書では、美術研究科としての教育内容の公開及び課題等の提示も記載した。

本研究科の博士後期課程では、実技系の各領域の博士学位審査において、博士論文のみによるのではなく、「博士作品＋博士論文」による学位審査を行ってきた。博士作品の審査にあたっては、これまで研究科運営委員会による総合的な判断を行ってきたが、18年度にこれまでの議論と経験をふまえ、学位申請までの手続きについて検証を行った。この結果、審査終了後に行っていた博士作品の展示公開を、19年度から博士学位授与以前に行うことに改めた。この作品展示と論文発表会は学位最終審査会として、「博士展」という形で広く公開し、博士の学位の質と公正性を担保する仕組みとして機能させた(分析項目Ⅲの「観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫」の資料 2-13 (P. 2-13～2-14)参照)。この実績

を基に、平成 20 年度から「芸術系大学院における学位授与プロセスの研究」（「芸術リサーチセンター」）を、文部科学省の特別教育研究経費の助成を得て立ち上げることとなった。この芸術リサーチセンターでは、芸術分野における博士学位の位置付けを明確化し、芸術分野における博士学位の教育プログラムや審査過程を開発し、他の芸術系教育機関に向けて発信することを予定している（資料 2-4 参照）。

資料 2-4 美術研究科におけるリサーチセンターの活動イメージ図



（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る

（判断理由）

各研究領域に即した教員がそれぞれ配置されていること、また文化財保存学専攻を除く美術に関する各領域について、学部から研究科まで一貫した教育研究組織を形成していることから基本的組織編成については、期待に十分応えていると考える。

さらに博士後期課程における教育の内容や博士学位の審査プロセスを検証し、新たに「博士展」（分析項目Ⅲの「観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫」の資料 2-13（P. 2-13～2-14）参照）を実施することに改め、さらに「芸術系大学院における学位授与プロセスの研究」（芸術リサーチセンター）を平成 20 年度より行うこととなった。こうした改革の取り組みは、芸術分野の学位授与の在り方を先導する取り組みであることから、全体として期待を上回る水準とした。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

修士課程の教育課程は、基本的には専門分野と関連する講義科目(必修科目又は選択科目)及び指導教員の下で研究室単位で行う創作研究等(専攻により名称は異なる。下記の資料2-5の例で言うと「デザイン研究」にあたる。)により構成されている。修士課程2年次の創作研究等では、学生それぞれの研究課題を修士制作又は修士論文へ昇華させるため、個々人の主体性が発揮できるようにきめ細かな個人指導を徹底している。

博士後期課程においては、美術専攻では研究領域にかかわらず「創作総合研究」を必修科目とし、併せて美術専攻の芸術学研究領域以外の各領域では「造形計画特別研究」も必修科目としている。文化財保存学専攻では、「文化財保存学総合研究」を必修科目としている。これらの必修科目は、博士後期課程担当教員複数で担当し、実技と理論の教員の緊密な交流と連携のもとに行われるものである。この基盤に立って、学生は指導教員及び関連分野の教員の指導を受けるとともに、選択科目(特殊講義又は演習)を履修することとし、博士論文等の作成に向けてきめ細かな対応を行っている。また、前述した教育改革事業では、平成20年度より実技制作を主体とする博士後期課程各研究領域の学生に対して共通に、論文執筆スキルの向上を図る特別指導プログラムを実施することとした。

なお、修士論文又は修士作品、博士論文又は博士作品の評価にあたっては、講評会や審査会の場で指導教員以外の隣接分野の教員も評価に参加し、教育内容の偏りを排除するように努めている。

資料2-5 教育課程表 例:デザイン専攻

履修 区分	授業科目	履修年次		修得単位数		
		1 年次	2 年次	小計	合計	
必修 科目	デザイン研究	10	10	20	32	
	デザイン特論(4)	4		4		
	デザインプロジェクト(4)	4		4		
選択 科目	アートディレクションⅠ(2)	4		4		
	アートディレクションⅡ(2)					
	パブリックアート(2)					
	ランドスケープ(2)					
	プロダクトプランニングⅠ (2)					
	プロダクトプランニングⅡ (2)					

※デザインプロジェクトは1年次に履修することが望ましい。

※選択科目については、2科目・4単位以上を取得すること。

資料 2-6 シラバス記載例

デザイン専門科目

科目番号	3H211	授 業	デザインプロジェクト	教員名	デザイン科常勤教員及び非常勤講師
通年	水 1, 2	科目名		4 単位	大学院 (デザイン専攻)
授業テーマ	社会連携によるデザイン開発				
授業計画及び内容	デザイン専門領域を横断したチーム編成によるデザイン開発プロジェクト 原則として修士1年次(約30人)を対象とする。 プロジェクトのテーマを、5～6人を1チームとしたメンバーで、デザイン開発を行う。 デザインジャンルを横断したチーム編成により、各チームのテーマによるデザイン開発を複合的に行うことで、よりトータルなデザイン成果を高め、かつ深化することを目的とする。 また、プロジェクトのテーマは、社会(自治体や企業などの組織)と連携を図り、より具体性のあるテーマを設定しつつ、斬新なデザイン開発を行う。さらにそのデザインが実現することも視野に入れる。 H19年度は昨年に引き続き「足立区」との連携を図り、地域振興・活性化、特色のある商品開発などのデザインプロジェクトを立ち上げ、修士課程に相応しい総合的なデザイン開発に取り組む授業とする。 指導体制は、常勤教員全員(教授・助教授・助手)と、非常勤講師による集中講義及び実技作品制作により一年間を通して行う。				
受講に当たっての留意事項	デザイン専攻のみ単位取得可能。原則として修士1年次(約30人)を対象とする。				
成績評価方法	企画・コンセプトから立案を経て開発されたデザイン成果を総合的に評価する。				
教科書／参考書					
備考(オフィスアワー)	随時				

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点到に係る状況)

前述したように美術研究科の教育課程は、各専攻のアトリエや工房、研究室での創作研究活動を中心に据えることに特徴がある。この少人数・相互交流型の教育システムをベースとして、随時学生からの要望を吸収しながら、個々の学生の資質に適合した教育方法を採用するように努めている。

また、分析項目Ⅲの「観点 授業形態の組み合わせと学習指導方法の工夫」に記述のとおり、本研究科では、地域連携を取り入れた創作研究指導を行うことにより、学生に対しては社会との接点を持った創作活動の実践的な展開という点で、社会に対しては創作活動を広く社会へ還元するという点で、その期待に応えている。

また、美術学部・美術研究科における受託研究、受託事業等は、教員の研究面での取組であるだけでなく、大学院生に対する創作研究指導として機能している場合もある。例えば、受託研究『国宝「源氏物語絵巻」現状模写』は、修士課程絵画専攻(日本画研究分野)、博士後期課程美術専攻(日本画研究領域)の研究指導教材として大きな意味を持っている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

各専攻の教育課程は、高度な専門分野を学ぶにふさわしい内容となっている。また、学生や社会からの要請に応える授業科目の開設や授業内容・指導方法の見直しは随時実施されている。加えて各研究室では、研究課題の実施にあわせて、受託研究、受託事業等が盛

んに行われており、それがもたらす実践的な教育効果も大きい。

また、修士課程における修了制作・論文は、研究室という閉ざされた単位ではなく各専攻単位で複数の教員による精査が行われ、また修了制作展を通じて広く外部に対して公開し、高い評価を受けていることは、学生と社会からの期待に十分応えている証左である。

博士課程にあっては、博士展の実施とリサーチセンター立ち上げによる作品で学位を得ようとするものへの論文指導の充実が今後大きな成果を生むものと期待されよう。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本研究科の教育は、講義科目と実技科目の内容を連動するような工夫を行うと同時に、研究室活動を基本とする創作研究の中で、学生の個々人の主体性が発揮できるようにきめ細かく個人指導を行っている。この研究室単位の活動では、フィールドワークやワークショップを利用した学外での実践活動を積極的に行い、社会交流を通じた問題発見型教育を実践している(資料 2-7 参照)。なかでも本研究科が展開する東京都台東区と茨城県取手市では、地域連携を組み込んだ「上野タウンアートミュージアム」(平成 19 年度から。資料 2-7 の No1~7 参照)・「取手アートプロジェクト」(平成 11 年度から)などを研究科の創作研究指導の一環として実施し、実社会と関係した高度な芸術教育を展開している。特に修士課程デザイン専攻では、必修科目「デザインプロジェクト」で「社会連携によるデザイン開発」を展開している。

また、各専攻では、社会で活躍するアーティスト等を招聘した特別講義・集中講義を実施し、個人の創作研究に刺激を与える工夫を行っている(資料 2-8, 2-9 参照)。

さらに、平成 19 年度までに海外 25 校と交流協定を締結し、平成 19 年度は、14 名の留学生を受け入れ、14 名(学部生 3 名、大学院生 11 名)の学生を協定校に送り出している。派遣にあたっては、本学部・研究科と相手大学等の教育課程を照らし合わせ、単位認定する科目を教務委員会で審査しており、本研究科の国際的視野にたった教育体制の構築に資するものとなっている(資料 2-10 参照)。

資料 2-7 地域と連携した主な研究指導事例

No	指導テーマ	専攻・分野	概要
1	「浮世絵と伝統」	絵画専攻・版画研究分野	かつて江戸の下町であった台東区周辺に伝わる木版画、浮世絵の伝統とその現在の姿を検証する。上野タウンアートミュージアムの一環として、H19.8.2~8.6には研究成果発表(大学院生の木版画展示)を行うとともに、大学院生院生の指導のもと台東区の中学生を対象に伝統木版画公開制作などを実施。
2	「彫刻の風景ー路地」	彫刻専攻	地域の文化芸術環境を意識した教育カリキュラムとして、台東区の伝統的な下町文化の象徴である「路地」をテーマに作品制作研究を実施。H19.7.24~8.3には上野の森美術館ギャラリーで研究成果発表(大学院生の作品展示)を行った。
3	「MACHI-YATAI PROJECT ーめくるめくるじめぐりー」	彫刻専攻・建築専攻 工芸専攻・染織研究分野	台東区のまちの一角に仮設の空間や装置を配置し、日常の風景を一変させるプロジェクト。2007 年は、谷中玉林寺境内脇の狭く細長い路地を対象とし、「精神的な浄化」をテーマに取り組んだ。
4	「時空の街」ーカタチは呼応するー	彫刻専攻	街文化と彫刻の可能性を重ねた地域連携プロジェクト。それぞれの彫刻観を街という視点から作品にする創作研究。アートを通じて地域の人々とコミュニケーションを交わすプログラムの一つであり、研究成果は H19.10.10-11.11 に浅草テブコ館で展示した。
5	サスティナブル・アートプロジェクト 2007 『事の場合』	絵画専攻 油画研究領域	サスティナブル・アートプロジェクトは、実施本部である環境プロセスアート、並びに東京芸術大学を中心に市民と台東区が協力し合い行っているアートプロジェクト。台東区内を会場とし、使用されなくなった空き家などの場所を修復再生させながら進行し、作品展示という試みによりその場所に風を通すことで、今後の使用方向や可能性を探っていくもの。作品展示は、H19.10.20-11.4 に行った。
6	『アートランドコミュニケーション』	工芸専攻 染織研究分野	布や紐といった繊維素材を使って、隅田公園を造形的に新しい空間となるように変身させるプロジェクト。野外展示は H19.10.20-11.4 に行った。

7	伝統技術の応用によるイノベーション商品開発プロジェクト「技と工芸感」	工芸専攻彫金研究分野・鍍金研究分野	「伝統技術の応用によるイノベーション商品開発プロジェクト」は、三年計画で台東区内の伝統工芸の製造業者と連携し、伝統技術を応用して、大学院生の感性のもと、新しい工芸作品の可能性や商品の共同研究、開発を目的としている。区内の伝統工芸職人（皮革加工や鼈甲、提灯、桐箆笥など）を大学に招いての技術体験会（ワークショップ）や実際の作業場訪問などを重ねて、いろいろな可能性を探りながら両者の接点を見つけ、アイディアをかたちにしてきた過程をH20.1.22-2.3に発表展で展示した。
8	デザインプロジェクトー足立区をフィールドにした藝大生によるデザイン提案ー	デザイン専攻	大学院修士課程1年生の授業としての「デザインプロジェクト」はグラフィック、プロダクト、空間・環境などの既存デザインジャンルを横断したチームメンバー編成により、複合的なデザイン開発を行おうとするもので、トータルなデザイン成果を高め、かつ深化することを目的としている。平成18年度は対象を「足立区」とし、街に学生たちが入り込み、街を身近に感じた中からテーマ、コンセプトを見つけ出し、デザインの提案を行い、H19.4.24-5.6には、成果発表展示等を行った。
9	「公共ディスプレイプロジェクト」	デザイン専攻	台東区の要請を受け、区民に広く文化・芸術に接してもらうことを目的に、上野駅前の陸橋広場の展示スペースに学生、教員個々の作品を交代で約1年半（H18.10-H20.3）展示した。作品は合わせて9作品で、公共ディスプレイプロジェクトとして地域連携の意味をもち、区民にとっては、身近に芸術と触れ合う貴重な場となった。区民の評判も良く、今後も継続するよう要請されている。

（参考：※No.1～8については、<http://www.geidai.ac.jp/guide/kinen/program.html> から各展示等についての案内へ）

資料 2-8 平成 19 年度特別講義・講演の例(全専攻対象)

日付	題目	講師氏名	講師所属等
4月18日	オーストラリア現代美術シーンと自作について	ピーター ヘネシー	作家
5月9日	『美術館、ギャラリー、もう一つの世界ー現代美術の生まれる所、生きる所』	アラナ・ハイス	ニューヨークP.S.1現代アートセンター館長、ニューヨーク近代美術館副館長
5月31日	「わたしたちの過去に、未来はあるのか」	岡部昌生 港千尋	アーティスト 写真家・写真評論家
6月11,12日	フォトグラムに関する講義・実技指導	杉浦邦恵	美術家
6月22日	木造建築物の現代的意義	中村義明	中村外二工務店代表取締役
7月11日	「クリエイティブ・インタベーション(創造的介入)ーオルタナティブ・スペース、アーティスト、パブリック」	マーガレット・シュウ	台湾、オルタナティブ・スペース Bamboo Curtain Studio 主宰
7月19日	ヨーロッパのジュエリー史と現代の動向	コーネリア・ホルザッハ	ドイツ フォルツハイム装身具美術館館長
9月14日	「美術作品に見られるさまざまな物質を解き明かす」	アントニオ・スガモロッティ	ペルージャ大学教授
10月3日	「オキナワ・カメラ 2007／沖縄写真をめぐって」	比嘉豊光 北島敬三	写真家 写真家
10月23日	「ヨーロッパにおける「風景を熟視する」	ラファエル・ミラーニ	ボローニャ大学教授
11月16日	世界の建築家	二川幸夫	(A,D,A,EDITA Tokyo)
11月23,24,25日	映像表象の技術を学ぼう	百束昭幸 内田英治 高木敏文	(共催):ヘタアートネットジャパン
12月6日	クシシュフ・ウ・オ・ティコ特別講演会	クシシュフ・ウ・オ・ティコ	マサチューセッツ工科大学 先端視覚研究所 教授
1月29日	ヨーロッパの現代美術の現状と諸問題について	バーバラ・ホルプ	オーストリア SECESSION 館長
2月9,10,11日	映像表象の技術を学ぼう	百束昭幸, 内田英治, 高木敏文	(共催):ヘタアートネットジャパン

資料 2-9 平成 19 年度 特別講義・集中講義・ワークショップ等(例: 絵画専攻油画研究領域)

日付	題目	講師氏名	講師所属等
4 月 20 日	パリへー洋画家たち百年の夢「出品アーティストによる座談会」	小川佳夫・佐藤利成・森江秀夫他	作家
4 月 25・26 日	バンコク コンドミニウムで	佐藤利成	作家
5 月 28 日	山口晃 集中講義	山口晃	作家
6 月 18 日	バトル十番勝負	O Jun 長谷川繁	作家
6 月 27, 28 日	版画制作の実演(自作についての説明, 作品鑑賞も含む)	田村文雄	作家
7 月 2 日	展開の可能性 2007	是枝開	神奈川県立美術館主任学芸員・作家
7 月 10, 11 日	キャンパスの製作過程の見学		日本画材工業(株)工場
10 月 10, 17, 31 日	支持体研究(「キャンパスの使命, 日本のキャンパス製造の歴史と現況」, 「世界のキャンパス製造の現況と展望, 今後の展開」, 「麻生地の手張り方法, キャンパス手張り, 再度・タッキング, バックタッキング方法」)	船岡廣正 船岡義正	日本画材工業(株)代表取締役 日本画材工業(株)製造部
10 月 19 日	ウィーンの版画事情(自作についても含む)	ミヒャエル・シュナイター	ウェプスター大学ウィーン校視覚文化助教授
10 月 24 日	日本の伝統的水性木版画技法の公開講義と実演	安達以作 傘及び彫師, 摺師	アダチ伝統木版画技術保存財団理事長ほか
10 月 29 日	見たままに	押江千衣子	作家
11 月 6 日	アクリル絵の具について	マーク・コールデン他	コールデン社最高経営責任者
11 月 7 日	「時代と絵画」～中村宏の「タブロオ機械」と「図画事件」～	中村宏	アーティスト
11 月 13, 14 日	社会とアート	秋元雄史	金沢 21 世紀美術館館長
11 月 19 日	自作について(俵賞の選考も含む)	筆塚稔尚	東京造形大学非常勤講師
12 月 3 日	現代アートの＜現在＞を読みとく。	市原研太郎	美術評論家
12 月 7 日	「近代洋画」再考～藤田嗣治, 青木繁, そして熊谷守一～	山下裕二	明治学院大学教授
12 月 10 日	「『絵画』という問題」	本江邦夫	多摩美術大学教授・府中美術館館長
12 月 11 日	＜＜驚田めるろ氏による作品講評ディスカッション＞＞	驚田めるろ	金沢 21 世紀美術館学芸員

資料 2-10 国際交流協定校との交換留学(派遣)

大学/機関	国/地域	派遣実績 1	派遣実績 2
中央美術学院	中国	(1)	
ソウル大学校美術大学	韓国		1
ユニバーシティ・カレッジ・フォー・ザ・クリエイティブ・アーツ	イギリス	(1)	(1)
ワイマル・ハウハウス大学	ドイツ		1
リヒテンシュタイン国立大学	リヒテンシュタイン		1
ハレ・ブルグ・ギー・ヒェンシュタイン芸術大学	ドイツ	1	1
シュトゥットガルト美術大学	ドイツ	1	1
大邱大学校	韓国		1
ウィーン工科大学建築・地域計画学部	オーストリア		1

ロンドン芸術大学	イギリス		1
パリ国立高等美術学院	フランス		1
19年度中の協定に基づく派遣の実績 計		11(3)	

※派遣実績1(派遣開始日が18年度、終了日が19年度の者)

※派遣実績2(派遣開始日が19年度、終了日が20年度中も含む)

※()は、学部学生への派遣を示す。

観点 主体的な学習を促す取組

(観点到に係る状況)

美術研究科では、個人の制作を重要視する観点から、制作の場であるアトリエ・工房あるいは各研究室の自由な使用を可能な限り認めている(資料2-11参照)。また、教育成果でもある制作作品や研究論文の学内外展覧会への出品やWeb上での公開、学界などでの発表を推奨し(資料2-7,「分析項目Ⅳ 学業の成果」の資料2-15(P.2-16～2-19)参照)、同時に優れた業績をあげた学生への顕彰制度を設けている(資料2-12参照)。特に修士課程教育の集大成である修士制作・修士論文に関しては、全学生の作品を展示した修了制作展を大学美術館で毎年実施し、作品を直接公開すると同時に図録や論文梗概集を作成して刊行している。また博士後期課程にあっては、博士論文や作品を一同に介して展示発表する場として博士展を19年度より開始し(資料2-13参照)、一般外部からの批評を受け入れると同時に、個人としての主体的な取り組みを促す契機としている。

資料2-11 アトリエ、実習室、工房等の数

校地	大学院生用		学部生等と共用	
	室数	面積(m ²)	室数	面積(m ²)
上野	66	3,464	106	8,204
取手	13	1,407	52	4,856

資料2-12 美術学部・美術研究科の顕彰制度一覧

No	奨学金等名	対象学科・専攻
1	安宅賞	全学科・専攻
2	平山郁夫奨学金	全学科・専攻
3	〇氏記念賞	油画
4	俵奨学金	油画(版画)
5	久米桂一郎奨学基金	油画, 彫刻
6	内藤春治奨学基金	工芸(鋳金)
7	原田賞奨学基金	工芸
8	伊藤廣利奨学金	工芸, 美術教育
9	藤野奨学金	工芸(鍛金), 美術教育
10	吉田五十八奨学基金	建築
11	野村賞	全学科・専攻(※博士課程のみ)
12	上野芸友会賞	油画
13	菅原安男奨学基金	彫刻
14	セプテーニ奨学基金	油画(版画)
15	陶社会奨学金	工芸(陶芸)
16	お仏壇のはせがわ賞	文化財保存学(保存修復)
17	卒業・修了作品買上	全学科・専攻
18	サロン・ド・プランタン賞	全学科・専攻
19	芸大デザイン賞	デザイン

20	吉田五十八修了制作賞	建築
21	吉村順三卒業制作賞	建築

(参考)

外部団体が卒業・修了制作(論文)に対して直接に授与等するもの

1	台東区長賞(台東区)
2	取手市長賞(取手市)
3	荒川区長賞(荒川区)
4	杜賞(本学部・研究科同窓会)
5	上野恩賜公園「芸術の散歩道」東京都知事賞(東京都)

資料 2-13 東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

会 期:2007年12月4日(火)-12月16日(日)

月曜休館 午前10時~午後5時

場 所:大学美術館

観覧料:無料

内 容:37名の博士学位申請者の博士作品, 論文解説パネル等の展示及び展示会場での論文発表会。

論文発表会:

日時	研究領域	申請者氏名	博士論文テーマ
12月4日(火) 10:00-11:00	漆芸	豊福千穂子	器-漆芸における器の制作とその背景
12月4日(火) 10:00-11:00	保存修復(日本画)	李 相炫	有機顔料の研究-朝鮮時代における「紙織画屏図」の再現を中心として
12月4日(火) 11:00-12:00	工芸(木工芸)	白木麻子	「ゆらぎ」の風景
12月4日(火) 11:00-12:00	芸術学(美術教育)	渡邊美香	アグネス・マーチンの絵画における抽象表現と精神性について-一生の意識と感性の発達を中心に
12月4日(火) 11:00-12:00	保存修復(日本画)	並木秀俊	金剛峰寺所蔵 国宝「仏涅槃図」の荘厳性に関する再現模写研究-截金と彩色の表現技法を中心に
12月4日(火) 13:00-14:00	工芸(漆芸)	吉野貴将	「慈しみの象徴」-人の心を繋ぐ偶像を求めて
12月4日(火) 13:00-14:00	保存修復(日本画)	松村公太	アフガニスタン・バーミヤン石窟壁画に関する模写制作を通しての研究
12月5日(水) 10:00-11:00	日本画	アダム・ブース	雲から降りる:異文化での美術解釈とアダム・ブース作品の題材意義
12月5日(水) 11:00-12:00	日本画	荒木亨子	絵のありか
12月5日(水) 13:00-14:00	日本画	中村英生	燻製による金箔の古色再現(国宝源氏物語絵巻の時を辿る)
12月5日(水) 13:00-14:00	油画(版画)	ハサン キラン	シャーマンのイメージによる視覚的暗示
12月5日(水) 14:00-15:00	日本画	永井健志	「和歌から導く絵画」
12月5日(水) 14:00-15:00	油画(油画技法・材料)	伊藤隆之	THE PERFECT WAY OF LIFE
12月5日(水) 15:00-16:00	日本画	四宮義俊	躯体になるもの
12月5日(水) 15:00-16:00	油画	申 壽赫	流動する都市風景の間で-制作背景をめぐって
12月6日(木) 11:00-12:00	工芸(鑄金)	南 時俊	記憶の景色
12月6日(木) 13:00-14:00	油画	岩永忠輔	景色
12月6日(木) 14:00-15:00	油画	横谷奈歩	日常/異界/境界
12月6日(木) 14:00-15:00	工芸(染織)	中村理子	着るものキモノ-これからの和服における可能性の探求
12月6日(木) 15:00-16:00	油画	田口和奈	見えていないことの見えていること-映像を巡る断片的論考
12月7日(金) 15:00-16:00	彫刻	和田礼治郎	庭の間

12月7日(金)	15:00-16:00	工芸(漆芸)	長谷川彩子	「工芸の皮膚－女性の形象と表層を漂う工芸」
12月10日(月)	10:00-11:30	芸術学(日本・東洋美術史)	足立元	近代日本の前衛芸術と社会思想－表現・言説・イデオロギー
12月10日(月)	12:30-14:00	芸術学(美学)	石田圭子	現実の神格化－ファシスト・モダニズムの理論
12月11日(火)	10:00-11:00	保存修復(油画)	鈴鴨富士子	油画修復における補彩絵具の保存性に関する研究－媒剤の異なる補彩絵具の劣化について
12月11日(火)	13:00-14:00	芸術学(美術解剖学)	齋藤亜矢	チンパンジーとヒト幼児の描画行動の比較－絵を描くことの起源に関する生物学的考察
12月11日(火)	14:00-15:00	芸術学(美術解剖学)	栗田大輔	マルセル・デュシャン論
12月11日(火)	15:30-17:00	建築(環境設計)	金城正紀	竹富島における祭祀の機能からみた集落と拝所の空間構成に関する研究
12月12日(水)	14:00-15:00	彫刻	陳 漢	人間表現としての塑像彫刻の可能性－内なる像の発見へ
12月13日(木)	10:00-11:00	保存修復(工芸)	劉 曉玉	中国宋代吉州窯剪紙貼花裝飾技法の研究－東京国立博物館所蔵「中国宋代吉州窯玳瑁釉梅花文碗」の復元を中心に
12月13日(木)	13:00-14:00	工芸(陶芸)	鬼丸尚幸	彫文を活かした青白磁の造形
12月13日(木)	13:00-14:00	デザイン	張 利	接触と被覆－機都造形におけるサーフェイスとテクスチュアの研究
12月14日(金)	10:00-11:00	工芸(陶芸)	李コッタン	「自然と生命そして光の造形」産業陶磁デザイン-明かりの研究
12月14日(金)	11:00-12:00	先端芸術表現	原田明夫	非居住域におけるアート－存在契機と場の構造
12月14日(金)	15:00-16:00	先端芸術表現	石川直樹	環太平洋における群島文化論－東南アジア島嶼部・ペーリング海周辺地域における神話と渡海の文化を視座として
12月14日(金)	15:00-16:00	保存修復(彫刻)	菊池敏正	天平時代における乾漆技法研究－秋篠寺蔵芯木及び断片による復元考察
12月14日(金)	15:30-16:00	先端芸術表現	エリック ヴァン ホーヴ	書かれた表現における美学的、詩的、意味論的な内観－漢字とアルファベットを通してみた美術と書道

(http://www.geidai.ac.jp/museum/exhibit/2007/doctoral/doctoral_ja.htm より)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

本研究科は美術分野の指導的立場にある教育機関として、高い期待を集めている。その中で、美術の各領域の専門家を広く集め、また学生の自由な創作の場としてのアトリエ環境を提供している(都内美術系大学比で約1.5～2倍、資料2-11(P.2-12)参照)。こうした教育場としての総合的な環境の水準と教育方法の適切さは、学生の志望数により判断できる。本研究科を志望する学生数は、平成19年度入試の実績で修士課程622人であり、定員の185人に対して3.5倍、博士後期課程65人であり、定員の35人に対して1.9倍となっており、高い評価を得ているものと判断できる(資料2-14参照)。

資料2-14 平成19年度美術研究科入試状況

【修士課程】

専攻	入学 定員	志願者	合格者	入学者	倍率
	人	人	人	人	倍
絵画専攻	41	(21) 182	(4) 56	(4) 56	4.1
彫刻専攻	15	(1) 49	(1) 18	(1) 18	2.5
工芸専攻	28	(5) 46	(3) 31	(3) 31	1.8

デザイン専攻	22	(8) 57	(1) 28	(1) 28	2.1
建築専攻	16	(2) 88	(2) 20	(2) 20	5.4
芸術学専攻	21	(1) 56	(1) 23	(1) 23	2.8
先端芸術表現専攻	24	(4) 96	(1) 27	(1) 26	5.8
文化財保存学専攻	18	(4) 48	(2) 19	(2) 19	3.2
計	185	(46) 622	(15) 222	(15) 221	3.5

【博士後期課程】

専攻	入学 定員	志願者	合格者	入学者	倍率
	人	人	人	人	倍
美術専攻	25	(23) 59	(9) 28	(8) 28	2.4
文化財保存学専攻	10	(1) 6	(1) 4	(1) 4	0.6
計	35	(24) 65	(10) 32	(9) 32	1.9

※()は、外国人留学生で外数。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力**(観点に係る状況)**

講義科目については、シラバス又は第1回目の授業時に、授業のテーマ(目的)及び授業計画や内容、成績評価方法(試験を実施するのか、レポート提出かなど)をあらかじめ学生に周知している。(シラバスの記載例は資料2-6(P.2-7)参照)

また、本研究科では、学部と同様に学生の制作作品や修士作品(論文)、博士作品(論文)について、展覧会、出版物或いはWebなど様々な方法で公開している。このような発表を通じて、外部の専門家からの批評や一般の美術を楽しむ人々からの声を聴くことは、教育成果つまり学生が身に付けた学力や資質・能力の水準を確認するということであり、かつ、学生が自らの能力の向上について考える場としての役割もある。在学生アンケートによれば、コンクールや作品公募等に応募したことのある学生は、36.8%、学外で展示、発表等を行ったことのある学生は60.5%となっている(成果発表事例については、資料2-7(P.2-9～2-10)、資料2-1を参照。修了生を含む学生の受賞については別添資料1-①(P.2-25～2-27)を参照)。

資料2-15 教育研究成果の発表例(平成19年度)

※資料2-7に記載済のもの以外の事例

※下記は大学、学部あるいは学科・専攻が組織として関与した学生の成果発表事例。学生が個人的に学内外で行った個展、グループ展、公募展等への出品は含まない。

	展覧会名(会場)	会期	出展学生専攻等	概要
1	博士展 (大学美術館)	H19.12.4 ～ H19.12.16	美術研究科 博士後期課程	作品展示と論文発表会を一般公開。学位審査の最終関門であり、修了後作家・研究者等として活動していく上で、出発点となる展覧会でもある。
2	ケレン ー 主張する色彩 ー (大学美術館陳列館)	H19.4.19 ～ H19.5.3	美術学部・美術研究科の 卒業・修了生 や在学生	今回の展覧会は、新しい塗料による作品と、漆の作品を中心に、塗装素材と技法研究をテーマとした作品を一同に会し、表層としての藝術の方向性を探るもの。
3	茨城県指定文化財 西念寺蔵 阿弥陀如来坐像修復研究発表会 (大学美術館陳列館)	H19.4.12 ～ H19.4.15	文化財保存 学保存専攻 保存修復(彫刻) 研究分野	阿弥陀如来坐像は茨城県坂東市で確認されている平安末期の作例として知られているが、後世の修理で施された厚い漆箔層の剥離、剥落や、後補部材によって像容を著しく損なっていた。保存修復彫刻研究室では同坐像の修復を2006年9月から実施し、完成した坐像を展示するとともに研究成果の発表を行った。本発表では同坐像とともに、昨年度に当研究室および教員が関わった修復事例2件、復元事業1件もあわせてパネル展示した。
4	素描展 ～思索のなかで～ (大学美術館陳列館)	H19.7.22 ～ H19.7.31	絵画専攻日 本画研究分 野	日本画第二研究室の修士、博士、研究留学生、及び教員(計24名)が、各々の「素描」を一堂に持ち寄り展示。 第二回目となる本展は、主として各々の本制作の前段階としての「素描」というテーマを設けている。
5	ICHIKEN 展 ＜東京芸術大学日本画 第一研究室発表展＞ (大学美術館陳列館、 正木記念館)	H19.9.20 ～ H19.9.27	絵画専攻日 本画研究分 野	本展は、2001年度に大学院日本画第一研究室において制作発表演習の一環として始まり、学生によって企画運営されている。第6回となる今回の展示では、担当教員と学生が共に出品することで、各々の研究成果を発表すると同時に、より幅広い批評の場を得ようとするもの。

東京芸術大学美術研究科 分析項目Ⅳ

6	壁画によるまちづくり (取手市国道6号バイパス藤代大橋下壁画)	H19.8.1 ～ H19.9.17	絵画専攻壁画研究分野	取手市が取り組んでいる快適な環境整備のための計画的な壁画制作への協力。「壁画によるまちづくり実行委員会」への参加。取手市立ふじしろ図書館において壁画原画コンペを行ない大学院生6名が作品を発表した。また大学院生7名が市民ボランティアと共同して壁画制作を実施した。19年度は、取手市藤代の国道6号バイパス藤代大橋下の壁面に縦約5m×横約26mの壁画を制作。(原画は、大学院美術研究科1年生青木愛弓がデザインした作品。)次年度は、国道6号線高架下駐輪場を対象に受託研究を行う予定。
7	日銀ウォーキングミュージアム KINCO ～日本銀行×東京芸術大学 地下金庫展～ (日本銀行本店)	H19.11.3 ～ H19.11.16	美術学部・美術研究科、音楽学部・音楽研究科	本展は、本学の学生(主に美術研究科油画第二・第三研究室、音楽研究科音楽文化学音楽音響創造、音楽学部音楽環境創造科)が、日本銀行本店旧館 地下金庫、旧営業場等にて様々なメディアを使い、絵画・立体・インスタレーション・映像・音響作品等の作品展示を行うもの。
8	東京芸術大学美術学部紀要第45号	平成19年 12月	絵画専攻壁画研究分野	教員と共著で、大学院美術研究科博士後期課程3年住康平が「ガッラ・プラチディア廟モザイク壁画保存修復調査(1)」を発表した。
9	鍛金展 (藝大アートプラザ)	H19.7.31 ～ H19.9.9	工芸専攻鍛金研究分野	鍛金研究室(大学院生、教員、教育研究助手、非常勤教員ら15名による作品展)
10	JAPAN TEX 2007 クリエイターズタウン 『触覚の化現』 (東京ビッグサイト)	H19.11.21 ～ H19.11.24	工芸専攻染織研究分野	全国30校の学生による作品展示。学生たちが、国内の企業や団体から提供された3つの素材<糸・布・和紙>を使用し、平面・立体・半立体の作品を制作して、JAPANTEX会場で発表するもの。本学染織専攻生が取り組み、研究室スタッフも指導に当たった。
11	「URUSHI FROM ASIA」 (漆藝ギャラリー)	H19.10.4 ～ H19.11.16	工芸専攻漆芸研究分野	留学生4名(日本、韓国、中国、ミャンマー)による展示。10月22日には、出品者の留学生4名による自国の漆文化や自身の制作についての講演会を中央棟第3講義室で開催した。
12	atlas 展「先端° M1' 07°」 (取手校地メディア教育棟、大学美術館取手館ほか)	H19.11.5 ～ H19.11.9	先端芸術表現専攻	atlas 展は、東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程1年による合同企画展覧会。博士後期課程2年の展示も同時開催。
13	アート・パス'07 (取手校地)	H19.12.7 ～ H19.12.9	取手校地学生	取手校地の学生が中心となった年に一度の大規模な作品発表。大学という場が300を超える作品を持つ大展覧会場に姿を変え、また、学生の企画したイベントも多数行われる。展示される作品は、授業の課題によるものや有志によるもの等さまざま。またワークショップ、公開討論会、体験講座等、一般来場者が見るだけでなく、参加できるイベントも多数開催。
14	取手アートプロジェクト 2007-はじまりは隣の家のアーティスト- (取手校地及び取手市内各所、利根町、柏市、松戸市)	H19.11.9 ～11.25の 金土日祝 9日間	美術学部・美術研究科の各学科・専攻、音楽学部音楽環境創造科	取手アートプロジェクト(通称TAP)は、東京芸術大学と取手市行政機関(市役所、教育委員会・取手市文化事業団)および市民(アート取手・とりで美術ピラミッド)が、三位一体となって実行委員会を組織し、平成11年より毎年行なっている文化事業。本学からは美術学部先端芸術表現科、音楽学部からは音楽環境創造科が中心となり、それぞれ授業の一環として企画・運営に取り組んでいる。
15	東京芸術大学 卒業・修了制作展 (東京都美術館、大学美術館、同陳列館、同正木記念館、絵画棟、彫刻棟、中央棟、	H20.2.21 ～ H20.2.26	美術学部・美術研究科の各学科・専攻	美術学部卒業者、美術研究科修士課程及び博士後期課程修了者の卒業・修了生作品を展示。学部生は、東京都美術館・大学構内、大学院生は大学美術館・陳列館(大学構内)で開催。(先端芸術表現科・専攻はドキュメントのみの展示で作品展示は、別に開催。)芸術学科・専攻の卒業論文の概

	総合工房棟, 大学会館, 大学美術館前広場 他)			要も含め, 作品集を刊行している。
16	「Project the Projectors 2008」 先端芸術表現科 卒業・修了制作展 (横浜 BANKart NYK (学部4年), 横浜 ZAIM(修士2年))	H20.1.19 ~ H20.1.27	美術学部先端芸術表現科	1999 年度に設置の先端芸術表現科の卒業制作展。今回は, 学部6期生と修士4期生による。「project the projectors」という展覧会名は 2003 年度(第1期)から継承しているもの。このテーマは「企画者」という意味である projector たちが, 自分自身をさらに前方に(pro)投げる(ject)ことをあらわしている。
17	学生交流展 『美の環』 (大学会館他)	H19.10.4 ~ H19.10.14	美術学部・美術研究科	本学に留学している中国人学生, 韓国人学生を中心として日本人学生の作品も含め3カ国の美術作品を通して, 共通点や際について相互理解を深めるもの。
18	藝大アーツ in 丸の内 「アート展」(丸ビル)	H19.11.9 ~ H19.11.10	美術学部・美術研究科	学生たちによる十二支をテーマとした作品の展示
19	第2回 藝大アートプラザ大賞入賞作品展 (藝大アートプラザ)	H19.12.4 ~ H19.12.24	美術学部・美術研究科	芸術と社会との新しい出会いの場として設立された藝大アートプラザにおいて, 今回初めて, 学生の制作活動の一端を学外に発信することを目的としたアートコンペである「藝大アートプラザ大賞」(第2回の作品テーマは「生命」)を実施した。厳正な審査を経て選ばれた入選作品を展示した展覧会。展示とともに販売も行った。
20	東京芸大 SPRING BOARD 2007 Part1 (上野駅 Break Station Gallery)	H19.4.3 ~ H19.4.19	日本画, 油画 美術教育	本展は, 6 回目の開催となる。平成 18 年度の買い上げ賞(本学では, 卒業する学部生と修了する大学院生による, 卒業・修了制作展を例年 2 月下旬に開催しており, 成績優秀な作品は買い上げられ, 大学に保管されることになっている。)を受賞した学生たちによる, 成果発表のグループ展。卒業・修了制作展に発表されたものと関連する作品が, この展覧会のためにあらたに制作され, 発表された。本学大学美術館が企画協力。
21	東京芸大 SPRING BOARD 2007 Part2 (上野駅 Break Station Gallery)	H19.4.21 ~ H19.5.10	日本画, 油画 彫刻, 建築, 美術教育	Part1 は3名, Part2 は6名が出展。
22	五人五色(上野駅 Break Station Gallery)	H19.8.25 ~ H19.9.27	日本画, 油画, デザイン	本学藝祭実行委員会との共同企画展。参加学生は, 学部生, 院生とさまざまで, 科もばらばら。上野駅という多くの人が毎日通る, 日常的な場所で展示出来る素晴らしい機会。5名が参加。
23	版画の彩展 2007 第 32 回 全国大学版画展 (町田市立国際版画美術館)	H19.12.1 ~ H19.12.16	版画	全国の美術系大学の版画作品展。選ばれた美術作品は収蔵される。研究室では学生に学外におけるコンペに積極的に参加することを奨励しており, 本学版画専攻の学部4年生3名・大学院修士課程1年生8名, 合計11名が参加。
24	「金属のコトバ」展 東京芸術大学鍛金研究室卒業修了制作 (天王洲セントラルタワーアートホール(1F))	H19.5.14 ~ H19.6.29	鍛金	卒業作品, 修了作品の展示(9名)
25	JAPAN TEX 2007 クリエイターズタウン 『触覚の化現』 (東京ビッグサイト)	H19.11.21 ~ H19.11.24	染織	全国 30 校の学生による作品展示。学生たちが, 国内の企業や団体から提供された 3 つの素材<糸・布・和紙>を使用し, 平面・立体・半立体の作品を制作して, JAPANTEX 会場で発表するもの。本学染織専攻生が取り組み, 研究室スタッフも指導に当たった。
26	TRUNK TRANCE (取手校地 メディア教育棟1階 ピロティ)	H19.7.13	先端芸術表現	佐藤研究室による作品展。限定されたユニークな場所や条件を選び, 研究室メンバー全員で実験的な表現を試みるプログラム。

27	SOUND AND VISION 2007 展(ZAIM)	H19.10.12 ～ H19.10.21	先端芸術表現	〈音と光〉を軸に、見えざる物を見せて行く作業を行っているアーティストを中心に、音と光の作品を集めた展覧会をおこなった。
----	----------------------------------	-----------------------------	--------	---

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

在学生及び卒業・修了生アンケートでの関連設問の回答結果は、下記の資料 2-16 に示す通りである。これらのアンケートによれば、自分の専門領域の勉強ができるという基本的な意味での評価が 90%を越え、また専門分野で活躍する先生が多いという設問に対しても 80%の評価を得ている。満足度が約 70%であり、また自分が設定した研究計画が達成できたかという問への解答が 65%と相対的に低いのは、本研究科に進学する学生が、我が国の美術分野では最も高いレベルにあり、大学院と自身に対する潜在的に期待値が極めて高いという背景があるためと考えられる。

資料 2-16 在学生アンケート及び卒業・修了生アンケート関連設問抜粋(1)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	(大学院学生の方)受講している授業の内容や進め方、教員の研究指導の進め方について全体としての満足度	満足である+どちらかといえ ば満足である	69.3%
	(大学院修士 2 年生以上、博士 2 年生以上の方)あなたは、昨年度はじめに立てた研究計画を達成できましたか	達成できた+ほぼ達成できた	65.5%
	あなたは本学の「魅力」は何であると思いますか 自分の好きな勉強ができる		93.0%
	あなたは本学の「魅力」は何であると思いますか 専門分野で活躍する先生が多い		80.7%
	本学での教育・学習、学生生活などに関して、全体として「良い」、「楽しい」と感じるなど、満足していますか	満足である+どちらかといえ ば満足である	84.2%
卒 業 ・ 修 了 生	あなたの大学時代の生活は、全体としてどの程度充実していましたか	非常に充実していた+どちら かといえれば充実していた	83.8%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか 専門教育科目	とても役立っている+役立 っている	81.3%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

観点ごとの状況で既述のとおり、展示等の実施状況(資料 2-7 (P. 2-9～2-10)、資料 2-15 (P. 2-16～2-19)参照)、受賞の状況(別添資料 2-① (P. 2-25～2-27)参照)、アンケートでの在学生・修了生からの意見の聴取結果等(上記、資料 2-16 参照)などからみて、学生からの高い期待に対して、全体としては十分な評価を得ていると考えられる。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 修了後の進路の状況

(観点到に係る状況)

美術分野における高度な専門教育を行う本研究科では、修了後の進路は作家・教育者・研究者・学芸員など多彩である。下記の資料 2-17、2-18 のとおり、修了直後の状況では、企業等への就職は、専門性を発揮できるデザイン・プロダクト・建築・学芸員が大半であり、「非常勤」の多くは本学部・研究科で優秀な成績を修めた後に非常勤の教育研究助手を勤めている者で、この中から数年後に作家・教育者・研究者として独り立ちする者が多い。また統計上未定・他となっている者も、作家活動等を目指して制作等を続けている者が多く含まれていると考えられる。

なお、資料 2-19-1「卒業・修了生アンケート：現在の職業」、資料 2-19-2「卒業・修了生アンケート：本学卒業・修了後の創作活動状況」のとおり、修了後も個展の実施やコンクール等への参加或いは生涯学習指導など、本学での専門を活かした活動を行っている者が多いことが分かる。

資料 2-17 平成 20 年 3 月修了者の進路状況 (H20.5.1 までに判明した分)

■修士課程

区 分	修了者	就 職		非常勤 自営	進学				未定・他
		教職	企業等		大学院 (本学)	研究生 (本学)	他大学等 (国内)	海外留学	
日本画	13		2	3	3				5
油画	52		4	11	5	5		1	27
彫刻	16		1	4	2	1			8
工芸	33	1	5	7	3	2			15
デザイン	24		7	4	2				11
建築	14		3		2	1			8
先端芸術表現	27		4	5	3			1	14
芸術学	25	1	3	4	6	1			11
文化財保存学	23		4		9		1	1	10
計	227	1	33	38	35	10	1	2	109

■博士後期課程

区 分	修了者	就 職		非常勤 自営	進学				未定・他
		教職	企業等		大学院 (本学)	研究生 (本学)	他大学等 (国内)	海外留学	
美術	31	2		16					13
文化財保存学	6			4					2
計	37	0	0	20	0	0	0	0	15

資料 2-18 最近 3 年間の修了生の主な就職先企業名 (美術研究科分)

スタイルメント(Web), 安藤七宝(宝飾), アーカー(宝飾), 岡村製作所(オフィス), 西川産業(インテリア), DNPデジタルコム(印刷), 資生堂, 電通(広告), 東陶機器(住宅設備), コナミデジタルエンタテインメント(ゲーム), セイコーエプソン(IT機器), エース(鞆製品), 乃村工藝社(集客環境設計), h concept(家庭用品), ランドスケープデザイン(環境設計), 第一工房(設計), 日建設計(設計), 博報堂(広告), コンテンツ(Web), 地域創造(芸術環境企画), 博展(広告), ポリフォニーデジタル(ゲーム), MIC(歯科製品), シバックス(カーモデル), セイコークロック(時計), FDCプロダクツ4℃(宝飾), 大倉陶園(洋食器), 日建スペースデザイン(インテリア), 飛騨産業(家具), リコー(光学機器)河淳(広告), ブレーンセンター(広告), イリア(インテリア), 集英社(出版), 竹中工務店(設計), 日建設計(設計), シンクロヘキサデザイン(デザイン), Structured environment(設計), ユニバースソフトウェア(システム), オオタファインアーツ(画廊), ミサワホーム(設計), アバハウスインターナショナル(服飾), 思文閣(古美術), ヤマトロジスティクス, ピークス(エディトリアルデザイン), チャンテシシステムサービス(デザイン), エッグ(アニメ), F・D・Cプロダクツ(宝飾), クルスインターナショナル(販売), ワールド, アンビックス, 010ギャラリー&スタジオ(管理運営), ミキモト(宝飾), トヨタ自動車(デザイン), コクヨ(デザイン), 深井研究所(Web デザイン), 日本テレビアート(制作), 内原デザイン事務所(デザイン), 東日本旅客鉄道(建築設備), maurus frei:partner(建築デザイン), 凸版印刷(デザイン), DGN(デザイン), カークスヴィル(デザイン), アトリエニキティキ, 共同印刷(営業), NHK 文化センター(企画運営), 半田九清堂(修復), 文化財建造物保存技術協会(建築技術), 東京松屋(和紙保存), プレック研究所(建設), 成城美術研究所(講師), 講談社フェーマススクールズ(講師), 美学館(講師), 福岡美術学院(講師), 国立西洋美術館(研究員), 島根県立美術館(学芸員), 石洞美術館(学芸員), 横浜市芸術文化振興財団(学芸員), 明星大学(実習指導員), 女子美術大学(助手), 山梨県立宝石美術専門学校(教員), 文星芸術大学(助手), 京都嵯峨芸術大学(専任講師), 東京家政大学(助教), 聖学院中学校・高等学校(教員), 中国美术学院大学(教員)

資料 2-19-1 卒業・修了生アンケート:現在の職業

(複数回答可 単位%)

無回答	その他	主婦(夫)	学生	パートタイマー・フリーター	自由業(芸術家, 作家, 演奏家など)	自営業主又はその手伝い	公務員 (教員を除く)	教員(大学, 高等専門学校以外)	教員(大学, 高等専門学校)	会社役員, 会社社員, 団体職員
0.4	8.7	11.2	0.4	6.6	47.3	14.5	3.3	10.8	17.0	27.8

資料 2-19-2 卒業・修了生アンケート:本学卒業・修了後の創作活動状況

(複数回答可 単位%)

公的なコンクールやコンペティション等に参加したことがある	公的なコンクールやコンペティション等で受賞したことがある	個展やコンサートなどの活動をしている	新聞, 雑誌などのメディアに紹介されたり, 執筆したことがある	専門性を生かして, ボランティア活動, 地域活性化活動, 生涯学習指導などを行っている	その他	該当なし	無回答
41.1	28.6	46.5	47.7	25.7	7.1	13.3	4.6

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

在学生及び卒業・修了生アンケートにおける回答結果からみて、保護者或いは本学修了生の勤務先等からは、十分な評価を得ていると考えられる（資料 2-20 参照）。

また、本学部在学生或いは修了生は活発な創作活動・成果発表を行っており（資料 1-15, 資料 2-19-1, 2-19-2 参照）、その活動に対しては、受賞（別添資料 1-① (P. 1-27～1-29) 参照）に見られるように高い評価を得ているだけでなく、社会からの関心も高く、別添資料 2-② (P. 2-28～2-30) に例を示したとおり、新聞等でその活動が数多く紹介されている。

資料 2-20 在学生アンケート及び卒業・修了生アンケート関連設問抜粋(2)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	あなたの保護者は、あなたの入学後の本学に満足していると思いますか	満足していると思う＋どちらかといえば満足していると思う	84.2%
卒 業 ・ 修 了 生	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか（専門教育科目）	とても役立っている＋役立っている	81.3%
	（企業、団体等に所属している方）職種や仕事は、大学時代の専攻等とどのようなかわりを持っていますか	非常に関係のある仕事である＋どちらかといえば関係のある仕事である	87.0%
	（企業、団体等に所属している方）所属先での、東京芸術大学又は卒業生・修了生への評価をどのように感じていますか	非常に高い評価を受けていると感じる＋どちらかといえば高い評価を受けていると感じる	77.8%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

本研究科の修了生に対しては、企業からの求人件数が多く、また表現者等としてさらに高い水準を目指して創作を継続する者が数多く存在していること（資料 2-19-1, 2-19-2 参照）は、本研究科の教育指導に対する修了生の高い評価を示していると考えられる。

また、アンケート結果（資料 2-20 参照）や受賞の状況（別添資料 2-① (P. 2-25～2-27) 参照）、新聞記事（別添資料 2-② (P. 2-28～2-30) 参照）等に現れている社会の本研究科在学生・修了生への評価や関心の高さ等から見て、在学生、修了生、就職先、社会一般など各関係者からの期待に十分応えていると考えられる。

Ⅲ 質の向上度の判断

本研究科では、アトリエ等を基盤とした少人数精鋭教育を行い、従来から質の高い教育内容を保持してきたと考えている。一方、これまでの教育方法に加え、本中期計画期間内に以下のような新たな取り組みを開始し、さらなる質の向上が実現できたと判断している。

①事例1「博士展の実施」と「芸術リサーチセンターの設置」(分析項目Ⅰ教育の実施体制・Ⅱ教育内容)

(質の向上があったと判断する取組)

本研究科では、昭和52年に博士後期課程を設置して以来、平成19年度までに251名(課程博士の人数。論文博士を除く)の学位を授与してきた。この間、美術分野という特殊性から、他の教育機関とは異なり、研究論文だけでなく創作作品を重視して審査をおこなってきたが、その場合、評価に客観性が確保しづらい面があることがいめない。本研究科では、美術系の博士審査のありかたに関するこれまでの取り組みを整理し、研究論文だけでなく創作作品を重視する美術系博士の作品の審査プロセスを明確化することを検討してきた。この検討の過程で、本研究科の博士学位授与審査のプロセスとして「博士展」を行うこととした。これは、これまで本研究科では、学位授与審査の事後に作品等を公開することを行ってきたが、文学・理学・工学等、他の教育領域では、博士学位取得に際して公聴会を実施し、その適否を公に問う方法が一般化していることを踏まえてのことである。

平成19年度より博士後期課程に在学し、作品を中心とした成果によって学位の授与を希望する者に対しては、博士展への出品及び公聴会としての性格を持つ発表会を実施し、公開審査を行なうこととした(資料2-13(P.2-13~2-14)参照)。この博士展の実施によって、博士学位授与のプロセスは明確化され、博士作品の質の相互比較が可能となると同時に、広い視点からの批判を受けることが出来るようになったことは大きな質の向上と位置付けられる。

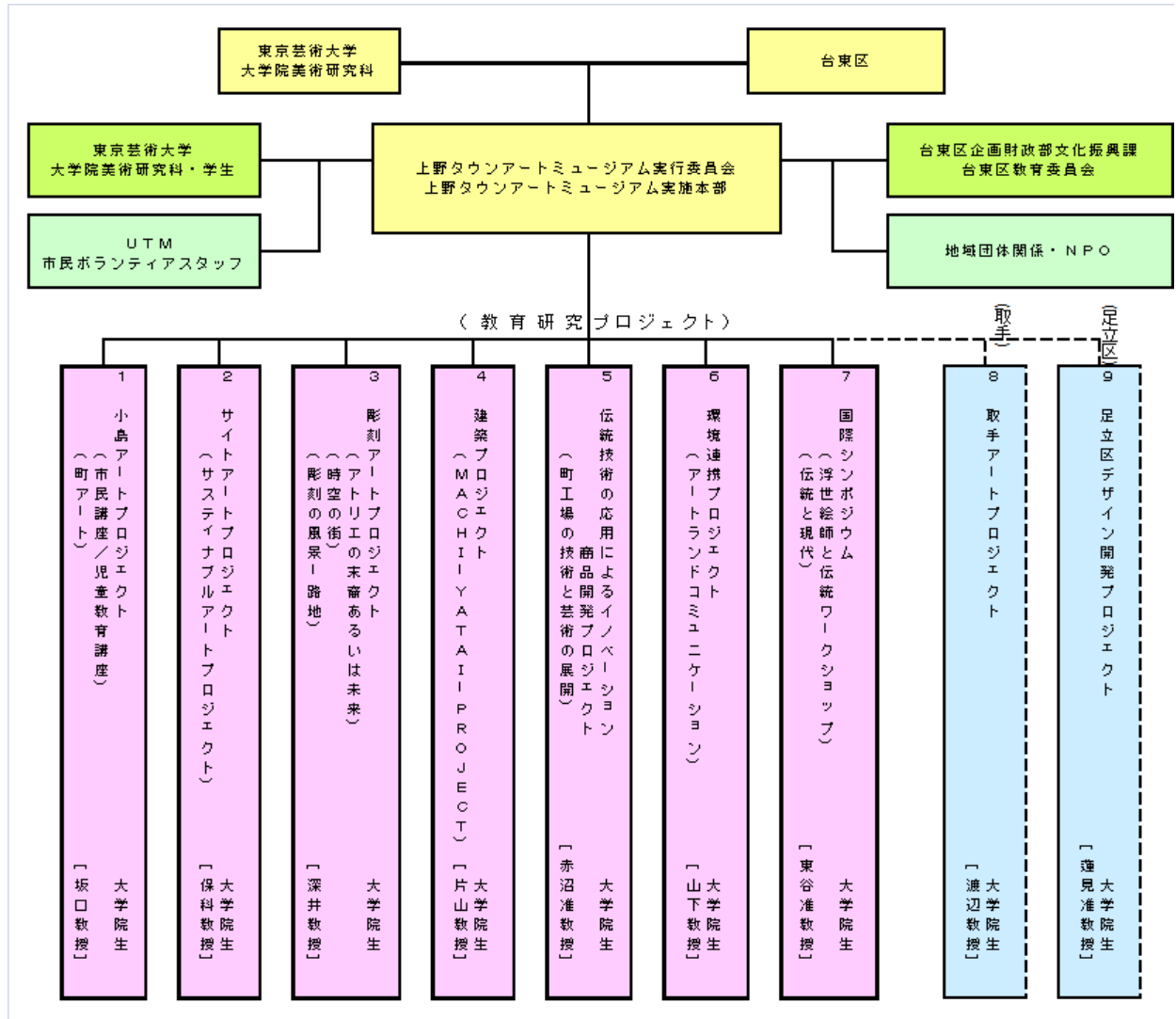
さらに、この新たな方式をより実効あるものとするために、美術分野に於ける学位の在り方やカリキュラムを総合的に検討実施する環境を整えることを目的に20年度から「芸術リサーチセンター」を新設することとなった(資料2-4(P.2-5)参照)。このセンターでは博士後期課程の学生を対象に、研究の進め方から論文のまとめ方まで幅広い視点からの指導を充実させ、博士の資質の更なる向上をはかることを目指している。それと同時に、美術系の博士の審査のあり方を芸術分野における評価基準の検討のもとに常に模索していくことが重要であると考えている。こうしたリサーチセンターを立ち上げる取り組みに対しては、文部科学省から特別教育研究経費(平成20年度~24年度)の助成を受けたことは、本研究科の博士学位授与プロセスの改善に対する高い評価と期待を示していると言える。

②事例2「上野タウンアートミュージアムの実施」(分析項目Ⅲ教育方法)

(質の向上があったと判断する取組)

本研究科の教育は、各専攻のアトリエや工房、研究室での創作研究活動を中心となっていることが特徴である。これは高度な教育内容をマンツーマンで実施するには最適な方法であるが、一方で研究室という閉塞した単位で全てが完結する可能性も秘めており、複数の研究室が横断的に集まったり、実社会の中で活動したりする必要性も指摘されてきた。こうした認識から、本研究科ではこれまでも、研究室横断型、あるいは社会性を持ったプログラムを実施してきたが、平成19年度から実施した上野タウンアートミュージアムは、これまでの実績を基にしつつ、研究科全体で取り組んだプロジェクトであり、その実現によって大きな教育的効果があったと考えている(資料2-7(P.2-9~2-10)及び下記の資料2-21参照)。

資料 2-21 上野タウンアートミュージアム



※取手、足立区のプロジェクトは上野タウンアートミュージアムと同様に地域連携を院生教育に取り入れたプロジェクトとして参考掲載

3. 音楽学部

I	音楽学部 of 教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	3 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・	3 - 3
	分析項目 I	教育の実施体制	・ ・ ・ ・ ・ 3 - 3
	分析項目 II	教育内容	・ ・ ・ ・ ・ 3 - 7
	分析項目 III	教育方法	・ ・ ・ ・ ・ 3 - 1 2
	分析項目 IV	学業の成果	・ ・ ・ ・ ・ 3 - 2 5
	分析項目 V	進路・就職の状況	・ ・ ・ 3 - 2 7
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	3 - 3 0

I 音楽学部の教育目的と特徴

- 1 音楽学部は、音楽についての深い学識と高い技術を授け、音楽の各分野における創造、表現、研究に必要な優れた能力を養い、社会的要請に応える人材の育成を目的としている。具体的には、優れた表現者(演奏家、作曲家、指揮者など)や、広く社会の文化発展に寄与し核となる人材の養成を目指す。
- 2 本学部は、文部省音楽取調掛(明治12年～20年)から東京音楽学校(明治20年～昭和24年)を経て東京芸術大学音楽学部(昭和24年～現在)に至る120年の歴史をもつ、国立大学で唯一の音楽を専門とする学部である。

本学部においては、「国楽」の創成をめざした明治の創設期より、西洋音楽を取り入れその普及を図るとともに、我が国固有の音楽の継承と研究にも努めてきた。こうした二つの音楽伝統を受け継ぎ時代に適した形に発展させていくことが、今日もなお芸術文化関係者から本学部に求められている。

その一方で、近年、音楽の持つ文化的な意義のみならず経済的・社会的意義が広く認識されてきたこと、デジタル技術をはじめとする科学技術の進展により音楽芸術においても急速に新しい表現方法が展開されつつあることを視野に入れて、我が国の音楽文化の創造的な発展の道を主導的に切り開いていくことも、同時に本学部に期待されている。
- 3 本学部の教育においては、専門性を一層深めていくためにも、また関連する幅広い知識や言語に関する技能等を習得し、それぞれの専門に生かしていくためにも、演奏芸術センターや言語・音声トレーニングセンターといった学内共同教育研究施設との協力が不可欠である。

とりわけ演奏芸術センターは、教育成果の発表の場であり、新たな演奏芸術の創造・発信の拠点でもある奏楽堂の運営にあたりとともに、新たな舞台制作関連の授業科目などを開設することによって、本学部の教育内容をより充実したものとしている。さらに、各科が横断的・総合的に係ることのできるプロジェクトの発信や学生の主体的取組の推進などを通して、演奏芸術センターは、本学部独自の教育の構想・展開にとってなくてはならない存在となっている。
- 4 本学は、大学全体として、芸術により社会に貢献できる大学として活動することを重視しており、本学部においても、社会との接点を持った取組を推進している。

本学部における専門教育は、社会的にもきわめて高い評価を受けており、毎年全国各地より演奏等の依頼が数多く寄せられている。本学部はこれらを重要な教育の機会と位置づけ、学生たちの学習・研究の成果発表の場として活用している。また、本学部上野校地は、周辺に美術館、博物館、ホール等の文化施設が充実しており、いわば「文化発信地」に位置している。さらに、平成18年度より音楽環境創造科が移転した千住校地がある足立区も、文化芸術の振興によるまちづくりを推進している。これらの地域環境を活かし、地域に開かれた大学として活動展開することが本学部に求められている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

音楽学部の教育研究組織は、作曲科・声楽科・器楽科・指揮科・邦楽科・楽理科・音楽環境創造科の7科で構成されている。

本学部の教育研究組織は、専任教員の専門分野からみても分かるように、音楽の諸領域をカバーしていること、特に、邦楽に関する教育を専門的に行う「邦楽科」が1つの学科となっていること及び科学技術等の新展による新しい表現や音楽と物理的・社会的環境との関わりなどを扱う音楽環境創造科(平成14年度設置)を設けていることが特徴となっている(資料3-1, 3-2のとおり)。

資料3-1 音楽学部の教育研究組織※()は入学定員。※教員数は資料3-2を参照

学科	専任教員の専門分野
作曲科 (15)	作曲, 作曲理論
声楽科 (54)	声楽(ソプラノ, メゾソプラノ, アルト, テノール, バリトン)
器楽科 (98)	鍵盤楽器(ピアノ, オルガン), 弦管打楽器(ヴァイオリン, ヴィオラ, チェロ, コントラバス, フルート, クラリネット, オーボエ, トランペット, ホルン, チューバ, 打楽器), 古楽(古楽器, バロック声楽)
指揮科 (2)	指揮
邦楽科 (25)	長唄三味線, 箏曲, 能楽, 邦楽囃子, 長唄, 日本舞踊
楽理科 (23)	音楽美学, 西洋音楽史, 日本・東洋音楽史, 音楽教育, ソルフエージュ, 応用音楽学, 音楽文芸
音楽環境創造科 (20)	音楽音響創造, 芸術環境創造

(参考)学内共同教育研究施設※〈 〉は本務教員数

施設名	教員の専門分野
言語・音声トレーニングセンター〈5〉	英語, イタリア語, ドイツ語, フランス語
演奏芸術センター〈4〉	作曲, コンサート制作, ヴァイオリン, 音楽音響学

資料3-2 音楽学部教員数

学科名	専任教員数						学内 兼務 教員	学外兼務教員			教育研 究助手
	性別	教授	准教授	講師	助教	合計		教員か らの兼 務	教員以 外から の兼務	合計	
作曲科	男	4	1	0	0	5	12	86	400	486	70
	女	0	0	0	0	0					
声楽科	男	2	3	0	1	6					
	女	4	1	0	0	5					
器楽科	男	14	9	0	0	23					
	女	2	5	0	0	7					
指揮科	男	1	0	0	0	1					
	女	0	0	0	0	0					
邦楽科	男	3	2	0	0	5					
	女	1	2	0	0	3					
楽理科	男	9	5	0	0	14					
	女	1	2	0	1	4					
音楽環境 創造科	男	1	3	1	0	5					
	女	0	1	0	0	1					
合計	男	34	23	1	1	59					
	女	8	11	0	1	20					

(平成19年5月1日現在)

教員数は、資料3-2のとおりとなっている。本学部で、学外兼務教員の数が大きくなっているのは、専門実技並びに副科実技において、個人レッスンという指導方法をとる授業が中心となっているためであり、また、オーケストラ、オペラ、アンサンブルなどにおいて伴奏、実技等補助を行う者も必要であるためである。

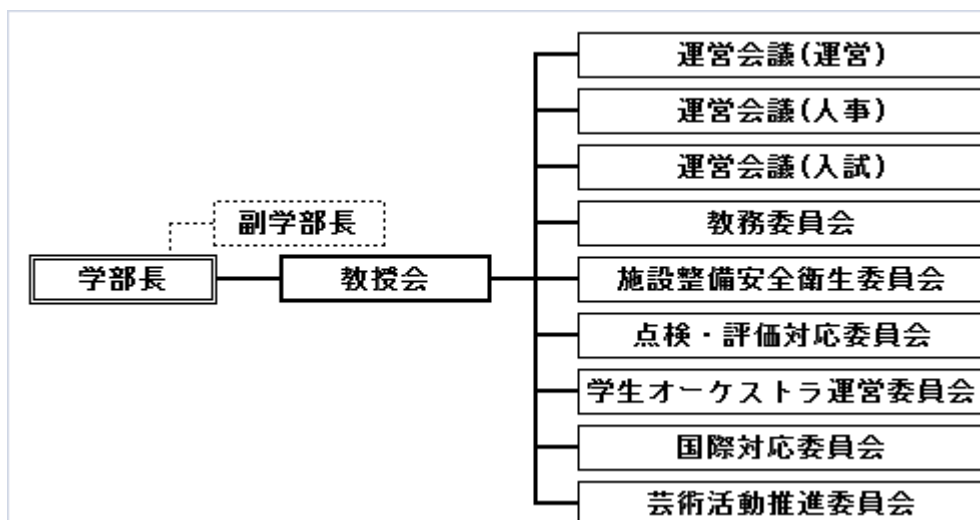
また、本学部で行う教育研究を円滑に行えるようにするため、教育研究助手制度を整備して、専任教員と協働して学科等の運営や教育研究にあたる者を配置している。

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本学部の運営にかかる体制は、資料 3-3 のとおりである。このうち、主として教務委員会が本学部の教育内容、教育方法の改善に関する役割を担っている。教務委員会において、平成 18 年度から本学部の教育課程等の見直しを行い、音楽環境創造科を除く各科は平成 20 年度新入生から適用される新しい教育課程表を策定した。なお、平成 14 年度に新設した音楽環境創造科については、大学院に進学した第 1 期生が修士課程を修了する平成 19 年度までを 1 区切りとして、教育成果についての検証を行ったうえで、平成 21 年度入学生以降の教育課程表について見直しを行うこととなっている。

資料 3 - 3 音楽学部の委員会構成



本学部は、音楽の諸領域における実技教育が、専門教育の中心となっている。そのため、専門実技においては、教員と学生が 1 対 1 で行う個人レッスンや少人数のグループ指導が指導方法としてとられている。こうした指導方法を採用している授業科目においては、個々の学生の個性やスキルを勘案しながら、課題曲の決定や課題に応じた適切な指導方法などについて、教員と学生の間で適宜意見を交換して決定し、進めていくことになる。

また、各科(或いは楽器種等の別による)の教員会議において、実技指導の状況について教員相互のディスカッションを行うことにより、各科内の教育内容や教育方法を全体的に見直していくこととしている。こうした日常的な見直しを通して、認識された問題点を反映させて、教務委員会において本学部の教育課程表の改定が実施された。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

本学部の基本的組織編成は、資料 3-1 及び 3-2 (P. 3-3) のとおりである。専任教員 1 人当たりの学生数は 12.6 人となっており、公私立の音楽大学と比較して特別少ない値ではないが、十分な数を確保している。また、専任教員とともに学生の教育にあたる兼務教員等が

相当数配置されており、本学部の教育上の特色である個人レッスン等を十分に行えるように配慮している(参考として資料3-4:音楽学部・大学院音楽研究科教員一覧を参照願う。)

資料 3-4:音楽学部・大学院音楽研究科教員一覧
(「大学案内 2008」より:平成 19 年 10 月現在)

■作曲			■指揮		
	野田 暉行	教授		小林 研一郎	教授
	尾高 惇忠	教授		尾高 忠明	客員教授
	浦田 健次郎	教授	■邦楽		
	川井 學	教授	長唄三味線	藤原 睦子	教授
	小鍛冶 邦隆	准教授	長唄	浅見 文子	准教授
■声乐			箏曲(生田流)	安藤 政輝	教授
	伊原 直子	教授	箏曲(山田流)	萩岡 松韻	教授
	川上 茂	准教授	能楽(観世流)	関根 知孝	准教授
	朝倉 蒼生	教授	能楽(宝生流)	武田 孝史	教授
	佐々木 典子	准教授	邦楽囃子	三浦 正義	教授
	福島 明也	准教授	日本舞踊	大橋 萬壽子	准教授
	多田羅 迪夫	教授	■音楽文化学		
	寺谷 千枝子	教授	音楽学	船山 隆	教授
	永井 和子	教授		土田 英三郎	教授
	直野 資	教授		片山 千佳子	教授
	吉田 浩之	准教授		大角 欣矢	准教授
	林 康子	招聘教授		塚原 康子	准教授
	市原 太郎	客員教授	音楽教育	植村 幸生	准教授
	直井 研二	助教		佐野 靖	教授
■器楽				山下 薫子	准教授
ピアノ	植田 克己	教授	ソルフェージュ	テシュネ,ローラン	准教授
	青柳 晋	准教授		林 達也	准教授
	角野 裕	教授	応用音楽学	根木 昭	教授
	伊藤 恵	准教授		枝川 明敬	教授
	北川 暁子	教授		畑 瞬一郎	教授
	東 誠三	准教授	音楽文芸	松原 千代繁	客員教授
	渡邊 健二	教授		成田 英明	教授
	迫 昭嘉	教授		中嶋 敬彦	教授
	粕谷 美智子	教授		檜山 哲彦	教授
	有森 博	准教授	音楽環境創造	杉本 和寛	准教授
	タッキーノ, カプリエル	外国人教師		西岡 龍彦	教授
	オルガン			熊倉 純子	准教授
	ヴァイオリン			亀川 徹	准教授
				市村 作知雄	准教授
				毛利 嘉孝	准教授
ヴィオラ	澤 和樹	教授		丸井 淳史	講師
	漆原 朝子	准教授	音楽研究センター	関根 和江	助教
	玉井 菜採	准教授	言語・音声トレーニングセンター		
チェロ	フーレ, ジェラルド	招聘教授	独語	シュタイン, ミヒャエル	外国人教師
	川崎 和憲	准教授	仏語	コラ, アラン	外国人教師
コントラバス	河野 文昭	教授			
	山崎 伸子	准教授			
	永島 義男	教授			

クラリネット	山本 正治	准教授	伊語	キッツォーニ、ルチアーナ	外国人教師
フルート	金 昌国	教授	英語	磯部 美和	助教
オーボエ	小畑 善昭	教授		大津 陽子	助手
サキソフォン	富岡 和男	客員教授			
ファゴット	岡崎 耕治	客員教授	演奏芸術センター		
ホルン	守山 光三	教授		松下 功	教授
トランペット	杉木 峯夫	教授		大石 泰	准教授
トロンボーン	秋山 鴻一	招聘教授		海藤 春樹	客員教授
打楽器	藤本 隆文	准教授		西川 信廣	客員教授
室内楽	岡山 潔	教授		瀧井 敬子	客員教授
	稲川 榮一	教授		岩崎 真	助教
	松原 勝也	准教授			
古楽	鈴木 雅明	教授			
	野々下 由香里	准教授			

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学部の授業科目は、履修の指定方法により必修科目、選択科目、自由科目に、授業の種別により専門科目、共通科目に区分される。専門科目は、各科(専攻)の専門教育の中心をなす授業科目で、履修が原則として当該科(専攻)の学生に限られる科目(専門実技科目、作曲科作曲理論関係科目、楽理科音楽学関係科目、音楽環境創造科プロジェクト科目、学内演奏、卒業作品、卒業演奏、卒業論文、卒業制作など)と複数の科(専攻)に係わる科目(オーケストラ、吹奏楽、室内楽など)に大別される。共通科目は、科(専攻)に係わりなく、履修できる科目で、音楽に直接関係ある基礎知識や理論、技法、思考法を学ぶことにより、専門教育の糧となることを目的とする科目(ソルフェージュ、和声、副科実技)と専門教育を補い、芸術家、社会人、国際人に相応しい幅広い視野と豊かな教養の修得を目的とする科目(専門基礎科目、外国語科目、教養科目、保健体育科目)に大別される。

教育課程表は、各科(専攻及び楽器種)によって異なっているが、演奏系の各科(専攻)においては、各々が専門とする分野以外の分野の楽器等についても幅広く履修することが可能となっている。また、楽理科、音楽環境創造科においても演奏実技を課しており、理論だけでなく、基礎的な実技を修得することとしている。

(資料 3-5: 音楽学部卒業要件単位数, 資料 3-6: 音楽学部 教育課程(カリキュラム) 修得単位年次表, 資料 3-7: 音楽学部 シラバス記載例 参照)

資料 3-5: 音楽学部卒業要件単位数

科・専攻		必修 科目	選択科目			自由 科目	合計 単位 数	
			教養 科目	外国語 科目	その他			
作曲		84	16	8	16	0	124	
声楽		58	16	16	36	4	130	
器 楽	ピアノ	100	16	10	12	8	146	
	オルガン	84	16	10	16	8	134	
	弦楽	86	16	8	24	8	142	
	管打楽	96	16	8	10	12	142	
	古楽	84	16	10	16	8	134	
指揮		90	16	10	14	4	134	
邦 楽	三味線音楽		92	16	8	12	8	136
	邦楽囃子		92	16	8	12	8	136
	日本舞踊		90	16	8	12	10	136
	箏曲	山田流	96	16	8	4	12	136
		生田流	92	16	8	4	16	136
	尺八		88	16	8	8	16	136
	能楽		90	16	8	10	12	136
	能楽囃子		88	16	8	12	12	136
	雅楽		84	16	8	16	12	136
楽理		48	16	14	40	16	134	
音楽環境創造		64	16	8	28	8	124	

資料 3-6 音楽学部 教育課程(カリキュラム)修得単位年次表

例 1:平成 19 年度 器楽科(弦楽)

区分	授業科目	年次	1年次		2年次		3年次		4年次		修得単位数		
		期別	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	小計	中計	合計
必修科目	専門実技		4	4	4	4	4	4	4	4	32	86	142
	学内演奏						2				2		
	卒業演奏								4		4		
	ピアノⅠ		1	1							2		
	ソルフェージュ A-Ⅰ		2	2	2	2					8		
	ソルフェージュ A-Ⅱ		2	2	2	2							
	和声初級		4								4		
	和声中級				4						4		
	弦楽合奏(注 1)		4								4		
	オーケストラ 室内オーケストラ				8		8		8		24		
	室内楽Ⅰ		2								2		
選択科目	ピアノⅡ				1	1	1	1	1	1	16	48	
	副科実技				2		2		2				
	ソルフェージュ B-Ⅰ						2	2	2	2			
	ソルフェージュ B-Ⅱ						2	2	2	2			
	和声上級						4						
	室内楽Ⅱ				4								
	室内楽Ⅲ						4						
	室内楽Ⅳ								4				
	吹奏楽(注 2)				4		4		4				
	西洋音楽史		4										
	教養科目		16								16		
	外国語科目Ⅰ		8								8		
	外国語科目Ⅱ						4				8		
	専門基礎科目		8										
	保健体育		2										
自由科目			8								8	8	

(注 1)ハーブ専攻学生は弦楽合奏に代えて吹奏楽を履修すること。

(注 2) コントラバス専攻学生は2年次以降吹奏楽を履修することができる。

例 2:平成 19 年度 音楽環境創造科

区分	授業科目	年次	1年次		2年次		3年次		4年次		修得単位数		
		期別	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	小計	中計	合計
必修科目	プロジェクト(注 1)		12		12		12				36	64	124
	卒業制作								12		12		
	専門講義(注 2)		16								16		
選択科目	演習		12								12	52	
	特殊講義		12								12		
	外国語科目(注 3)		8								8		
	教養科目		16								16		
	副科実技		2～4								4 (注 4)		
	先端芸術表現科目		2～4										
自由科目			8								8	8	

(注 1)プロジェクトは学科が開設するいずれかのプロジェクトを選択して履修すること。

(注 2) 専門講義は、3年次修了時まで16単位を修得すること。

(注 3)外国語科目は、学科指定の英語4単位を必修とする。

(注 4)副科実技または先端芸術表現科開設科目のいずれかで合計4単位を修得すること。

プロジェクト(各12単位)

プロジェクト1
プロジェクト2-1
プロジェクト2-2
プロジェクト3
プロジェクト4
プロジェクト5

専門講義科目(各4単位)

身体芸術論
録音技術概論
音楽とテクノロジー
文化環境論
文化研究
音響心理学概論

演習科目(無印は各2単位、※は各4単位)

コミュニケーション演習
コンピュータ音楽基礎演習
声楽実技演習
芸術運営演習
ジャズ・ポピュラー音楽演習
※ 音楽基礎演習・初級
※ 音楽基礎演習・中級
ソルフェージュ(音楽基礎演習A)
ソルフェージュ(音楽基礎演習B)
演奏実技演習
映像基礎演習Ⅰ
映像基礎演習Ⅱ
サウンドデザイン演習
DTP出版編集演習
サウンド・シンセシス
音楽理論演習
※ 脚本読解演習

特殊講義科目(無印は各2単位、※は各4単位)

※ ジャズ・ポピュラー音楽理論
芸術運営論Ⅰ:基礎概論
芸術運営論Ⅰ:音楽マネジメント
芸術運営論Ⅰ:著作権
※ 芸術運営論Ⅱ:NPO論
芸術運営論Ⅱ:地方自治体の文化行政
芸術運営論Ⅱ:芸術支援
芸術運営論Ⅱ:マーケティング
※ 音響設計学概論
日本音楽概論
コマーシャルにおける映像と音楽
※ 音響技術史
※ 現代ダンス概説
舞台技術論1(舞台機構)
舞台技術論2(照明)
サウンドアート概論
アジア音楽概論

資料 3-7 音楽学部 シラバス記載例

科目番号：科目名	2T021 日本音楽史概説	4 単位	通年
担 当 教 員	塚 原 康 子	曜日：時限	火曜 V限
授業のテーマ	日本における音楽文化の成立と展開を、各時代を特徴づける新しい種目の生成と既存種目の変化を軸に、通史的に把握する。		
授業計画及び内容	古代から現代にいたるまで、多種多様な音楽種目を発達させてきた日本の音楽文化の歴史的変遷を、考古学資料、楽譜をふくむ文献資料、現存する音楽伝承などを手がかりに概説する。近年の新しい研究動向やその成果もできるだけ紹介する。 1. 総説 2. 5世紀以前 3. 東アジア外来楽舞の伝来 4. 外来楽舞の日本化 5. 声明の伝来と展開 6. 中世の新しい歌謡 7. 能楽の源流 8. 能楽の大成 9. 三味線伝来とキリシタン音楽 10. 近世の中国系外来音楽 11. 近世の雅楽・声明・能楽 12. 三味線音楽の始まり 13. 近世箏曲の始まり 14. 地歌箏曲の展開 15. 尺八音楽の展開 16. 人形浄瑠璃の音楽 1 17. 人形浄瑠璃の音楽 2 18. 歌舞伎の音楽 1（長唄） 19. 歌舞伎の音楽 2（豊後系浄瑠璃） 20. 歌舞伎の音楽 3（陰囃子） 21. 近代の日本音楽 1（戦前） 22. 近代の日本音楽 2（戦後）		
教材・参考書	『日本の音楽〈歴史と理論〉』（国立劇場事業部刊）。その他は随時指示する。		
成績評価の方法	試験（前期・後期）		
履修上の指示事項	楽理科1・2年生の必修科目。各人が現存する日本音楽の資料や実技・実演に接し、また諸外国の音楽史との類似点・相違点を考えることを通して、日本音楽史の特質をつかむことを期待する。		
備考（オフィスアワー）	金曜日 11:50～12:40		

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本学部では分析項目Ⅰで既述のとおり、各学科・専攻における個別レッスンや少人数グループ指導の教育の特長を活かして、個々の学生の発展段階に応じた教育指導を行うなど本学部ならではのきめ細やかな教育を行っている。一方、座学が中心となる楽理的な教育では、コンピュータ、オーディオ機器やパワーポイント等情報機器の活用による情報時代に対応した教育を行っている。

共通科目については、音楽学部全体の視野から、毎年教務委員会で審議の上、開設科目を決定している。特に本学部においては、演奏や文献購読等をおこなうにあたり、外国語のスキルが必要不可欠であり、いずれの科（専攻）においても、外国語科目を重視し、卒業要件単位にも一定の割合を持っている。特に声楽、オペラなどの分野では、正しい外国語のリズムの把握、舞台語の発声、発音の訓練が重要である。また、将来海外留学を希望する学生が多いことから、会話等の外国語実用科目についてのニーズも高い。こうしたことから、学内共同教育研究施設である言語・音声トレーニングセンターでの、ネイティブの教員を中心とした実用外国語科目や原典指導は、本学部の教育にとって重要である。同センターでは、幅広い言語種とレベルで外国語科目を開設しており、一定の範囲で本学部の卒業要件単位としても認めている。また、殆どの科目において、履修登録時にリスニングテストや面接試験でクラス分けを実施しており、各人のレベルにあった少人数教育が徹底されている。（資料 3-8 の〈言語・音声トレーニングセンターが提供する科目〉参照）このほか、美術学部で開設されている科目の一部についても本学部学生の履修を認めていること（資料 3-8 の〈美術学部開設科目中、本学部で履修可能な科目〉参照）、お茶の水女子大学と単位互換制度を整えていることなど、学生の多様な興味に応えられる環境となっている。

近年、芸術の文化的側面だけでなく、社会的・経済的側面での価値への認識が広がり、全国的に「アートによる町おこし」を行う自治体等が増えてきており、芸術経営に関する知識（アートイベント等のマネジメント能力あるいは知的財産に関する知識）をもった人材の需要が高まってきている。本学部では、そうしたニーズに対応するものとして平成 14 年度に音楽環境創造学科を開設している。当該科の芸術経営に関する科目（資料 3-6 の例 2 参照）の授業内容については、毎年細かく見直しを行っている。また、芸術経営・企画に関する基礎知識知識を持つことが卒業後に演奏家等として活動していくことを望む学生にとっても有用であるという考えから、教養科目において「アートマネジメント概論」、「著作権概論」などのアートマネジメントや知的財産に関する科目、演奏芸術センターが提供する舞台制作等に関する科目（資料 3-8 の〈演奏芸術センターが提供する科目〉参照）、社会と関わる音楽家としての自己のあり方を考える「音楽療法概論」「応用医学研究」等の科目を開設し、音楽について多様な観点を持つことのできる人材を育成している。

資料 3-8 他学部等開設科目**〈美術学部開設科目中、本学部で履修可能な科目〉**

社会学	芸術論	IMA 概論
生物学	映像芸術論	複合表現演習
倫理学	音表現論	ドローイング演習
ドイツ文学Ⅰ（詩）	身体言語論	絵画空間論
図学	アート・ミニストレーション概論	写真概論
色彩学	戦後視覚文化論	写真表現演習
ガラス工芸演習	メディア概論	現代写真論
伝統演劇論	現代芸術論	

〈言語・音声トレーニングセンターが提供する科目〉

英語会話Ⅰ（中級）	独語会話（中級）	伊語会話（中級）
英語会話Ⅱ（上級）	実用ドイツ語	実用イタリア語
英語会話Ⅲ（上級）	独語作文（上級）	イタリア語朗読法演習
英語作文Ⅰ（中級）	ドイツ・リート歌詞演習	伊語原典指導
Advanced Writing（英作文上級）	ドイツ語朗読法演習	ロシア語朗読法演習

実用英語Ⅰ	独語原典指導	演奏録音研究
実用英語Ⅱ	仏語初級表現法	
英語総合講座Ⅰ(英語表現法)	実用フランス語	
英語総合講座Ⅱ(言語習得)	フランス語朗読法演習	
英語原典指導	仏語原典指導	
＜演奏芸術センターが提供する科目＞		
音楽情報プレゼンテーション	劇場芸術論	サウンドレコーディング基礎演習
創造の今日と未来	コンサート制作論	ホール音響概論
劇場技術論	AVメディア	
＜芸術情報センターが提供する科目＞		
芸術情報特論	DTPデザイン演習	芸術情報演習(デザイン)
CAD図法演習	DTPデザイン演習初級	サウンドプログラミング演習
コンピュータ基礎演習	Webモーショングラフィックス演習	グラフィックスプログラミング演習
Webデザイン演習	3Dグラフィックス演習	コンピュータプログラミング演習
Webデザイン演習初級	実写映像演習	情報機器概説
	スタジオサウンド演習	

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

各学科・専攻の教育課程は、専門分野を学ぶにふさわしい内容となっている。また、上述のとおり、学生や社会からの要請に応える授業科目の開設や、授業内容・指導方法の見直しを随時行っている。

実技科目については、各学科・専攻ごとの学年進行によることを基本とし、各学科・専攻のレッスン室で授業が行われるため、学生と教員の意見交換がしやすい状況となっている。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学部のカリキュラムは、分析項目Ⅱで示した資料3-6(P.3-8)のとおり、実技を中心としたものである。その基本は個人レッスンや少人数のグループ指導中心であるが、本科の教育だけでなく副科においても実技指導が行われ、専門分野以外の幅広い音楽に関する教育が行われている。(※副科開設科目は資料3-10のとおり。)

社会で活躍する国内外の音楽家・研究者を招聘した集中講義・特別講座を組み入れることにより、実践的な指導や現在の先端的分野の動向などを取り入れることができるような工夫をしている(資料3-11参照)。また、著名な音楽家・研究者を特別招聘教授に任用して集中的に指導を行っている。(資料3-12参照)さらに、適宜行われるリサイタル、学内演奏会等(資料3-13,3-14参照)ではレッスン室では得られないいわゆる「生」の演奏会を通じた指導が行われ、その一部が公開されていることから、聴衆との相互交流といった得難い経験となっている。そのことが、学生の優れた演奏や学生同士の自主的な取り組みや競争を促すことに繋がっている。

このように、外部に開かれた教育指導を行うことにより社会からの評価も高くなっており、さらには、奏楽堂等を有効に活用した学生中心の演奏会を通して、学部在学中から社会と結びついた多面的な教育を展開している。具体的には、昭和47年(1972年)から開始されたモーニング・コンサートは、学生と社会が出会う格好の場となっている。鑑賞者にとってもあわただしい朝の憩いのひとときとなっていて、固定的なファンが着実に増加している。また、平成17年(2005年)より始められた「奏楽堂企画学内公募演奏会」は、学生たちの意欲を掻き立てるとともに、その独創的なプログラミングが社会的にも注目を集めている。

学習指導法のさらなる工夫としては、学生からの質問等への対応として、オフィスアワーを設定、メール・電話等による情報交換も随時行い、学生たちの研究・学習の支援に努めている。

資料3-10:音楽学部副科実技(ピアノ以外)開設科目一覧

科目		科目		科目	
声楽	独唱 合唱	管打楽器	フルート オーボエ クラリネット ファゴット サクソフォン ホルン トランペット トロンボーン ユーフォニアム チューバ 打楽器	邦楽	長唄三味線 清元三味線 常磐津三味線 長唄 常磐津 清元 邦楽囃子(小鼓) 邦楽囃子(大鼓) 邦楽囃子(太鼓) 邦楽囃子(笛)
	オルガン		チェンバロ フォルテピアノ バロックヴァイオリン バロックチェロ ヴィオラ・ダ・ガンバ バロックオーボエ フラウト・トラヴェルソ		箏曲(山田流) 箏曲(生田流) 尺八(琴古流) 尺八(都山流) 能楽囃子(小鼓) 能楽囃子(大鼓) 能楽囃子(太鼓) 能楽囃子(笛)
鍵盤楽器					
弦楽器	ヴァイオリン ヴィオラ チェロ ハープ				
指揮		古楽			
	指揮法				

資料 3-11:平成 19 年度分 特別講座等

No.	受講対象	題目	講師氏名	講師所属等
1	全専攻	特別講座「ヴァイオリン特別講座」	アナ・チュマチェンコ	ミュンヘン音楽大学教授
2	全専攻	特別講座「チェロ特別講座」	堤 剛	桐朋学園大学学長
3	全専攻	特別講座「楽器学(管打楽器)」	山領茂, 小島 修一	ヤマハ銀座管楽器アトリエ
4	全専攻	特別講座「日本歌曲概論」	畑中 良輔	本学名誉教授
5	全専攻	特別講座「古典フルート音楽」	ウィリアム・ベネット	元ロンドン・ロイヤルアカデミー教授
6	全専攻	特別講座「ディートリヒ・ブクステフーデのオルガン音楽」	ステッフ・タンストラ	北オランダオルガンアカデミー主宰
7	全専攻	特別講座「グリーグ音楽の真髄に迫る」	トロン・セウ・ウェル, アイナル・ロッティンゲン	メイン州立大学准教授, ハンガール交響楽団コンサートマスター/ピアニスト
8	全専攻	特別講座「古楽邦楽器で有る三味線製作の伝統的技法の実演と講演」	堀込敏雄, 清水善一, 白田千明, 津布久清一郎, 岡田和浄, 谷中満	東京都優秀技能者等
9	全専攻	特別講座「シューベルトの歌曲に於けるテンポについて 演奏法と解釈」	ラモン・ワルター	フライブルク音楽大学教授(ピアニスト, 役者)
10	全専攻	特別講座「弦楽四重奏公開レッスン」	ライブツィヒ弦楽四重奏団	ライブツィヒ弦楽四重奏団
11	全専攻	特別講座「フランスロマン派・近代フルート音楽について」	ウインセンス・フラッツ=パリ	パリ管弦楽団スーパーソロイスト
12	全専攻	特別講座「公開講座(ヴィオラ)」	ジークフリート・フーリンガー	元ウィーン国立音楽大学ヴィオラ科主任教授
13	全専攻	特別講座「古楽とクラリネット」	コリン・ローソン	英国王立音楽大学学長
14	全専攻	特別講座「ブラームス:ピアノ小品集作品 118 の解釈について」	エヴァ・ボブウォッカ	ビドゴシチ音楽院教授
15	全専攻	特別講座「ドイツ歌曲 演奏法・解釈法」	コンラート・リヒター	元シュトゥットガルト音楽大学教授, 元本学客員教授
16	全専攻	特別講座「一吹奏楽—『朝鮮民謡の主題による変奏曲』演奏と解釈」	キム・ヨンユル	韓国ソウル大学校音楽大学教授(副学長)
17	全専攻	特別講座「Minimal Music als post-heroisches Management」	セバスティアン・クロツ	ライブツィヒ大学教授
18	全専攻	特別講座「金管楽器と古楽」	ダニエル・ラサル, ルイス・コル・イ・ツウルス, エレーヌ・メトウース, 康子・フハール	トゥールーズ古典金管アンサンブル「レ・サックブチエ」
19	全専攻	特別講座「フルートデュオ公開録音講座」	神田寛明, 竹澤栄祐	NHK 交響楽団(首席奏者), 埼玉大学准教授
20	全専攻	特別講座「文化生産者は『格差社会論』をどう考えるか ～『芸術』と『社会』の狭間で～」	鈴木謙介, 川崎昌平, 福住廉	国際大学 GLOCOM 研究員, 美術家, 美術評論家
21	全専攻	特別講座「複数音源が統合的に制御された音場の設計と音響心理学的評価」	ウィリアム・L・マーテンス	マギル大学シュリック音楽学校サウンドレコーディング学科准教授
22	全専攻	特別講座「奈良・京都・近江における邦楽関係史跡について」	中井猛	箏曲生田流宮城社大師範, 元東京芸術大学非常勤講師
23	学生オーケストラ	グリーグ&シベリウス・プロジェクト第1回「学生オーケストラ演奏会Ⅰ」指導及び指揮	タグラス・ホストック(特別招聘教授)	カルロヴィ・ヴァリ交響楽団他
24	学生オーケストラ, 指揮科	「学生オーケストラ演奏会Ⅲ」指導及び指揮, 指揮科特別講義	ジョルト・ナジ(特別招聘教授)	国立パリ高等音楽院教授
25	チェンバーオーケストラ	「藝大チェンバーオーケストラ第10回定期演奏会」指導及び指揮	ジャン・ピエール・ウァレス(特別招聘教授)	ジュネーブ音楽院教授
26	チェンバーオーケストラ	「東京藝大チェンバーオーケストラ第9回定期演奏会」指導及び指揮	ケルハルト・ホッセ(特別招聘教授)	元本学客員教授
27	チェンバーオーケストラ, 弦楽器・室内楽	ハイドン・シリーズ第1夜「オーケストラ演奏会」指導及び指揮, 弦楽器・室内楽専攻学生指導	マルコム・レイフィールド(特別招聘教授)	英国王立北音楽院弦楽科主任教授

28	オーボエ	オーボエ専攻学生特別指導	オットー・ウインター	元本学外国人教師
29	オルガン	集中講義「オルガン建造法実習」	マテュー・ガルニエ	マルク ガルニエ オルク シャホン 有限会社(オルガン・ビルター)
30	管打楽器	特別講座「ロマン派クラリネット作品の演奏と解釈」	ヴェンツェル・フックス	ベルリンフィルハーモニー管弦楽団 ソロ奏者
31	弦楽1年	弦楽合奏	トーマス・マイニング	ドレスデン歌劇場オーケストラコンサート マスター
32	弦楽器	特別講座「弦楽器奏法, 合奏, 演奏 解釈」	トーマス・マイニング他 3 名	ドレスデン歌劇場オーケストラコンサート マスター他
33	ソルフェージュ 1 限受講生	特別講座「日本伝統音楽入門 (唱歌とは何か)」	増本 喜久子	桐朋学園大学音楽学部特 任教授
34	打楽器	特別講座「マリンバの現代奏法につ いて」	エリック・サミュ	パリ国立高等音楽院及び英 国王立音楽院教授
35	楽理	特別講座「19 世紀のドイツ語圏にお けるベートーヴェンの《ミサ・ソレムニ ス》の受容」	沼口 隆	国立音楽大学専任講師
36	楽理	特別講座「教養の歴史社会学 ー ドイツの市民社会と音楽」	宮本 直美	立命館大学准教授
37	音楽環境 創造	特別講座「音楽のサラウンド制作につ いて」	富田 勲	音楽家(シンセサイザー)

資料 3-12: 特別招聘教授制度による招聘教授(19 年度)

対象者	職名
ダグラス・ポストック	カルロヴィ・ヴァリ交響楽団常任指揮者
アノドラ・シュ・リゲティ	ハンガリー・テレコム交響楽団音楽監督
ジョルト・ナジ	パリ国立校等音楽学院教授
マルコム・レイフィールド	イギリス王立北音楽院教授
ジャジャン・ピエール・ヴァレーズ	ジュネーブ音楽院教授

資料 3-13: 平成 19 年度 音楽学部公開試験等演奏会一覧

No.	演奏会名	会場	開催日
1	学内演奏会(オーケストラ) グリーク & シベリウス・プロジェクト 第 1 回	奏楽堂	H19.4.27
2	学内演奏会(管打楽)	奏楽堂	H19.5.11
3	学内演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.5.22
4	学内演奏会(オルガン)	奏楽堂	H19.5.23
5	学内演奏会(管打楽)	奏楽堂	H19.5.24
6	学内演奏会(オーケストラ)	奏楽堂	H19.5.25
7	学内演奏会(管打楽)	奏楽堂	H19.5.28
8	学内演奏会(古楽)	奏楽堂	H19.5.30
9	学内演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.6.1
10	学内演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.6.5
11	学内演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.6.12
12	学内演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.6.13
13	学内演奏会(吹奏楽)	奏楽堂	H19.6.27
14	学内演奏会(弦楽)	奏楽堂	H19.10.15
15	学内演奏会(弦楽)	奏楽堂	H19.10.16
16	学内演奏会(弦楽)	奏楽堂	H19.10.17
17	学内演奏会(指揮)	奏楽堂	H19.10.18
18	学内演奏会(声楽)	奏楽堂	H19.10.18
19	学内演奏会(雅楽)	第6ホール	H19.10.18

20	学内演奏会(声楽)	奏楽堂	H19.10.19
21	学内演奏会(声楽)	奏楽堂	H19.10.23
22	学内演奏会(能楽)	第4ホール	H19.10.24
23	学内演奏会(声楽)	奏楽堂	H19.10.26
24	学内演奏会(箏曲・尺八)	奏楽堂	H19.10.29
25	学内演奏会(三味線音楽・日本舞踊)	奏楽堂	H19.10.30
26	学内演奏会(作曲)	奏楽堂	H19.11.6
27	学内演奏会(作曲)	奏楽堂	H19.11.9
28	卒業試験公開演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.12.10
29	卒業試験公開演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.12.11
30	卒業試験公開演奏会(ピアノ)	奏楽堂	H19.12.12
31	卒業試験公開演奏会(古楽)	奏楽堂	H20.1.7
32	卒業試験公開演奏会(三味線・日本舞踊)	奏楽堂	H20.1.10
33	卒業試験公開演奏会(管打楽器)	奏楽堂	H20.1.11
34	卒業試験公開演奏会(管打楽器)	奏楽堂	H20.1.15
35	卒業試験公開演奏会(声楽)	奏楽堂	H20.1.16
36	卒業試験公開演奏会(声楽)	奏楽堂	H20.1.17
37	卒業試験公開演奏会(指揮)	第6ホール	H20.1.17
38	卒業試験公開演奏会(雅楽)	第6ホール	H20.1.17
39	卒業試験公開演奏会(弦楽:ヴァイオリン)	奏楽堂	H20.1.18
40	卒業試験公開演奏会(弦楽:ヴィオラ・チェロ・コントラバス・ハープ)	奏楽堂	H20.1.21
41	卒業試験公開演奏会(オルガン)	奏楽堂	H20.1.22
42	卒業試験公開演奏会(尺八・箏曲)	奏楽堂	H20.1.22
43	卒業試験公開演奏会(能楽)	第4ホール	H20.1.24

資料 3-14 平成 19 年度 音楽学部・音楽研究科教育成果発表例(公開試験以外)

No.	展覧会名	会場	会期	発表学生の 学科・専攻	概要
1	取手アートプロジェクト 2007 -はじまりは隣の家のアーティスト-	取手校地及び 取手市内各所 他	H19.11.9 ～11.25 の 金土日祝 9日間	美術学部・ 美術研究科 の各学科・ 専攻, 音楽 学部音楽環 境創造科	主要な内容は、下記の3点である。 ・オープンスタジオ:取手市内で制作活動を行なうアーティストのアトリエ公開。 ・メタユニット_M1 プロジェクト:都市計画への提案を目的にセキスイハイムの住宅ユニットをリユースしたインスタレーションを市内各所で展開。 ・こどもプロジェクト:小学校にアーティストを派遣し制作指導を行ない、児童作品展を開催。
2	千住アートパス 2007	千住校地	H19.12.15 ～ H19.12.16	音楽環境創造	千住アートパスは、東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科の必修実践授業の研究結果を発表する場。2007 年は「これ、ゼンブみてほしい。」をタイトルに掲げ、音楽制作、録音音響、舞台作品、環境芸術、文化研究など、さまざまな角度から音楽を中心とした芸術とそれを取り巻く環境にアプローチした。
3	東京芸術大学音楽環境創造科 音楽環境創造科 卒業制作・修士論文発表会「マーブル!!」	千住校地	H20.2.8 ～ H20.2.10	音楽環境創造	2002 年に新設された音楽環境創造科の第三期生による卒業制作と、昨年度新設された大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽音響創造分野・芸術環境創造分野一期生による修士論文の発表会。作品展示、プレゼンテーション、パフォーマンス、論文発表などの多様な発表の場。
4	藝大アーツ in 丸の内 「金管五重奏」	丸ビル	H19.11.9 ～ H19.11.10	音楽学部管 打楽器専攻 学生	120 周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部管打楽器専攻学生による演奏

東京芸術大学音楽学部 分析項目Ⅲ

5	藝大アーツ in 丸の内 「アカンサス音楽賞 受賞者によるリサイタル」	丸ビル	H19.11.10	音楽研究科 修士1年(ピアノ、バイオリン)	120周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部を優秀な成績で卒業する者に与えられる「アカンサス音楽賞」昨年度受賞者によるリサイタル
6	藝大アーツ in 丸の内 「邦楽演奏」	丸ビル	H19.11.11	音楽学部・研究科(邦楽)	120周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部・研究科の邦楽専攻学生による演奏
7	日銀ウォーキングミュージアム KINCO ～日本銀行×東京 芸術大学 地下金庫展～	日本銀行本店	H19.11.3 ～ H19.11.16	美術学部・美術研究科、音楽学部・音楽研究科	本展は、本学の学生(主に美術研究科油画第二・第三研究室、音楽研究科音楽文化学音楽音響創造、音楽学部音楽環境創造科)が、日本銀行本店旧館 地下金庫、旧営業場等にて様々なメディアを使い、絵画・立体・インスタレーション・映像・音響作品等の作品展示を行うもの。
8	モーニングコンサート 1～13	奏楽堂	H19.5.10 ～ H20.2.14	音楽学部	各科から選抜された優秀な学生が、公開の場で大学オーケストラと共演。 5/10(サクソフォーン、ピアノ)、5/17(ホルン、声楽)、5/24(ハープ、ピアノ)、5/31(作曲、ヴァイオリン、ヴィオラ)、6/21(フルート、ヴァイオリン)、6/28(作曲、ピアノ)、7/5(ピアノ、声楽)、7/12(作曲、ヴァイオリン)、9/6(オルガン、ヴァイオリン、チェロ)、11/15(トロンボーン、ヴァイオリン)、11/29(作曲、ピアノ)、2/7(バストロンボーン、ピアノ)、2/14(フルート、ピアノ)
9	オペラ「アルチーナ」	旧東京音楽学校奏楽堂	H19.7.13	音楽学部・研究科	音楽学部・研究科の学生・卒業生有志団体オペラアンサンブル "Incanto"の旗揚げ公演。パロック・オペラの傑作「アルチーナ」を上演。平成19年度文化庁芸術団体人材育成支援事業
10	藝大ミュージックフェスタ 千住	千住校地第7ホール	H19.10.6 ～ H19.10.7	音楽学部ピアノ、金管楽器、音楽環境創造科	芸大生によるクラシックコンサート(ピアノ独奏、金管五重奏)電子音楽とダンスの即興パフォーマンス
11	千住キャンパス1周年記念コンサート	東京芸術センター天空劇場	H19.11.17	音楽学部金管・打楽器	芸大金管アンサンブル、マリンバ・アンサンブル・クイントによる演奏
12	グリーグ&シベリウス・プロジェクト第1回 「学生オーケストラ演奏会Ⅰ」	奏楽堂	H19.4.27	学生オーケストラ	ダグラス・ボストック特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
13	「学生オーケストラ演奏会Ⅱ」	奏楽堂	H19.5.25	音楽学部弦管打学部2年以上	カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
14	「学生オーケストラ演奏会Ⅲ」	奏楽堂	H19.10.26	学生オーケストラ	ジョルト・ナジ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
15	藝大チェンバーオーケストラ 第9回定期演奏会	奏楽堂	H19.6.30	チェンバーオーケストラ	ゲルハルト・ボッセ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生による室内オーケストラの公開演奏会を開催。
16	藝大チェンバーオーケストラ第10回定期演奏会	奏楽堂	H19.2.15	チェンバーオーケストラ	ジャン・ピエール・ヴァレーズ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラの公開演奏会を開催。
17	藝大チェンバーオーケストラ演奏会	東京芸術センター天空劇場	H20.2.16	チェンバーオーケストラ	足立区の受託研究の一環として、足立区にある東京芸術センター天空劇場において、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラによる公開演奏会を実施。

18	ハイドン・シリーズ第1夜「オーケストラ演奏会」	奏楽堂	H19.11.1	チェンバーオーケストラ	マルコム・レイフィールド特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラの公開演奏会を開催。
19	定期演奏会「第39回学生オーケストラ定期演奏会」	奏楽堂	H19.11.30	学生オーケストラ	カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会。
20	定期吹奏楽第73回「東京芸術大学・韓国ソウル大学校音楽大学 交流吹奏楽合同演奏会」	奏楽堂	H19.11.28	音楽学部管打楽器専攻学生	韓国ソウル大学校音楽大学の迎え、学生主体の吹奏楽公開演奏会を開催。
21	「うたシリーズⅦ-1 松田トシ賞受賞者によるオペラ・ガラ」	奏楽堂	H19.6.28	音楽学部弦管打学部2年以上	松田トシ賞受賞者(声楽科卒業生)と学生オーケストラの共演による公開演奏会。
22	藝大オペラ定期第53回 G.プッチーニ「ラ・ボエーム」	奏楽堂	H19.10.13 ～ H19.10.14	音楽学部・音楽研究科声楽専攻学生	オペラ定期公演に学生を参加させ、教育成果の発表の機会としている。
23	オペラハイライトⅠ～Ⅲ	第6ホール	H19.7.3 H19.11.30 H20.1.22	音楽研究科声楽専攻(オペラ研究分野)	大学院声楽専攻(オペラ研究分野)の授業の一環として、教育成果を公開の場で発表する。
24	管弦ミニコンサート	第6ホール	H19.11.22	音楽学部弦・管1年	弦・管1年生による発表会。弦楽合奏、室内楽を演奏。
25	Nong project	韓国総合芸術学校	H19.9.17 ～ H19.9.19	音楽研究科修士課程作曲専攻2名	交流協定校である韓国芸術総合学校主催のNong projectでは、2003年以来、本学作曲科の学生・教員の作品交流が行われている。本年は、修士課程学生2名が招待され、その作品が演奏された。協定にもとづき、学部長裁量経費で渡航費を支援、派遣した。
26	藝大21 第3回奏楽堂企画学内公募演奏会「国撃たれて響き在り～祝・創楽120年～」	奏楽堂	H19.3.15	音楽学部楽理科	学生から公募した企画にもとづく公開演奏会。
27	博士コロキウム	5-401室	H19.6.12 H19.6.19 H19.10.23 H19.11.6 H19.11.20	音楽研究科博士後期課程音楽専攻(音楽学研究領域)(原則2年次)	準備中の博士論文について公開で発表を行い、かつ参加者との討論を通じてその内容を深めて行くことを目的とする。
28	楽理科研究演奏会	第6ホール	H19.12.11	音楽学部楽理科	楽理科学生から希望者を公募し、研究成果に関する演奏や実技研究の成果発表を公開の場でおこなっている。
29	楽理科卒論・修論・博論発表会	5-109室	H20.3.24	音楽学部楽理科	卒業・修了予定者による公開の論文発表会。

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

本学部は、実技教育を中心とした学部であるため、レッスン室、練習室、合奏室など(次頁、資料3-15参照)の教育指導・練習の場について、授業時間外の使用を認めている。そのため、学生は、講義科目を履修していない空き時間や授業時間外もレッスン室等で練習や復習等に自由に行っている。また、種々の楽器等の貸し出しを行うことにより、学生の幅広い主体的な学習に寄与している。(次頁、資料3-16参照)

さらに、施設の有効な利用のほか、定期演奏会等の出演にオーディションを課したり、優秀な学生に対する各種の顕彰制度を設けたりしている(資料3-17(P.3-19)参照)。特に学部教育における優秀者に対しては、全卒業生の中から「安宅賞」「アカンサス音楽賞」「同

声会賞」を授与し、今後の音楽活動の励みとなすほか、専攻分野別に各種賞を授与している。このような受賞者はその後コンクールでの優勝や他の賞を多く受賞するなど卒業後の音楽家としてのキャリア形成に一定の成果が認められる。さらに、学外からの依頼演奏を積極的に受諾することによりレベルの向上を図っている(資料 3-18(P. 3-19～3-23)参照)が、それは学部生の内から社会との連携を学ぶ絶好の機会となっている。こうした演奏会のオーディションや各種コンクールに学生が主体的に参加できるよう、開催情報等を学内に広報するなどして、キャリア形成を促す方策をとっている。

これまで専攻外の実技の習得については、副科実技において実施してきたが、さらなる履修を希望する学生が増加傾向にあることから、音楽教育振興会の支援の下、体験型の「楽器体験講座」を平成 19 年度より新たに開設し、学生の幅広い学習ニーズに対応している(資料 3-19(P. 3-23)参照)。

資料 3-15 レッスン室、練習室等の数

種類	室数	面積
レッスン室	107	3,548
練習室	128	2,549
合奏室	10	710
院生室、ゼミ室等	29	1,058
ホール	7	1,879
奏楽堂	1	6,540

※講義室、教員室等は含まない。※奏楽堂の面積には楽屋や機械室等も含む。

資料 3-16 貸出用楽器一覧

種類	数量	種類	数量	種類	数量
ヴァイオリン	39	チューバ	17	長唄大鼓	4
ヴィオラ	38	ワーグナーチューバ	8	長唄太鼓	18
チェロ	43	ホルン	39	能小鼓	14
コントラバス	31	トロンボーン	31	能大鼓	7
ハープ	12	スーザーホーン	2	能太鼓	10
弦楽用弓	136	リコーダー	46	胡弓(生田流)	9
ヴィオラダガンバ	13	オーボエダカッチャ	2	能笛	23
ヴィオラダモーレ	1	フラウトラベルソ	12	笙	15
リュート	2	オーボエダモーレ	9	箏	10
ギター	5	バグパイプ	1	龍笛	9
ピッコロ	8	バロックオーボエ	7	神楽笛	3
フルート	22	クラムホルン	5	高麗笛	5
オーボエ	13	バロックランケット	1	尺八	28
コールアングレ	9	バセットホーン	4	三ノ鼓	1
クラリネット	46	金管古楽器	9	琵琶	9
バスクラリネット	11	フリューゲルホルン	2	囃楽器	17
ファゴット	9	ポストホルン	2	和太鼓	2
コントラファゴット	2	ハンドベル	2	ガムラン	138
サクソフォーン	32	箏(山田流)	87	ガムラン用影絵人形	41
ホルネット	16	箏(生田流)	141	印度楽器	25
トランペット	52	三味線(長唄)	117	カヤグム	11
アルトホーン	5	清元・常磐津三味線	13	中国楽器	30
バリトンホーン	6	長唄小鼓	27		

資料 3-17 音楽学部・音楽研究科の顕彰制度一覧

No	奨学金等名	対象学科・専攻
1	安宅賞	全学科・専攻
2	長谷川良夫奨学基金	作曲
3	松田トシ賞	声楽
4	クロイツァー記念音楽賞	器楽(ピアノ)
5	浄観賞	邦楽
6	宮城賞	邦楽
7	常英賞	邦楽
8	アドリアネ・ムジカ賞	器楽(ピアノ)
9	野村学芸財団奨学金	楽理
10	卒業・修了作品買上	作曲
11	アカンサス音楽賞	全学科・専攻
12	同声会賞	全学科・専攻

資料 3-18:演奏依頼一覧(平成 19 年度)

※編みかけ部分は教員のみ。その他は学生のみ又は教員と学生によるもの。

	月	日	曜日	演奏会名	主催
1	4	5	木	平成 19 年度東京工業大学学部・大学院入学記念演奏会	東京工業大学
2		6	金	「芸大さくらコンサートIN科博」	東京芸術大学・国立科学博物館
4		19	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
5		19	木	【受託演奏】日本国際賞授賞式	国際科学技術財団
6		21	土	平成 19 年度同声会賞新人演奏会	東京芸術大学音楽学部同声会
7		27	金	第 1 回みどりの式典	内閣府
8		27	金	昭和音楽大学新百合ヶ丘キャンパスオープニング記念演奏会「9 音楽大学の学生による室内楽の祭典」	昭和音楽大学
9		27	金	昭和音楽大学新百合ヶ丘キャンパスオープニング記念演奏会「9 音楽大学の学生による室内楽の祭典」	昭和音楽大学
10	5	5	土	第 77 回読売新聞社主催新人演奏会	読売新聞社
11		6	日		
12		10	木	【受託演奏】平成 19 年度春の叙勲 勲章伝達式	文部科学省人事課
13		16	水	【受託演奏】平成 19 年度紫綬褒章・藍綬褒章及び黄綬褒章伝達式	
14		26	土	平成 19 年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
15		30	水	京都・国際音楽学生フェスティバル 2007	(財)ロームミュージックファンデーション
16		31	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
17	6月	2	土	平成 19 年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
18		2	土	平成 19 年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
19		5	火	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演リハーサル	(財)石川県音楽文化振興事業団
20		6	水	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
21		7	木	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
22		8	金	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
23		10	日	2007 レクサス演奏会	東京トヨペット株式会社
24		11	月	第 97 回日本学士院授賞式	日本学士院

東京芸術大学音楽学部 分析項目Ⅲ

25		11	月	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
26		12	火	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
27		13	水	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007 年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
28		15	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
29		16	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
30					
31					
32		18	月	平成18年度 第63回日本芸術院授賞式	日本芸術院
33		20	水	能登半島地震 復興記念演奏会オペラ「カルメン」ミニコンサート・説明会	(財)金沢芸術創造財団・ (財)石川県音楽文化振興事業団
34		21	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
35		22	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
36		23	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)(3か所)	取手市教育委員会
37					
38					
39		29	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
40		29	金	平成19年度三輪田学園邦楽鑑賞会	三輪田学園中学校
41		30	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
42					
43					
44	7月	7	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
45		13	金	オペラアンサンブル「アルチーナ」	オペラアンサンブル“Incanto” ALCINA 実行委員会
46		13	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
47		14	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)(3か所)	取手市教育委員会
48					
49					
50		18	水	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
51		19	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
52	8月	21	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
53		27	金	未来館コンサート	女性と仕事の未来館
54		2	木	平成19年度 第1回安曇野市立穂高東・西中学校 楽器演奏指導・コンサート	安曇野市教育委員会
55		3	金	第56回社会を明るくする運動音楽教室「竹の太鼓 を作って演奏しよう」	法務省保護局
56		4	土		
57		15	水	全国戦没者追悼式典	厚生労働省
58		18	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
59		19	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
60		20	月	平成19年度伝統音楽研修会	文部科学省初等中等教育局
61		21	火	JSPSサマープログラム送別会における和楽器演奏	総合研究大学院大学
62		21	火		
63	9月	23	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
64		25	土	埼玉大学 大学歌録音	埼玉大学
65		1	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
66		2	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
67		5	水	長唄東音会50周年記念演奏会	長唄東音会
68		7	金	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
		15	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団

東京芸術大学音楽学部 分析項目Ⅲ

69		16	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
70		16	日	それいけ！オルガン探検隊	サントリーホール
71		16	日	高橋節郎記念美術館	安曇野市
72		20	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
73		20	木	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
74		22	土	平成19年度取手市教育委員会主催ミニコンサート	取手市教育委員会
75		22	土	オペラセミナー	(財)足利市みどり文化・スポーツ財団
76		22	土	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
77		23	日	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
78		29	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
79		29	土	【受託演奏】文京シビック第5回定期演奏会	文京シビック合唱団
80	10月	4	木	綾瀬小学校音楽鑑賞教室(2回公演)	足立区立綾瀬小学校
81		5	金	上野・浅草ーにほんの音「藝大生による邦楽フレッシュコンサート」	(財)台東区芸術文化財団
82		6	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
83		6	土	石川県立音楽堂 シューベルト・フェスティバル	(財)石川県音楽文化振興事業団
84		6	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
85					
86		13	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
87		13	土	平成19年度 第2回安曇野市立穂高東・西中学校楽器演奏指導	安曇野市教育委員会
88		14	日		
89		14	日	オペラセミナー	(財)足利市みどり文化・スポーツ財団
90		18	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
91		19	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
92		20	土	オーケストラ・アンサンブル金沢 津幡公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
93		20	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
94		20	土	第2回みやこ町愛郷音楽祭(東京芸術大学演奏会)	福岡県京都郡みやこ町
95		20	土	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
96		21	日	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
97		21	日	上野・浅草ーにほんの音「邦楽爛漫」	(財)台東区芸術文化財団
98		26	金	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
99		26	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
100		27	土	第21回伊澤修二先生記念音楽祭	長野県伊那市
101		28	日	「芸大と遊ぼう in 北とびあ」	東京都北区
102		30	火	「光彩時空'07」における管楽アンサンブルライブ及び屋外コンサート	国立西洋美術館, 光彩時空'07実行委員会
103		31	水		
104	11月	1	木		
105		2	金		
106		3	土		
107		4	日		
108		3	土	平成19年度国立磐梯青年の家主催事業「部活動サポート磐梯ミュージックセミナー2007」	国立青年の家 国立磐梯青年の家
109		4	日		
110		4	日	シリーズ「歌」こころ響き合うとき Vol.10 熱狂の浅草オペラ	(財)新日鐵文化財団(紀尾井ホール)
111		5	月	【受託演奏】文化功労者顕彰式	文部科学省大臣官房人事課
112		8	木	【受託演奏】平成19年度秋の叙勲伝達式	文部科学省大臣官房人事課

東京芸術大学音楽学部 分析項目Ⅲ

113		11	日	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
114		14	水	秋の火災予防運動表彰記念 防火演奏会	東京消防庁 上野消防署
115		15	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
116		16	金	【受託演奏】平成19年度秋の褒章伝達式	文部科学省大臣官房人事課
117		17	土	東京オリンピック 2016	(株)メトロアドエージェンシー
118		19	月	第23回国際生物学賞授賞式	日本学術振興会
119		23	金	ファミリーコンサート「親子で歌いごう!日本のうた 100選」	(財)石川県音楽文化振興事業団ほか
120		24	土	音楽音響研究会(ミニコンサート)	日本音響学会音楽音響研究会
121		25	日	ファミリーコンサート「親子で歌いごう!日本のうた 100選」	(財)石川県音楽文化振興事業団ほか
122	12月	1	土	平成19年度取手市教育委員会主催ミニコンサート	取手市教育委員会
123		4	火	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
124		8	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
125		9	日	クリスマス&メサイア公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
126		12	水	第57回チャリティーコンサート「メサイア」	朝日新聞厚生文化事業団
127		15	土	第27回「台東第九公演」	台東区
128		16	日	LEXUSコンサート in 芸大'07	東京トヨペット
129		20	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
130		20	木	「大学地域開放事業」	台東区立御徒町台東中学校
131		21	金	御徒町台東中学校吹奏楽指導	校・台東区教育委員会
132		21	金	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
133		22	日	御徒町台東中と芸大による奏楽堂演奏会	台東区教育委員会
134		23	日	天皇陛下御誕生祝賀レセプションにおける国歌独唱	外務省
135		25	火	Atorionワンコイン vol.6 クリスマス・スペシャル	大星ビル管理(株)秋田アトリオン音楽事業部
136	1月	6	日	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
137		11	金	平成19年度学習院初等科邦楽鑑賞教室	学習院初等科
138		17	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
139		17	木	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
140		19	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
141		28	月	財団法人日本視聴覚教育協会創立80周年記念式典	財団法人日本視聴覚教育協会
142	2月	2	土	平成19年度 第3回安曇野市立穂高東・西中学校 楽器演奏指導・コンサート	安曇野市教育委員会
143		3	日	東京芸術大学演奏会(トランペットと打楽器によるコンサート)	坂東市文化振興事業団
144		3	日	東京芸術大学演奏会(トランペットと打楽器によるコンサート)	坂東市文化振興事業団
145		10	日	「だて噴火湾アートビレッジ構想」関連演奏会(仮)	北海道伊達市
146		14	木	芸術鑑賞会	茨城県つくば市立二の宮小学校
147		14	木	平成19年度碧南市芸術文化ホール自主事業「小・中学生音楽教室・一般向けコンサート」	碧南市・碧南市教育委員会
148		15	金	金管楽器のヒミツ	碧南市・碧南市教育委員会
149		16	土	金管楽器のヒミツ	碧南市・碧南市教育委員会
150		18	月	【受託演奏】文部科学大臣優秀教員表彰式における演奏	文部科学省
151		21	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
152		22	金	平成19年度邦楽鑑賞教室	恵泉女学園中学・高等学校
153		23	土	取手市夢のコンサート	取手市教育委員会

154		23	土	隅田公園梅まつり2008 箏・尺八演奏会	台東区役所 都市づくり部公園緑地課
155		24	日		
156		1	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
157		3	月	第4回日本学術振興会賞及び日本学士院学術奨励賞授賞式	日本学術振興会
158		6	木	平成19年度台東区立小・中学校音楽鑑賞教室(中学校)	台東区教育委員会
159		7	金	平成19年度台東区立小・中学校音楽鑑賞教室(小学校)	台東区教育委員会
160		7	金	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
161	3月	7	金	オペラ「カルメン」コンサート	(財)金沢芸術創造財団・(財)石川県音楽文化振興事業団
162		13	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
163		13	木	JTアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
164		14	金	合唱コンクールにおける模範演奏	足立区立第十中学校
165		22	土	藝大オペラ in 君津「椿姫」	房総オペラ愛好会
166		26	水	東京上野ロータリークラブ・第22回奏楽堂コンサート	東京上野ロータリークラブ
167		27	木	平成19年度音楽大学卒業生演奏会	当番校・桐朋学園大学
167(合計)					14(教員のみ) 153(学生参加)

資料 3-19 楽器体験講座履修者数

(平成19年度=開講初年度分)

楽器名称	履修者数
オーボエ	3
クラリネット	2
打楽器	10
フルート	3
ホルン	2

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本学部に限らず「音楽」分野の大学に入学するには、他分野の大学とは全く異なる受験勉強を行うのが通常であり、そのため幼少の頃から音楽の勉強や練習を行うことが多い。そのため、本学への志望が第1志望である割合が大きく、明確に本学部で「芸術を学びたい」という意欲をもっており、自発的に学習を積み重ねるという経験をしてきていると言える。また、在学生アンケート(平成19年6月実施。回収率16.5%)においても本学の魅力として「自分の好きな勉強ができる」とした者が90%程度いることから、本学部の学生の学習意欲はもともと高いと言える。さらに専門分野によっては、自宅で練習を行うことが難しいものもある。(器楽科オルガン専攻学生への練習場所の提供の例として、資料3-20:奏楽堂の使用状況参照)

こうした背景から、本学部ではレッスン室、練習室等の練習場所の確保や時間外使用についての要求が大変高く、学生からは「もっと多く」「もっと長く」という要望が大変多い。本学部では、資料3-15(P.3-18)のとおりレッスン室等を整備し時間外使用を認めているが、そうした高い要望の全てを十分に満足させることは難しい。

しかしながら本学の校舎面積(練習室等以外の講義室、その他も含む)は、都内の他の音楽系大学に比して2倍程度の面積を持っていること(朝日新聞社刊『大学ランキング2008』に掲載されている学生1人当たりの校舎面積から比較した結果)及び奏楽堂等の練習にも使用可能な優れた施設が整備されているため、期待される水準を上回るとした。

資料 3-20 奏楽堂の使用状況 (例:平成 19 年 11 月分)

※黄色は授業又は学生の自主練習に使用。ピンクは、定期演奏会や学内演奏会に使用。

日	曜日	9時	13時	17時	21時
1	木	オルガン練習		ハイドンシリーズ第1日 G・P	ハイドンシリーズ第1日
2	金	第19回 附属高校 定期演奏会			
3	土	備点検又は工事日		ハイドンシリーズ第2日 G・P	ハイドンシリーズ第2日
4	日	オルガン練習		オルガン練習	オルガン練習
5	月	ピアノ調律(18-1)		オルガン授業	オルガン練習
6	火	学内演奏会(作曲)G・P		学内演奏会(作曲)	オルガン練習
7	水	オルガン練習		オルガン授業	オルガン練習
8	木	学内演奏会(作曲)G・P		オルガン練習	オルガン調律
9	金	オルガン授業 ～12:30 まで	拾調律	学内演奏会(作曲)G・P	オルガン練習
10	土	整備点検			
11	日	整備点検			
12	月	モーニングコンサート・リハーサル		オルガン授業	オルガン練習
13	火	オルガン授業		オルガン練習	オルガン練習
14	水	モーニングコンサート・リハーサル(2回目) *		オルガン授業	ピアノ調律(18-1)(仮)
15	木	モーニングコンサート		オルガン練習	オルガン練習
16	金	学生オーケストラ授業		オルガンシリーズ リハーサル	オルガン練習
17	土	上野の森のオルガンシリーズ8 「ブクステフデ没後300年記念」			
18	日	整備点検			
19	月	オケ定期第326回 合唱付き練習		オケ定期第326回 合唱付き練習	オルガン練習
20	火	オルガン授業		自主点検/下手袖カメラ関係修繕 + 新P搬入(14:00-16:30)	オルガン練習
21	水	オケ定期第326回 合唱付き練習		オケ定期第326回 合唱付き練習	オルガン練習
22	木	【開始】8:20～ オルガン練習		オルガン練習	オルガン調律
23	金	藝大定期第326回 藝大フィルハーモニア・合唱定期(12:30～G・P 17:00～開演)			
24	土	シンポジウム 仕込み/リハーサル			
25	日	創立120周年記念事業 シンポジウム「芸術と教育」			
26	月	モーニングコンサート・リハーサル		修士リサیتال(オルガン)15:00～18:00	ピアノ調律(18-1)
27	火	学生オーケストラ授業		弦楽シリーズ「ドレスデン・シュターツカペレのメンバーと共に」	
28	水	モーニングコンサート・リハーサル		第73回 定期吹奏楽G・P	第73回 定期吹奏楽
29	木	拾調律	モーニングコンサート	サウンド・レコーディング演習	オルガン練習
30	金	オルガン調律		転換 第327回学生オケ定期G・P	第327回 学生オケ定期

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

講義科目については、シラバス又は第1回目の授業時に、授業のテーマ(目的)及び授業計画や内容、成績評価方法(試験実施するのか、レポート提出かなど)をあらかじめ学生に周知している(シラバスの記載例は資料3-7(P.3-9)参照)。

本学部では、実技科目について進捗段階があるため、学年に従って履修することになっている(分析項目Ⅱの資料3-6(P.3-8)参照)。実技系の各科・専攻では、演奏の進展度に応じて成績が評価される。原則として、実技科目の成績は、担当教員だけでなく、当該専攻の複数の教員の合議によって決定される。

また、本学部では、教育の効果として練習の成果を各種演奏会で発表しているほか、依頼公演に応ずることにより、社会に対し成果を直接発表している(資料3-13(P.3-14～3-15)、資料3-14(P.3-15～3-17)、資料3-18(P.3-19～3-23)参照)。このような発表を通じて、外部の専門家からの批評や一般の鑑賞者層からの声を聴くことは、音楽教育に貢献するのみならず学生が身に付けた学力や資質・能力の水準を確認することであり、かつ、学生が自らの能力の向上について考える場としての機能を果たしている。在学生アンケートによれば、コンクールや作品公募等に応募したことのある者は、1年生34.1%、2年生以上38.7%、学外で発表等を行ったことのある者は1年生61.4%、2年生以上71.8%となっており、学生が自主的に成果発表を行っていることが多いことが分かる(平成19年度のコンクール等での受賞例は別添資料3-①(P.3-33)参照)。

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

在学生或いは卒業生アンケートでの関連設問の回答結果は、下記の資料3-21に示す通りである。このアンケートによれば、受講している実技の指導に満足している学生は80%を超えており学生生活を含む全体の満足度も高くなっている。さらに講義科目についても70%程度の満足度であり、これは本学の特長の個別少数教育によるきめ細かい指導のためであろう。また、卒業生でも学生生活の充実度に対する評価は85%以上と高く、さらに在学中得た知識も現在の職業に役立っている割合も90%程度と高い。このように、本学に対する評価は在校生、卒業生ともども満足度の高いものとなっている。

資料3-21 在学生アンケート・卒業生アンケート関連設問抜粋(1)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	大学進学の際、本学はあなたの第一希望でしたか	第1希望	1年 100% 2～4年 96.8%
	(学部 2～4年生の方)あなたは、入学前に比べて自分の能力が向上したと思いますか	想像以上に向上した+向上した	70.9%
	(学部 2～4年生の方)あなたは、昨年度の『設定した学習到達目標』を達成できましたか	達成できた+ほぼ達成できた	65.6%
	受講している授業の内容や進め方についての満足度 専門教育科目(実技科目)についての満足度	満足である+どちらかといえば満足である	1年 86.4% 2～4年 80.6%
	受講している授業の内容や進め方についての満足度 専門教育科目(講義科目等)についての満足度	満足である+どちらかといえば満足である	1年 88.6% 2～4年 69.9%
	本学での教育・学習、学生生活などに関して、全体として「良い」、「楽しい」と感じるなど、満足していますか	満足である+どちらかといえば満足である	1年 83.3% 2～4年 78.7%
卒 業 生	あなたの大学時代の生活は、全体としてどの程度充実していましたか	非常に充実していた+どちらかといえば充実していた	86.4%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか 専門教育科目	とても役立っている+役立っている	90.8%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

観点ごとの状況で既述のとおり、演奏会等の実施状況(資料 3-13(P. 3-14～3-15), 資料 3-14(P. 3-15～3-17), 資料 3-18(P. 3-19～3-23) 参照), 受賞の状況(別添資料 3-①(P. 3-33) 参照), アンケートでの在学生・卒業生からの意見の聴取結果等(資料 3-21(P. 3-25))などからみて、学生からの高い期待に対して、全体として高い評価を得ていると考えられる。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

在学生アンケートによれば、学部卒業後の進路について、本学部2年生以上の47.0%が進学又は留学を考えており、就職を考えている者は31.3%、演奏活動あるいは起業を考えている者が21.7%であった。また1年生の場合、65.8%が進学又は留学を考えており、就職を考えている者は18.4%、演奏活動あるいは起業を考えている者が15.8%であった。(複数回答した者あり)

実際の進路状況は、31.9%が大学院等へ進学し、また、統計上未定・他となっている者には、海外留学準備中の者が多数含まれており、多くの学生が演奏家等としてさらに高い水準を目指して研鑽を重ねていることが分かる(資料3-22 参照)。

就職者の就職先は、本学部の教育内容を反映して、教員や交響楽団、音響関係の企業・職種となっている(資料3-23 参照)。

なお、卒業生アンケートによると(資料3-24-1, 3-24-2 参照)、企業等に勤めているものが5.1%、教員として勤めている者が45.6%、自由業(=演奏活動を続けている者)63.6%となっている(勤めながら演奏活動をしている者などがいるため合計は100%を超える)。また、卒業後もコンサートの実施やコンクール等への参加或いは生涯学習指導など、本学での専門を活かした活動を行っている特徴が見られる。

資料 3-22 音楽学部 平成 20 年 3 月 卒業者の進路状況

(H20.5.1 までに判明した分)

区 分	卒業 者	就 職		非常勤 自 営	進 学				未定・ 他
		教 職	企 業 等		大学院 (本学)	別科 (本学)	他大学 等 (国内)	海外 留 学	
作曲科	17			3	6				8
声楽科	56		1	3	11		4		37
器楽科	101		1	11	28		5	3	53
指揮科	2				1				1
邦楽科	26			14	4		2		6
楽理科	25	1	8	1	8	1			6
音楽環境創造科	19		2	5	4				8
計	246	1	12	37	62	1	11	3	119

資料 3-23 卒業生の主な就職先企業名

昭和女子大学昭和中学校・高等学校(教員), ライジング・プロ(音楽家), 大阪センチュリー交響楽団(コンサートマスター), 日本フィルハーモニー交響楽団(チェロ tutti), 埼玉県芸術文化振興財団, 南山中学・高等学校(教員), 愛知県公立学校(教員), ブライダル・ベル(挙式企画), シェル石油(総合職), ク・ナウカ・シアターカンパニー(演出助手), NHK(音響制作), T I S(システム) W I L L C O M(総合職), D2C(総合職), 松竹(総合職), パソナ(総合職), 横浜双葉中学高等学校(教員), 劇団四季(俳優), 日立システムアンドサービス(SE), 富士通コミュニケーションサービス(総合職), アスク プランニングセンター(空間演出), NHK(制作), アミューズ(芸能芸術・総合職), 西武百貨店(販売), 宮地楽器(販売運営), 東京大学(図書館), 神奈川中央新聞社(記者・編集), ソニーミュージックエンターテイメント(制作), サンリオピューロランド(運営)

資料 3-24-1 卒業生アンケート:現在の職業

(複数回答可 単位%)

会社員、 会社役員、 団体職員	教員(大学、 高等専門学校)	教員(大学、 高等専門学校以外)	公務員 (教員を除く)	自営業主又は その手伝い	自由業(芸術家、作 家、演奏家など)	パートタイマー ・フリーター	学生	主婦(夫)	その他	無回答
5.1	39.1	6.5	1.0	11.6	63.6	3.1	3.4	20.4	4.8	1.0

資料 3-24-2 卒業生アンケート:本学卒業・修了後の創作活動状況

(複数回答可 単位%)

公的なコンクールや コンペティション等に 参加したことがある	公的なコンクールや コンペティション等で 受賞したことがある	個展やコンサートな どの活動をしている	新聞、雑誌などの メディアに紹介され たり、執筆したこと がある	専門性を生かし て、ボランティア活 動、地域活性化活 動、生涯学習指導 などを行っている	その他	該当なし	無回答
41.1	28.6	46.5	47.7	25.7	7.1	13.3	4.6

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

在学生又は卒業生アンケートにおける回答結果からみて、保護者或いは本学卒業生の勤務先等からは、在学生或いは卒業生の行う創作活動に対しては社会からの関心も高く、所属している企業・団体での卒業生に対する肯定的評価が85%を超え、十分な評価を得ていると考えられる(資料 3-25 参照)。また、これは、卒業後も音楽活動を継続している卒業生が60%以上であることや本学の在学生・卒業生コンクール等での受賞履歴(別添資料 3-①(P. 3-33)参照)が高く評価されていることと無縁ではない。

資料 3-25 在学生アンケート・卒業生アンケート関連設問(2)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	あなたの保護者は、あなたの入学後の本学に満足していると思いますか	満足していると思う+どちらかといえば満足していると思う	1年 93.3% 2~4年 92.5%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか(専門教育科目)	とても役立っている+役立っている	90.8%
卒 業 生	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか(学内外での展示、発表、演奏活動)	とても役立っている+役立っている	80.3%
	あなたが在学中に受けた授業の内容や進め方、教員の研究指導の進め方について全体として満足していますか	満足している+どちらかといえば満足している	75.8%
	(企業、団体等に所属している方)職種や仕事は、大学時代の専攻等とどのようなかわりを持っていますか	非常に関係のある仕事である+どちらかといえば関係のある仕事である	77.9%
	(企業、団体等に所属している方)所属先での、東京芸術大学又は卒業生・修了生への評価をどのように感じていますか	非常に高い評価を受けていると感じる+どちらかといえば高い評価を受けていると感じる	87.6%
	自分の子ども、後輩・教え子等、芸術を学ぼうとしている人に東京芸術大学への進学を薦めたいと思いますか	思う	78.9%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

本学部の卒業生の 30%以上が、演奏家等としてさらに高い水準を目指して本学大学院へ進学していることは、本学部の教育指導に対する学生の肯定を示していると考えられる(資料 3-22(P. 3-27) 参照)。

また、受賞の状況(別添資料 3-① (P. 3-33) 参照)、アンケート結果や新聞記事(別添資料 3-② (P. 3-34～3-39))等に現れている社会の本学部在学生・卒業生への関心の高さ等から見て、在学生、卒業生、就職先、社会一般など各関係者からの期待に十分応えていると考えられる。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例 1 「チェンバーオーケストラの海外公演」(分析項目Ⅲ)

チェンバーオーケストラは、音楽学部生と大学院生が構成員となっている。創立時よりゲルハルト・ボッセ氏の指導を受け、めざましい発展を遂げていたが、平成 18 年(2006 年)9 月から 10 月にかけて、クラシック音楽の発祥の地である欧州公演を行った。ドイツを始めとする演奏地では、絶大なる拍手で迎えられ、本学学生の演奏技術のレベルの高さを証明することとなった。ドイツ、オーストラリア両在日大使館も後援し、多くの企業・個人・民間団体からの支援も受けるなど評価も高かった(資料 3-28 参照)。

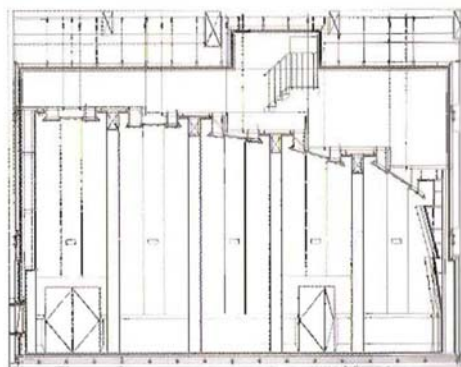
資料 3-28 チェンバーオーケストラの海外公演日程

訪問日	演奏場所
2006 年 10 月 5 日	ライプツィヒ音楽大学コンサートホール
10 月 8 日	シュトゥットガルト芸術大学ホール
10 月 9 日	ミュンヘン音楽大学コンサートホール
10 月 12 日	ムジークフェライン ガラスホール(ウィーン)

②事例 2 「音楽関係大学では嚆矢となる音響技術面からの教育」(分析項目Ⅱ)

音楽環境創造学科においては、特に千住キャンパスでの音響設備の整ったスタジオを整備し、学生や利用者等の演奏者が演奏しやすい音環境を創り出すなど、実験的な先端音楽作品の制作に役立っている。これは、従来の音楽系大学には見られない設備であって、音楽教育の質的な充実となっている(資料 3-29 参照)。

資料 3-29 音楽環境創造学科のスタジオの例(スタジオ A)



③事例 3 「特別招聘教授制度の創設」(分析項目Ⅲ)

国内外の特に顕著な業績や極めて高度な学識・技能を有する音楽家・研究者による短期的・集中的な指導により学習内容の向上を図るため、特別招聘教授制度により、教育研究指導等を行っている(資料 3-12(P. 3-14)参照)。

④事例 4 「モーニング・コンサートによるクラシック音楽普及」(分析項目Ⅳ)

あわただしい朝のひとときをゆったりとした気分で過ごしてもらい、地域の芸術鑑賞機会の充実を図り教育レベルの向上を図るため、学生ソリストと教員の指揮者・オーケストラが協働して、昭和 47 年(1972 年)から行っているが、その入場者数が増加傾向にあり一部入場制限を行っているほどである。鑑賞者層の増加は、演奏者にとっても演奏の質的な充実・向上に繋がるものであり、学生の教育面での貢献も大きい(資料 3-30 参照)。

資料 3-30 モーニング・コンサート記録

	19 年度	18 年度	17 年度	16 年度	15 年度
第 1 回	550	701	553	435	246
第 2 回	403	685	604	574	353
第 3 回	808	601	708	559	300
第 4 回	628	741	501	475	392
第 5 回	849	515	573	493	411
第 6 回	568	754	604	476	516
第 7 回	699	666	513	668	440
第 8 回	788	539	787	542	480
第 9 回	559	390	604	545	552
第 10 回	705	428	1,110	717	355
第 11 回	863	800	867	885	527
第 12 回	744	630	975	854	679
第 13 回	922	583			
追加 (日程変更)			300		
合 計	9,086	8,033	8,699	7,223	5,251

平均入場者数	698.9	617.9	669.2	601.9	437.6
平成 15 年比	160%	141%	153%	138%	

4.音楽研究科

I	音楽研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・	4 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・	4 - 3
	分析項目 I 教育の実施体制	・ ・ ・ ・	4 - 3
	分析項目 II 教育内容	・ ・ ・ ・ ・	4 - 8
	分析項目 III 教育方法	・ ・ ・ ・ ・	4 - 1 1
	分析項目 IV 学業の成果	・ ・ ・ ・ ・	4 - 2 2
	分析項目 V 進路・就職の状況	・ ・ ・	4 - 2 3
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	4 - 2 6

I 音楽研究科の教育目的と特徴

- 1 大学院音楽研究科は、高度に専門的かつ広範な視野に立ち、音楽についての深遠な学識と技術を授けること、音楽に関わる各分野における創造、表現、研究又は音楽に関する職業等に必要な優れた能力を養うこと、さらには自立して創作、研究活動を行うに必要な高い能力を備えた教育研究者の養成を目的としている。優れた表現者（演奏家、作曲家、指揮者）のみならず、大学・企業・公共機関等における、芸術分野に関する指導者たり得る人材の育成が本研究科の目標であり、同時に特徴ともなっている。
- 2 本研究科は、音楽学部にとりましてより高度かつ専門的に芸術の創造・表現とその理論を総合的に研究・教授することを理念とし、創造・表現に重点を置いた修士課程が昭和 38 年にまず設けられ、理論的研究により重点を置いた博士後期課程が昭和 52 年に設置された。

音楽学部における作曲・声楽・器楽・指揮・邦楽・楽理各科を基盤に、作曲・声楽・器楽・指揮・邦楽・音楽学の 6 専攻からスタートし、昭和 44 年には音楽教育、同 51 年にはソルフェージュ（ともに音楽学専攻）、平成 11 年には古楽（器楽専攻）・応用音楽学（音楽学専攻）、平成 15 年には音楽文芸（音楽学専攻）が新たな研究領域として設けられた。さらに、平成 18 年には音楽音響創造・芸術環境創造の 2 領域が加わったことにより、上記音楽学専攻の諸領域と併せて音楽文化学専攻が開設され、実技面においても理論的研究面においても、学生や社会の、より広範な需要に応えるための組織改革をおこなっている。
- 3 社会のニーズに応じた人材育成は、音楽学部のみならず本研究科においても目標とするところである。学部と比較して、芸術家として身体的にも精神的にも完成度・成熟度の増す大学院においては、より深い理解と解釈に基づいた質の高い演奏表現・技術をもった演奏家の養成、ならびに幅広い見識や関心に支えられた、より深化した専門研究を展開できる研究者の養成が音楽界や教育界、音楽愛好家らから期待されている。そうした社会的な期待や要請に応えるために、例えば、アンサンブル教育の充実や博士特別研究の推進など、大学院教育の質的向上をはかる取組を積極的に構想、展開している。
- 4 音楽分野における高等教育・研究機関への優秀な人材輩出は、そうした諸機関から大きく期待される所であり、他の音楽大学大学院に比べて著しい特徴となっている。実技系諸専攻・音楽文化学専攻を問わず、芸術系・教育系大学の教員としてあるいは研究機関での研究員として、本研究科における教育・研究の成果を背景としながら、音楽文化の普及や研究活動、次世代の芸術家・芸術研究者養成に携わり、日本の音楽教育・音楽文化の基盤形成に貢献することが期待されている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

音楽研究科の教育研究組織は、修士課程は作曲、声楽、器楽（ピアノ・オルガン・古楽・弦楽・管楽・打楽・室内楽）、指揮、邦楽、音楽文化学（音楽学・音楽教育・ソルフェージュ・応用音楽学・音楽文芸・音楽音響創造・芸術環境創造）の6専攻18研究領域で構成されている。博士後期課程は、全体を音楽専攻とし、作曲、声楽、鍵盤楽器、弦・管・打楽器、古楽、指揮、邦楽、音楽学（平成20年度からは音楽文化学）の8研究領域で構成されている（資料4-1参照）。

音楽学部と比較して、特に修士課程において室内楽を研究領域として設けることにより、アンサンブル教育を充実させていること、音楽文化学専攻内に大学院のみの研究領域（音楽教育・ソルフェージュ・応用音楽学・音楽文芸）を設けることにより、音楽に関わる研究領域の拡大と、社会的要請の大きな分野における人材育成を可能にしていること、が特徴となっている。

教員数等については資料4-2、4-3、4-4のとおりである。学部同様学外兼務教員を多数起用しているが、これは学部における個人レッスンの充実・維持という目的とは異なり、発表のための助演者や伴奏助手を設定し、より高度な表現を身につけるためのサポート体制を目的として利用されている。また、学生定数の適正化を徹底することで常勤教員1名あたりの学生数を抑制し、学生一人当たりの指導時間を十分に確保することによって、高度な専門教育の質的確保に努めるとともに、特に博士課程における指導教員の指導の充実を保証している。また、教育研究助手制度の導入により、円滑な研究室運営と、大学院学生の教育・研究環境の整備をおこなっている。

資料4-1 学部と研究科の関係 ※（ ）は研究科の平成19年度の入学定員

音楽学部	音楽研究科	
	(修士課程)	(博士後期課程)
作曲科	作曲専攻(9)	音楽専攻(15)
声楽科	声楽専攻(20)	
器楽科	器楽専攻(43)	
指揮科	指揮専攻(3)	
邦楽科	邦楽専攻(9)	
楽理科	音楽文化学専攻	
音楽環境創造科	(35)	

資料4-2 音楽研究科の教育研究組織 ※教員数は資料4-3を参照

学科	専任教員の専門分野
作曲専攻	作曲、作曲理論
声楽専攻	声楽(ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、テノール、バリトン)
器楽専攻	鍵盤楽器(ピアノ、オルガン)、弦管打楽器(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、クラリネット、オーボエ、トランペット、ホルン、チューバ、打楽器)、古楽(古楽器、バロック声楽)
指揮専攻	指揮
邦楽専攻	長唄三味線、箏曲、能楽、邦楽囃子、長唄、日本舞踊
音楽文化学専攻	音楽美学、西洋音楽史、日本・東洋音楽史、音楽教育、ソルフェージュ、応用音楽学、音楽文芸、音楽音響創造、芸術環境創造

資料 4-3 音楽研究科教員数 (平成 19 年 5 月 1 日現在)

学科名	専任教員数						学内兼務教員	学外兼務教員			教育研究助手
	性別	教授	准教授	講師	助教	合計		教員からの兼務	教員以外からの兼務	合計	
作曲専攻	男	4	1	0	0	5	7	19	145	164	70
	女	0	0	0	0	0					
声乐専攻	男	2	3	0	1	6					
	女	4	1	0	0	5					
器楽専攻	男	14	9	0	0	23					
	女	2	5	0	0	7					
指揮専攻	男	1	0	0	0	1					
	女	0	0	0	0	0					
邦楽専攻	男	3	2	0	0	5					
	女	1	2	0	0	3					
音楽文化学専攻	男	10	8	1	0	19					
	女	1	3	0	1	5					
合計	男	34	23	1	1	59					
	女	8	11	0	1	20					

資料 4-4 音楽学部・大学院音楽研究科教員一覧
(「大学案内 2008」より：平成 19 年 10 月現在)

■作曲			■指揮		
	野田 暉行	教授		小林 研一郎	教授
	尾高 惇忠	教授		尾高 忠明	客員教授
	浦田 健次郎	教授	■邦楽		
	川井 學	教授	長唄三味線	藤原 睦子	教授
	小鍛冶 邦隆	准教授	長唄	浅見 文子	准教授
■声乐			箏曲(生田流)	安藤 政輝	教授
	伊原 直子	教授	箏曲(山田流)	萩岡 松韻	教授
	川上 茂	准教授	能楽(観世流)	関根 知孝	准教授
	朝倉 蒼生	教授	能楽(宝生流)	武田 孝史	教授
	佐々木 典子	准教授	邦楽囃子	三浦 正義	教授
	福島 明也	准教授	日本舞踊	大橋 萬壽子	准教授
	多田羅 迪夫	教授	■音楽文化学		
	寺谷 千枝子	教授	音楽学	船山 隆	教授
	永井 和子	教授		土田 英三郎	教授
	直野 資	教授		片山 千佳子	教授
	吉田 浩之	准教授		大角 欣矢	准教授
	林 康子	招聘教授		塚原 康子	准教授
	市原 太郎	客員教授	音楽教育	植村 幸生	准教授
	直井 研二	助教		佐野 靖	教授
■器楽			ソルフェージュ	山下 薫子	准教授
ピアノ	植田 克己	教授		テシュネ,ローラン	准教授
	青柳 晋	准教授		林 達也	准教授
	角野 裕	教授	応用音楽学	根木 昭	教授
	伊藤 恵	准教授		枝川 明敬	教授
	北川 曉子	教授		畑 瞬一郎	教授
				松原 千代繁	客員教授

オルガン ヴァイオリン	東 誠三	准教授	音楽文芸	成田 英明	教授
	渡邊 健二	教授		中嶋 敬彦	教授
	迫 昭嘉	教授		檜山 哲彦	教授
	粕谷 美智子	教授		杉本 和寛	准教授
	有森 博	准教授		音楽環境創造	西岡 龍彦 教授
	タッキーノ, カプリエル	外国人教師		熊倉 純子	准教授
	廣江 理枝	准教授		亀川 徹	准教授
	清水 高師	教授		市村 作知雄	准教授
	浦川 宜也	教授		毛利 嘉孝	准教授
	澤 和樹	教授		丸井 淳史	講師
ヴィオラ チェロ	漆原 朝子	准教授	音楽研究センター	関根 和江	助教
	玉井 菜採	准教授		言語・音声トレーニングセンター	
	フーレ, ジェラルド	招聘教授		独語	シュタイン, ミハエル 外国人教師
	川崎 和憲	准教授		仏語	コラ, アラン 外国人教師
	河野 文昭	教授		伊語	キッツォーニ, ルチアーナ 外国人教師
	山崎 伸子	准教授		英語	磯部 美和 助教
	永島 義男	教授			大津 陽子 助手
	山本 正治	准教授	演奏芸術センター	松下 功	教授
	フルート	金 昌国 教授		大石 泰	准教授
	オーボエ	小畑 善昭 教授		海藤 春樹	客員教授
	サクソフォン	富岡 和男 客員教授		西川 信廣	客員教授
	ファゴット	岡崎 耕治 客員教授		瀧井 敬子	客員教授
	ホルン	守山 光三 教授		岩崎 真	助教
	トランペット	杉木 峯夫 教授			
	トロンボーン	秋山 鴻一 招聘教授			
	打楽器	藤本 隆文 准教授			
	室内楽	岡山 潔 教授			
古楽	稲川 榮一	教授			
	松原 勝也	准教授			
	鈴木 雅明	教授			
	野々下 由香里	准教授			

観点 教育内容，教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本研究科の運営に係る体制は基本的には学部と同一組織であるが，博士後期課程については，学位委員会（平成 14 年設置）が教育内容，教育方法の改善に関する役割を担っている。

本研究科では，特に博士学位授与促進を目的とし，博士後期課程改革の第一段階として，複数指導教員体制の充実と指導教員会議の設置（平成 16 年），教員・学生双方への進捗状況報告書提出の義務化（同年）を徹底している。これらは学位委員会の監督・指導のもとにおこなわれており，これによって，指導体制のチェック・指導状況の客観的把握が可能になるとともに，学生と教員の双方向的な研究体制の構築を可能にしている。また，平成 20 年度からは，特別教育研究経費による芸術リサーチセンターの設置で，学位委員会とも連携しながら，博士後期課程学生へのより充実したサポート体制を組織することが予定されている。

また実技系専攻の修士課程においては，学位取得の方法を弾力化することによって，フレキシブルな研究計画の下に，演奏と研究への比重を学生個々の特性に応じて選択するこ

とが可能な体制となっている（資料 4-5 参照）。

資料 4-5 履修便覧抜粋

II. 東京芸術大学大学院音楽研究科（修士課程）学位論文等並びに最終試験に関する内規

第1条 修士論文又は修士作品もしくは修士演奏（以下「論文等」という。）の審査を受けようとする者は、大学の定めた期間内（10月中旬）に論文等の題目又は作品もしくは演奏曲目を音楽研究科長に届け出なければならない。

第2条 論文等の区分は次のとおりとする。

(1) 作曲専攻……………修士作品

(2) 声楽専攻
器楽 〃
指揮 〃
邦楽 〃

……………修士演奏

(3) 音楽文化学専攻……………修士論文

2 前記第(2)号により修士演奏を行う者は、その演奏に関する論文を加えることができる。

3 音楽教育研究分野・ソルフェージュ研究分野専攻の修士論文には、必修選択科目として選んだ分野の作品又は演奏を併せて考慮する。

4 音楽音響創造研究分野・芸術環境創造研究分野専攻の修士論文には、作品を加えることができる。

5 第1項の論文等（修士演奏を除く）は、大学が定めた期間に音楽研究科長に提出しなければならない。論文等を期間経過後に提出した場合は、その年度内に審査を行わない。

第3条 最終試験は論文等を中心として、口述試験により行う。

第4条 論文等の審査日程及び最終試験の日程については、音楽研究科委員会により決定する。

第5条 論文等に関する審査については東京芸術大学学位規則による。

大学院修士課程 演奏専攻の学位審査について

専攻	演奏のみ	演奏＋参考資料	演奏＋修士論文	修士論文のみ
声 楽	○	○	○	○
ピ ア ノ			○	
オルガン			○	
弦	○		○	○
管 打			○	
室 内 楽	○		○	
古 楽			○	
指 揮			○	
邦 楽			○	

注意事項

①平成14年度入学生より適用する。

②対象学生は、修了年次4月の「研究計画書」提出までに決定する。

③指導教員の承認印を必要とする。

X. 「東京芸術大学大学院音楽研究科学学位委員会」設置に関する申し合わせ

平成14年11月14日 教務委員会申合せ

平成14年12月12日 研究科委員会決定

音楽学部教務委員会は東京芸術大学大学院音楽研究科学学位委員会設置に関して、次の要項を制定することを申し合わせをする。

(設 置)

第1 東京芸術大学大学院音楽研究科（以下「研究科」という。）に、博士後期課程における教育・研究を充実させ、課程博士学位授与の促進を図るため、大学院音楽研究科学学位委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任 務)

第2 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 博士後期課程の理念と制度に関わること。
- (2) 博士後期課程在籍者の研究進捗状況の把握、指導教員会議の運営に関わること。
- (3) その他学位の授与に関し、必要と認められる事項。

(組 織)

第3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織し、第2号の委員は教務委員をもって充てる。

- (1) 教務委員長
- (2) 各科から選出された者 1名

(任 期)

第4 第3に掲げる委員の任期は1年とし、再任は妨げない。

ただし、委員に欠員が生じた場合の補充の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5 委員会に委員長を置き、教務委員長をもって充てる。

2 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長の指名した者がその職務を代行する。

(庶 務)

第6 委員会の庶務は音楽学部教務係において処理する。

(雑 則)

第7 その規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

平成16年4月8日一部改正

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

教員一人当たりの大学院生数は少数であり、レッスンのみならず論文を含めた研究全般において質の高い指導を可能にしている。また、研究科内に大学院教育専門の委員会を設置し、指導体制の充実とそのチェック体制の整備を行い、学位取得にふさわしい学生を養成するための教育方法改善に常時努めている。学位委員会の個々の指導教員会議に対する指導や、修士課程の学生における学位審査方法の選択制の導入は、そうした改善によって生み出された対応策であり、その結果として、博士後期課程における学位授与率の向上や、修士課程における学生の研究課題への集中度のアップなど、予想を大きく上回る成果を挙げている。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

【修士課程】履修区分により、履修が原則として当該専攻（研究領域）の学生に限定される必修科目と、研究内容の充実のために幅広く履修可能な選択科目に大別される（資料 4-6 例 1 参照）。

実技系の専攻において、必修科目は演奏の実習や楽曲分析を中心としたものからなり、研究分野によってはリサイタルを必修単位として位置づけるなど、演奏面におけるより高度な専門性を追求する編成となっている。それと同時に、選択科目によって他専攻の授業科目の履修を可能とし、また、原典特殊講義・音楽リサーチ法・芸術情報関連科目等を設定することによって修士論文執筆のサポート体制を充実させるなど、専門性の特化と理論的研究の遂行を、同時に可能にするための課程編成をおこなっている。

音楽文化学専攻においては、演習及び実習（論文指導）等が必修科目として設定され、論文執筆を中心とした科目編成となっている。さらには選択科目に、他専攻の授業科目や原典特殊講義を設定し、論文作成のためのより広範かつ高度な知識の獲得が可能な編成となっている。

【博士後期課程】教育課程は全研究領域共通のものとなっている（資料 4-6 例 2 参照）。平成 16 年に教育課程の変更をおこない、課程編成をシンプルなものにすることにより、博士後期課程における教育・研究の狙いをわかりやすいものとしている。学生の成果発表（リサイタル・雑誌論文・学会発表等）に対して「博士特別研究」として単位を付与するとともに、指導教員の研究指導を「博士専門科目」として単位化することで、博士後期課程における研究計画が、教員の指導を基盤としながらの外部に向けた成果の公開により達成され、その最終地点に博士論文を位置づけた編成である。

資料 4-6 音楽研究科 教育課程(カリキュラム)修得単位年次表

例 1: 修士課程器楽専攻(弦楽研究分野)

区 分	授 業 科 目	1 年 次		2 年 次		修 得 単 位 数		
						小 計	中 計	合 計
必 修 科 目	器 楽 実 習	3		3		6	18	34
	楽 曲 分 析 演 習	4		4		8		
	修 士 リ サ イ タ ル	4				4		
	器 楽 特 殊 研 究	2	2	2	2	8	8	
選 択 科 目	室 内 楽 実 習	4		4		8	8	
	オーケストラ実習	2	2	2	2	8		
	室内オーケストラ実習	2	2	2	2	8		
	他専攻の授業科目	4				4		
	学部開設授業科目	4				4		
	原典特殊講義	4				4		
	音楽研究基礎	4				4		
	音楽リサーチ法	2～4				2～4		

例 2: 博士後期課程

区分	授業科目	1 年 次	2 年 次	3 年 次	修得単位数		
					小 計	中 計	合 計
必修科目	研究領域特別研究指導	－			－		10
	博士特別研究※1	2	2		4	8	
	博士専門科目※2	2	2		4		

選択科目	大学院開設科目	2		2	2	
------	---------	---	--	---	---	--

※1 演奏専攻は、博士リサイタルをもって充てる。その他の専攻は、研究発表をもって充てる。(作品の演奏、学会誌への論文掲載を充てることも可)

※2 原則として主任指導教員が開設するもの

資料 4-7 音楽研究科シラバス記載例

例 1 器楽専攻科目

科目番号：科目名	4L183・4L195 器楽特殊研究(2)	各2単位	前期・後期
担当教員	浦川 宜也	曜日：時限	木曜 V限
授業のテーマ	古典派から現代までのヴァイオリンとピアノのための作品の演奏解釈		
授業計画及び内容	J. S. Bachから近代までのヴァイオリン（ヴィオラ）とピアノのための作品について考察し、演奏解釈の実習を行う。 大学院学生（ヴァイオリン及びヴィオラ）とピアノ及び室内楽の大学院学生、ピアノ伴奏助手及び教員が演奏し、器乐的、合奏的見地から技術上の諸問題を検証し、理想的な演奏解釈を探究する。 授業方法 ゼミナール形式 またテキストとして「斉藤秀雄講義録」を批判的に読み、その内容について検証する。 平成19年前期は、ロマン派の作品を中心に、後期は近現代又はJ. S. Bachの作品を研究する。		
教材・参考書	「斉藤秀雄講義録」		
成績評価の方法	演奏のレベル、ディスカッションの際の発言の積極性及び出席の頻度		
履修上の指示事項	器楽専攻(ピアノ研究分野、弦楽研究分野(ヴァイオリン、ヴィオラ)及び室内楽研究分野)の大学院生を対象		
備考（オフィスアワー）			

例 2 音楽文化学専攻科目

科目番号：科目名	4U311 応用音楽学特殊研究(2)(文化政策論)	4単位	通年
担当教員	根木 昭	曜日：時限	金曜 IV限
授業のテーマ	文化政策に関わる主要な論点の検討と「文化政策学」体系化（＝枠組みの構築）について討議する。		
授業計画及び内容	「文化政策学」は、「文化経済学」、「文化経営学（アートマネジメント論）」を隣接分野としながら、①文化政策総論、②文化政策形成論、③文化政策史、④芸術文化振興論、⑤文化財保護論、⑥文化施設管理論、⑦地域文化振興論、⑧国際文化交流論、⑨比較文化政策論、を主要な柱として全体系が形づくられる。 ここでは、このうち①、②、④、⑤、⑥、⑦の6つの柱を中心に順次考察していく。各柱は、さらに小項目に分け、それぞれについて、講義のほか、報告―討議―総括を繰り返すことによって認識を深める。 そして、最終的に、各自が「文化政策学」の体系モデルを組み立て、新たな学問分野として提示していくための討議を行う。 なお、適宜、文化・芸術団体（文化庁、日本芸能実演家団体協議会、全国公立文化施設協会、国立劇場、新国立劇場）のヒアリングを行う。		
教材・参考書	教材：必要に応じて資料を配布する。 参考書：根木昭『文化政策の法的基盤』（水曜社）、同『日本の文化政策』（勁草書房）、同『文化政策の展開』（放送大学教育振興会）、川村恒明・根木昭・和田勝彦編著『文化財政策概論』（東海大学出版会）		
成績評価の方法	出席、レポート（2回）		
履修上の指示事項	特になし		
備考（オフィスアワー）	月曜日10:25～11:50		

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本研究科を修了した学生の多くは、作曲家や演奏家など音楽家としての活動をおこなうことはもとより、大学等の高等教育機関における教育者・指導者の立場に立つことも求められている。そのような際には、専門領域に関する高度な技能・知識のみならず、音楽芸術諸領域や音楽教育に関する知識も専門的なレベルにおいて要求されることが多く、また学生もそうした能力の獲得を必要としている。

他専攻の開設授業を履修可能とした課程編成はそうした要請への対応の1つである。また、音楽文化学内には、音楽学部における楽理科・音楽環境創造科の延長線上にある音楽学や音楽音響創造・芸術環境創造に加えて、大学院のみの研究領域として音楽教育・ソルフェージュ・応用音楽学・音楽文芸の諸領域が設けられ、教育者・指導者に必要な音楽文化および教育に関する広範な領域についての学習が可能となっている。

さらにはお茶の水女子大学や東京外国語大学との単位互換制度により、音楽文化にとどまらないさまざまな分野の最新の研究に触れられる機会を確保し、学生の知識・視野の拡大を図っている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

大学院としての教育・研究目的を明確にするための改善を続け、課程編成の整備や、新たな研究領域の開設、さらには単位互換制度により、本研究科が期待されている教育内容・指導内容を十分満たしている。また、学生のより幅広い音楽文化に関する知識・教養・技能習得の機会を確保・提供しており、社会が本学部修了生に対して求めている以上の、質の高い、指導的立場にふさわしい人材育成を行なうに相応しい課程編成である。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

音楽学部同様あるいはそれ以上に、本研究科も個人レッスンや少人数によるグループ指導（演習・実習等）を中心とした授業形態をとっている。その一方で、1) 複数の教員による授業の開設（「声楽特殊研究」・「音楽文化研究」等）を通じた重層的な学習指導の試み、2) アンサンブル教育の重視（「重唱特別演習」・「室内楽実習」・「邦楽アンサンブル」等）、3) 「博士コロキウム」（音楽学）・「音楽文芸総合演習」（音楽文芸）など討論形式の授業の導入、など多角的な授業形態を取り入れ、学生の研究内容の深化を目指している。

また実技系専攻においては、博士後期課程における「博士リサイタル」や、修士課程における「修士リサイタル」など、学生の成果を公開する場の提供と単位化をおこない、音楽研究科という特徴を生かした教育方法が実践されている。さらには、定期演奏会等の学内演奏会への参加も、指導との組み合わせにおいて効果的に利用されている（資料 4-8, 4-9）。

また、本研究科においても特別講座等の課程外の授業が積極的に利用されており、各界第一人者の外部講師による講演・指導が、学習・研究に大きな刺激と効果を与えている（資料 4-10(P. 4-14～4-16)）。

資料 4-8 平成19年度 音楽研究科 公開試験等演奏会 一覧(無料演奏会)

No.	演奏会名	会場	開催日
1	博士リサイタル	第6ホール	H19.4.17
2	博士リサイタル	第6ホール	H19.4.24
3	博士リサイタル	第1ホール	H19.4.27
4	博士リサイタル	第6ホール	H19.5.8
5	課程博士学位審査会演奏審査会	第6ホール	H19.7.10
6	課程博士学位審査会演奏審査会	第6ホール	H19.7.12
7	博士リサイタル	東京文化会館	H19.9.8
8	博士リサイタル	東京文化会館	H19.9.9
9	博士リサイタル	第6ホール	H19.9.12
10	課程博士学位審査会演奏審査会	第6ホール	H19.10.16
11	博士リサイタル	第6ホール	H19.11.8
12	博士リサイタル	第1ホール	H19.11.16
13	課程博士学位審査会演奏審査会	第6ホール	H19.11.20
14	修士リサイタル(オルガン)	奏楽堂	H19.11.26
15	課程博士学位審査会演奏審査会	奏楽堂	H19.11.27
16	課程博士学位審査会演奏審査会	奏楽堂	H19.12.4
17	博士リサイタル	第2ホール	H19.12.14
18	課程博士学位審査会演奏審査会	第4ホール	H19.12.18
19	卒業試験公開演奏会(古楽)	奏楽堂	H20.1.7
20	博士リサイタル	第6ホール	H20.1.16
21	課程博士学位審査会演奏審査会	第1ホール	H20.1.22
22	課程博士学位審査会演奏審査会	第4ホール	H20.1.23
23	修士課程学位審査会演奏会(指揮)	第6ホール	H20.1.24
24	修士課程学位審査会演奏会(室内楽)	第6ホール	H20.1.24
25	修士課程学位審査会演奏会(独唱 1・3 講座)	奏楽堂	H20.1.24
26	修士課程学位審査会演奏会(独唱 2・4 講座)	奏楽堂	H20.1.25
27	修士課程学位審査会演奏会(ソルフェージュ:ピアノ)	第6ホール	H20.1.25
28	修士課程学位審査会演奏会(弦楽)	第6ホール	H20.1.28

29	修士課程学位審査会演奏会(オルガン)	奏楽堂	H20.1.28
30	修士課程学位審査会演奏会(古楽)	奏楽堂	H20.1.28
31	修士課程学位審査会演奏会(ピアノ)	第1ホール	H20.1.29
32	修士課程学位審査会演奏会(ピアノ)	第1ホール	H20.1.30
33	修士課程学位審査会演奏会(邦楽)	第6ホール	H20.1.31
34	修士課程学位審査会演奏会(邦楽:能楽)	第4ホール	H20.1.31
35	修士課程学位審査会演奏会(オペラ)	奏楽堂	H20.1.31
36	修士課程学位審査会演奏会(オペラ)	奏楽堂	H20.2.1
37	修士課程学位審査会演奏会(管打楽)	第6ホール	H20.2.1
38	修士課程学位審査会演奏会(古楽)	奏楽堂	H20.2.4
39	博士リサイタル	第4ホール	H20.2.6
40	博士リサイタル	第6ホール	H20.2.7
41	博士リサイタル	奏楽堂	H20.2.14
42	課程博士学位審査会演奏審査会	第1ホール	H20.2.18
43	課程博士学位審査会演奏審査会	第3ホール	H20.2.19

資料 4-9 平成 19 年度 音楽学部・音楽研究科教育成果発表例(公開試験以外)

No.	展覧会名	会場	会期	発表学生の 学科・専攻	概要
1	取手アートプロジェクト 2007 -はじまりは隣の家のアーティスト-	取手校地及び 取手市内各所 他	H19.11.9 ～11.25 の 金土日祝 9日間	音楽学部, 音楽研究 科, 美術学 部・美術研 究科ほか	主要な内容は、下記の3点である。 ・オープンスタジオ:取手市内で制作活動を行なうアーティストのアトリエ公開。 ・メタユニット_M1 プロジェクト:都市計画への提案を目的にセキスイハイムの住宅ユニットをリユースしたインスタレーションを市内各所で展開。 ・こどもプロジェクト:小学校にアーティストを派遣し制作指導を行ない、児童作品展を開催。
2	千住アートパス 2007	千住校地	H19.12.15 ～ H19.12.16	音楽環境創造	千住アートパスは、東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科の必修実践授業の研究結果を発表する場。2007 年は「これ、ゼンブみてほしい。」をタイトルに掲げ、音楽制作、録音音響、舞台作品、環境芸術、文化研究など、さまざまな角度から音楽を中心とした芸術とそれを取り巻く環境にアプローチした。
3	東京芸術大学音楽環境創造科 音楽環境創造科 卒業制作・修士論文発表会「マープル!!」	千住校地	H20.2.8 ～ H20.2.10	音楽環境創造	2002 年に新設された音楽環境創造科の第三期生による卒業制作と、昨年度新設された大学院音楽研究科音楽文化専攻音楽音響創造分野・芸術環境創造分野一期生による修士論文の発表会。作品展示、プレゼンテーション、パフォーマンス、論文発表などの多様な発表の場。
4	藝大アーツ in 丸の内「金管五重奏」	丸ビル	H19.11.9 ～ H19.11.10	音楽学部管打楽器専攻学生	120 周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部管打楽器専攻学生による演奏
5	藝大アーツ in 丸の内「アカンサス音楽賞受賞者によるリサイタル」	丸ビル	H19.11.10	音楽研究科 修士 1 年(ピアノ、バイオリン)	120 周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部を優秀な成績で卒業する者に与えられる「アカンサス音楽賞」昨年度受賞者によるリサイタル
6	藝大アーツ in 丸の内「邦楽演奏」	丸ビル	H19.11.11	音楽学部・研究科(邦楽)	120 周年記念事業として三菱地所の協力で開催される、音楽学部・研究科の邦楽専攻学生による演奏

東京芸術大学音楽研究科 分析項目Ⅲ

7	日銀ウォーキングミュージアム KINC O ～日本銀行×東京芸術大学 地下金庫展～	日本銀行本店	H19.11.3 ～ H19.11.16	音楽学部・音楽研究科, 美術学部・美術研究科,	本展は、本学の学生(主に美術研究科油画第二・第三研究室, 音楽研究科音楽文化学音楽音響創造, 音楽学部音楽環境創造科)が、日本銀行本店旧館 地下金庫, 旧営業場等にて様々なメディアを使い、絵画・立体・インスタレーション・映像・音響作品等の作品展示を行うもの。
8	モーニングコンサート1～13	奏楽堂	H19.5.10 ～ H20.2.14	音楽学部	各科から選抜された優秀な学生が、公開の場で大学オーケストラと共演。 5/10(サクソフォーン, ピアノ), 5/17(ホルン, 声楽), 5/24(ハープ, ピアノ), 5/31(作曲, ヴァイオリン, ヴィオラ), 6/21(フルート, ヴァイオリン), 6/28(作曲, ピアノ), 7/5(ピアノ, 声楽), 7/12(作曲, ヴァイオリン), 9/6(オルガン, ヴァイオリン, チェロ), 11/15(トロンボーン, ヴァイオリン), 11/29(作曲, ピアノ), 2/7(バストロンボーン, ピアノ), 2/14(フルート, ピアノ)
9	オペラ「アルチーナ」	旧東京音楽学校奏楽堂	H19.7.13	音楽学部・音楽研究科	音楽学部・研究科の学生・卒業生有志団体オペラアンサンブル “Incanto”の旗揚げ公演。パロック・オペラの傑作《アルチーナ》を上演。 平成19年度文化庁芸術団体人材育成支援事業
10	藝大ミュージックフェスタ 千住	千住校地第7ホール	H19.10.6 ～ H19.10.7	音楽学部ピアノ, 金管楽器, 音楽環境創造科	芸大生によるクラシックコンサート(ピアノ独奏, 金管五重奏)電子音楽とダンスの即興パフォーマンス
11	千住キャンパス1周年記念コンサート	東京芸術センター天空劇場	H19.11.17	音楽学部金管・打楽器	芸大金管アンサンブル, マリンバ・アンサンブル・クイントによる演奏
12	グリーグ&シベリウス・プロジェクト第1回「学生オーケストラ演奏会Ⅰ」	奏楽堂	H19.4.27	学生オーケストラ	ダグラス・ボストック特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
13	学生オーケストラ演奏会Ⅱ	奏楽堂	H19.5.25	音楽学部弦管打学部2年以上	カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
14	学生オーケストラ演奏会Ⅲ	奏楽堂	H19.10.26	学生オーケストラ	ジョルト・ナジ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会を開催。
15	東京藝大チェンバーオーケストラ 第9回定期演奏会	奏楽堂	H19.6.30	チェンバーオーケストラ	ゲルハルト・ボッセ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されている学生による室内オーケストラの公開演奏会を開催。
16	藝大チェンバーオーケストラ第10回定期演奏会	奏楽堂	H19.2.15	チェンバーオーケストラ	ジャン・ピエール・ヴァレーズ特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラの公開演奏会を開催。
17	藝大チェンバーオーケストラ演奏会	東京芸術センター天空劇場	H20.2.16	チェンバーオーケストラ	足立区の受託研究の一環として、足立区にある東京芸術センター天空劇場において、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラによる公開演奏会を実施。
18	ハイドン・シリーズ 第1夜「オーケストラ演奏会」	奏楽堂	H19.11.1	チェンバーオーケストラ	マルコム・レイフィールド特別招聘教授の指導・指揮の下、カリキュラムの一環として設置されているチェンバーオーケストラの公開演奏会を開催。
19	定期演奏会「第39回学生オーケストラ定期演奏会」	奏楽堂	H19.11.30	学生オーケストラ	カリキュラムの一環として設置されている学生オーケストラの公開演奏会。

20	定期吹奏楽第 73 回「東京芸術大学・韓国ソウル大学校音楽大学 交流吹奏楽合同演奏会」	奏楽堂	H19.11.28	音楽学部管打楽器専攻学生	韓国ソウル大学校音楽大学の迎え、学生主体の吹奏楽公開演奏会を開催。
21	「うたシリーズⅦー1 松田トシ賞受賞者によるオペラ・ガラ」	奏楽堂	H19.6.28	音楽学部弦管打学部 2 年以上	松田トシ賞受賞者(声楽科卒業生)と学生オーケストラの共演による公開演奏会。
22	藝大オペラ定期第 53 回 G.プッチーニ「ラ・ボエーム」	奏楽堂	H19.10.13 ～ H19.10.14	音楽学部・音楽研究科声楽専攻学生	オペラ定期公演に学生を参加させ、教育成果の発表の機会としている。
23	オペラハイライトⅠ～Ⅲ	第 6 ホール	H19.7.3 H19.11.30 H20.1.22	音楽研究科声楽専攻(オペラ研究分野)	大学院声楽専攻(オペラ研究分野)の授業の一環として、教育成果を公開の場で発表する。
24	管弦ミニコンサート	第 6 ホール	H19.11.22	音楽学部弦・管 1 年	弦・管 1 年生による発表会。弦楽合奏、室内楽を演奏。
25	Nong project	韓国総合芸術学校	H19.9.17 ～ H19.9.19	音楽研究科修士課程作曲専攻 2 名	交流協定校である韓国芸術総合学校主催の Nong project では、2003 年以来、本学作曲科の学生・教員の作品交流が行われている。本年は、修士課程学生 2 名が招待され、その作品が演奏された。協定にもとづき、学部長裁量経費で渡航費を支援、派遣した。
26	藝大 21 第 3 回奏楽堂企画学内公募演奏会「国撃たれて響き在り～祝・創楽 120 年～」	奏楽堂	H19.3.15	音楽学部楽理科	学生から公募した企画にもとづく公開演奏会。
27	博士コロキウム	5-401 室	H19.6.12 H19.6.19 H19.10.23 H19.11.6 H19.11.20	音楽研究科博士後期課程音楽専攻(音楽学研究領域)(原則 2 年次)	準備中の博士論文について公開で発表を行い、かつ参加者との討論を通じてその内容を深めて行くことを目的とする。
28	楽理科研究演奏会	第 6 ホール	H19.12.11	音楽学部楽理科	楽理科学生から希望者を公募し、研究成果に関する演奏や実技研究の成果発表を公開の場でおこなっている。
29	楽理科卒論・修論・博論発表会	5-109 室	H20.3.24	音楽学部楽理科	卒業・修了予定者による公開の論文発表会。

資料 4-10 平成 19 年度分 特別講座等

No.	受講対象	題目	講師氏名	講師所属等
1	全専攻	特別講座「ヴァイオリン特別講座」	アナ・チュマチェンコ	ミュンヘン音楽大学教授
2	全専攻	特別講座「チェロ特別講座」	堤 剛	桐朋学園大学学長
3	全専攻	特別講座「楽器学(管打楽器)」	山領茂, 小島 修一	ヤマハ銀座管楽器アトリエ
4	全専攻	特別講座「日本歌曲概論」	畑中 良輔	本学名誉教授
5	全専攻	特別講座「古典フルート音楽」	ウィリアム・ベネット	元ロンドン・ロイヤルアカデミー教授
6	全専攻	特別講座「ディートリヒ・ブクステフデのオルガン音楽」	ステッフ・タンストラ	北オランダオルガンアカデミー主宰
7	全専攻	特別講座「グリーグ音楽の真髄に迫る」	トロン・セーヴェル / アイナル・ロッティンゲン	メイン州立大学准教授, パンガー交響楽団コンサートマスター/ピアニスト
8	全専攻	特別講座「古楽邦楽器で有る三味線製作の伝統的技法の実演と講演」	堀込敏雄, 清水善一, 白田千明, 津布久清一郎, 岡田和浄, 谷中満	東京都優秀技能者等

9	全専攻	特別講座「シューベルトの歌曲に於けるテンポについて 演奏法と解釈」	ラモン・ワルター	フライブルク音楽大学 教授(ピアニスト, 役者)
10	全専攻	特別講座「弦楽四重奏公開レッスン」	ライブツィヒ弦楽四重奏団	ライブツィヒ弦楽四重奏団
11	全専攻	特別講座「フランスロマン派・近代フルート音楽について」	ヴァンセン・フ・ラツツ＝パリス	パリ管弦楽団スーパーソロイスト
12	全専攻	特別講座「公開講座(ヴィオラ)」	ジークフリート・フューリンガー	元ウィーン国立音楽大学 ヴィオラ科主任教授
13	全専攻	特別講座「古楽とクラリネット」	コリン・ローソン	英国王立音楽大学学長
14	全専攻	特別講座「ブラームス:ピアノ小品集作品 118 の解釈について」	エヴァ・ボブウォッカ	ビドゴシチ音楽院教授
15	全専攻	特別講座「ドイツ歌曲 演奏法・解釈法」	コンラート・リヒター	元シュトゥットガルト音楽大学 教授, 元本学客員教授
16	全専攻	特別講座「一吹奏楽『朝鮮民謡の主題による変奏曲』演奏と解釈」	キム・ヨンユル	韓国ソウル大学校音楽大学 教授(副学長)
17	全専攻	特別講座「Minimal Music als post-heroisches Management」	セバスティアン・クロツツ	ライブツィヒ大学教授
18	全専攻	特別講座「金管楽器と古楽」	ダニエル・ラサル, ルイス・コ ル・イ・ツクルース, エレーヌ・メ トウース, 康子・フ・ハール	トゥールーズ古典金管 アンサンブル「レ・サック ブチエ」
19	全専攻	特別講座「フルートデュオ公開録音講座」	神田寛明, 竹澤栄祐	NHK 交響楽団(首席奏者), 埼玉大学准教授
20	全専攻	特別講座「文化生産者は『格差社会論』をどう考えるか ～『芸術』と『社会』の狭間で～」	鈴木謙介, 川崎昌平, 福住廉	国際大学 GLOCOM 研究員, 美術家, 美術評論家
21	全専攻	特別講座「複数音源が統合的に制御された音場の設計と音響心理学的評価」	ウィリアム・L・マーテンス	マギル大学シュリック 音楽学校サウンドレコーディング 学科准教授
22	全専攻	特別講座「奈良・京都・近江における邦楽関係史跡について」	中井猛	箏曲生田流宮城社大 師範, 元東京芸術大学非常勤講師
23	学生オーケストラ	グリーク&シベリウス・プロジェクト第1回「学生オーケストラ演奏会Ⅰ」指導及び指揮	ダグラス・ホストック(特別 招聘教授)	カルロヴィ・ヴァリ交響 楽団他
24	学生オーケストラ, 指揮科	「学生オーケストラ演奏会Ⅲ」指導及び指揮, 指揮科特別講義	ジョルト・ナジ(特別招聘 教授)	国立パリ高等音楽院 教授
25	チェンバーオーケストラ	「藝大チェンバーオーケストラ第10回定期演奏会」指導及び指揮	ジャン・ピエール・ヴァレーズ(特別 招聘教授)	ジュネーブ音楽院教 授
26	チェンバーオーケストラ	「東京藝大チェンバーオーケストラ 第9回定期演奏会」指導及び指揮	ゲルハルト・ホッセ(特別 招聘教授)	元本学客員教授
27	チェンバーオーケストラ, 弦楽器・室内楽	ハイドン・シリーズ第1夜「オーケストラ演奏会」指導及び指揮, 弦楽器・室内楽専攻学生指導	マルコム・レイフィールド(特別 招聘教授)	英国王立北音楽院弦 楽科主任教授
28	オーボエ	オーボエ専攻学生特別指導	オットー・ウインター	元本学外国人教師
29	オルガン	集中講義「オルガン建造法実習」	マテュー・ガルニエ	マルク・ガルニエ・オルク・シ ャボン有限会社(オルガ ン・ビルダー)
30	管打楽器	特別講座「ロマン派クラリネット作品の演奏と解釈」	ヴァンツェル・フックス	ベルリンフィルハーモ ニー管弦楽団ソロ奏 者
31	弦楽器	特別講座「弦楽器奏法, 合奏, 演奏解釈」	トーマス・マイニング他3名	ドレスデン歌劇場オー ケストラコンサートマス ター

32	打楽器	特別講座「マリンバの現代奏法について」	エリック・サミュ	パリ国立高等音楽院 及び英国王立音楽院 教授
33	音楽文化学	特別講座「19世紀のドイツ語圏における ベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》の受容」	沼口 隆	国立音楽大学専任講師
34	音楽文化学	特別講座「教養の歴史社会学 ー ドイツの市民社会と音楽」	宮本 直美	立命館大学准教授
35	音楽文化学	特別講座「音楽のサラウンド制作について」	富田 勲	音楽家(シンセサイザー)

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

学生の主体的な学習を促すことを目的に、特に実技系専攻の学生に対しては練習室の確保に取り組んでいる。平成16年度の校舎改修により、大幅に練習室・合奏室を増加させた他、練習室を授業時間外に使用させることや、レッスン室を事情に応じて練習室として使用することを認めるなど、日常的に自主学習の機会提供をおこなっている。さらには、練習室の効率的な稼働を目指し、その使用方法についても随時改善をおこなっている。音楽文化学専攻においても、各研究領域ごとに大学院学生専用のスペースを確保し、学生が個人もしくは共同で研究活動に従事できる環境の整備を進めている(資料4-11、4-12)。

また、こうした学習・研究活動に向かうモチベーションを与えるため、学外からの依頼演奏に対する積極的な参加の誘導や、出演者決定のためのオーディションの導入、あるいは優秀論文に対する口頭発表の場の提供(音楽学)など、さまざまな取り組みをおこなっている(資料4-13、4-14)。

資料 4-11 レッスン室、練習室等の数

種類	室数	面積
レッスン室	107	3,548
練習室	128	2,549
合奏室	10	710
院生室、ゼミ室等	29	1,058
ホール	7	1,879
奏楽堂	1	6,540

※奏楽堂の面積には楽屋や機械室等も含む。

資料 4-12 貸出用楽器一覧

種類	数量	種類	数量	種類	数量
ヴァイオリン	39	チューバ	17	長唄大鼓	4
ヴィオラ	38	ワーグナーチューバ	8	長唄太鼓	18
チェロ	43	ホルン	39	能小鼓	14
コントラバス	31	トロンボーン	31	能大鼓	7
ハープ	12	スーザーホーン	2	能太鼓	10
弦楽用弓	136	リコーダー	46	胡弓(生田流)	9
ヴィオラダガンバ	13	オーボエダカッチャ	2	能笛	23
ヴィオラダモーレ	1	フラウトラベルソ	12	笙	15
リュート	2	オーボエダモーレ	9	箏箏	10
ギター	5	バグパイプ	1	龍笛	9
ピッコロ	8	バロックオーボエ	7	神楽笛	3

フルート	22	クラムホルン	5	高麗笛	5
オーボエ	13	バロックランケット	1	尺八	28
コールアングレ	9	バセットホーン	4	三ノ鼓	1
クラリネット	46	金管古楽器	9	琵琶	9
バスクラリネット	11	フリューゲルホルン	2	囃楽器	17
ファゴット	9	ポストホルン	2	和太鼓	2
コントラファゴット	2	ハンドベル	2	ガムラン	138
サクソフォーン	32	箏（山田流）	87	ガムラン用影絵人形	41
コルネット	16	箏（生田流）	141	印度楽器	25
トランペット	52	三味線（長唄）	117	カヤグム	11
アルトホーン	5	清元・常磐津三味線	13	中国楽器	30
バリトンホーン	6	長唄小鼓	27		

資料 4-13 音楽学部・音楽研究科の顕彰制度一覧

No	奨学金等名	対象専攻
1	安宅賞	全専攻
2	長谷川良夫奨学基金	作曲
3	松田トシ賞	声楽
4	クロイツァー記念音楽賞	器楽(ピアノ)
5	浄観賞	邦楽
6	宮城賞	邦楽
7	常英賞	邦楽
8	アドリアネ・ムジカ賞	器楽(ピアノ)
9	野村学芸財団奨学金	音楽学/全専攻
10	卒業・修了作品買上	作曲
11	アカンサス音楽賞	全専攻
12	同声会賞	全専攻

資料 4-14:演奏依頼一覧(平成 19 年度)

※編みかけ部分は教員のみ。その他は学生のみ又は教員と学生によるもの。

	月	日	曜日	演奏会名	主催
1	4	5	木	平成 19 年度東京工業大学学部・大学院入学記念演奏会	東京工業大学
2		6	金	「芸大さくらコンサートIN科博」	東京芸術大学・国立科学博物館
4		19	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
5		19	木	【受託演奏】日本国際賞授賞式	国際科学技術財団
6		21	土	平成 19 年度同声会賞新人演奏会	東京芸術大学音楽学部同声会
7		27	金	第 1 回みどりの式典	内閣府
9		27	金	昭和音楽大学新百合ヶ丘キャンパスオープニング記念演奏会「9 音楽大学の学生による室内楽の祭典」	昭和音楽大学
10		5	土	第 77 回読売新聞社主催新人演奏会	読売新聞社
11	5	6	日		
12		10	木	【受託演奏】平成 19 年度春の叙勲 勲章伝達式	文部科学省人事課
13		16	水	【受託演奏】平成 19 年度紫綬褒章・藍綬褒章及び黄綬褒章伝達式	

東京芸術大学音楽研究科 分析項目Ⅲ

14		26	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
15		30	水	京都・国際音楽学生フェスティバル2007	(財)ロームミュージックファンデーション
16		31	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
17	6月	2	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
18					
19		5	火	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演リハーサル	(財)石川県音楽文化振興事業団
20		6	水	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
21		7	木	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
22		8	金	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
23		10	日	2007レクサス演奏会	東京トヨペット株式会社
24		11	月	第97回日本学士院授賞式	日本学士院
25		11	月	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
26		12	火	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
27		13	水	オーケストラ・アンサンブル金沢 2007年度 学校公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
28		15	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
29		16	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
30					
31		18	月	平成18年度 第63回日本芸術院授賞式	日本芸術院
32		20	水	能登半島地震 復興記念演奏会オペラ「カルメン」ミニコンサート・説明会	(財)金沢芸術創造財団・ (財)石川県音楽文化振興事業団
33		21	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
34		22	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
35					
36		23	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(3か所)	取手市教育委員会
37					
38		29	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
39		29	金	平成19年度三輪田学園邦楽鑑賞会	三輪田学園中学校
40		30	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
41					
42	7月	7	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(2か所)	取手市教育委員会
43					
44		13	金	オペラアンサンブル「アルチーナ」	オペラアンサンブル“Incanto” ALCINA 実行委員会
45		13	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
46					
47		14	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)(3か所)	取手市教育委員会
48					
49		18	水	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
50		19	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
51		21	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
52		27	金	未来館コンサート	女性と仕事の未来館
53	8月	2	木	平成19年度 第1回安曇野市立穂高東・西中学校	安曇野市教育委員会

東京芸術大学音楽研究科 分析項目Ⅲ

54	9月	3	金	楽器演奏指導・コンサート	
55		4	土	第56回 社会を明るくする運動 音楽教室 「竹の太鼓 を作って演奏しよう」	法務省保護局
56		15	水	全国戦没者追悼式典	厚生労働省
57		18	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
58		19	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
59		20	月	平成19年度伝統音楽研修会	文部科学省初等中等教育局
60		21	火		
61		21	火	JSPSサマープログラム送別会における和楽器演奏	総合研究大学院大学
62		23	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏 楽堂
63		25	土	埼玉大学 大学歌録音	埼玉大学
64		1	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
65		2	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
66		5	水	長唄東音会50周年記念演奏会	長唄東音会
67		7	金	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
68	10月	15	土	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
69		16	日	したまち邦楽ワークショップ	(財)台東区芸術文化財団
70		16	日	それいけ！オルガン探検隊	サントリーホール
71		16	日	高橋節郎記念美術館	安曇野市
72		20	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏 楽堂
73		20	木	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
74		22	土	平成19年度取手市教育委員会主催ミニコンサート	取手市教育委員会
75		22	土	オペラセミナー	(財)足利市みどり文化・スポーツ 財団
76		22	土	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
77		23	日	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
78		29	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業 (吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
79		29	土	【受託演奏】文京シビック第5回定期演奏会	文京シビック合唱団
80		4	木	綾瀬小学校音楽鑑賞教室(2回公演)	足立区立綾瀬小学校
81		5	金	上野・浅草ーにほんの音「藝大生による邦楽フレッシュ コンサート」	(財)台東区芸術文化財団
82	10月	6	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
83		6	土	石川県立音楽堂 シューベルト・フェスティバル	(財)石川県音楽文化振興事 業団
84		6	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽 部指導)(2か所)	取手市教育委員会
85		13	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽 部指導)	取手市教育委員会
86		13	土	平成19年度 第2回安曇野市立穂高東・西中学校 楽器演奏指導	安曇野市教育委員会
87		14	日	オペラセミナー	(財)足利市みどり文化・スポーツ 財団
88		14	日		
89		18	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏 楽堂
90		19	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学 校
91		20	土	オーケストラ・アンサンブル金沢 津幡公演	(財)石川県音楽文化振興事 業団
92		20	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽 部指導)	取手市教育委員会
93		20	土	第2回みやこ町愛郷音楽祭(東京芸術大学演奏会)	福岡県京都郡みやこ町
94		20	土	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
95		21	日	東京芸術大学による指導(アートステージ'妙高推進事業)	(財)新井文化振興事業団
96		21	日	上野・浅草ーにほんの音「邦楽爛漫」	(財)台東区芸術文化財団
97		26	金	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
98					

東京芸術大学音楽研究科 分析項目Ⅲ

99		26	金	九段自立プラン総合的な学習	千代田区立九段中等教育学校
100		27	土	第21回伊澤修二先生記念音楽祭	長野県伊那市
101		28	日	「芸大と遊ぼう in 北とびあ」	東京都北区
102		30	火		
103		31	水		
104		1	木		
105		2	金	「光彩時空'07」における管楽アンサンブルライブ及び屋外コンサート	国立西洋美術館, 光彩時空'07実行委員会
106		3	土		
107		4	日		
108		3	土	平成19年度国立磐梯青年の家主催事業「部活動サポート磐梯ミュージックセミナー2007」	国立青年の家 国立磐梯青年の家
109		4	日		
110		4	日	シリーズ「歌」こころ響き合うとき Vol.10 熱狂の浅草オペラ	(財)新日鐵文化財団(紀尾井ホール)
111		5	月	【受託演奏】文化功労者顕彰式	文部科学省大臣官房人事課
112		8	木	【受託演奏】平成19年度秋の叙勲伝達式	文部科学省大臣官房人事課
113	11月	11	日	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
114		14	水	秋の火災予防運動表彰記念 防火演奏会	東京消防庁 上野消防署
115		15	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
116		16	金	【受託演奏】平成19年度秋の褒章伝達式	文部科学省大臣官房人事課
117		17	土	東京オリンピック 2016	(株)メトロアドエージェンシー
118		19	月	第23回国際生物学賞授賞式	日本学術振興会
119		23	金	ファミリーコンサート「親子で歌いっごう! 日本のうた100選」	(財)石川県音楽文化振興事業団ほか
120		24	土	音楽音響研究会(ミニコンサート)	日本音響学会音楽音響研究会
121		25	日	ファミリーコンサート「親子で歌いっごう! 日本のうた100選」	(財)石川県音楽文化振興事業団ほか
122		1	土	平成19年度取手市教育委員会主催ミニコンサート	取手市教育委員会
123		4	火	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
124		8	土	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
125		9	日	クリスマス&メサイア公演	(財)石川県音楽文化振興事業団
126		12	水	第57回チャリティーコンサート「メサイア」	朝日新聞厚生文化事業団
127		15	土	第27回「台東第九公演」	台東区
128	12月	16	日	LEXUSコンサート in 芸大'07	東京トヨペット
129		20	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
130		20	木	「大学地域開放事業」	台東区立御徒町台東中学校・台東区教育委員会
131		21	金	御徒町台東中学校吹奏楽指導	
132		21	金	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
133		22	日	御徒町台東中と芸大による奏楽堂演奏会	台東区教育委員会
134		23	日	天皇陛下御誕生祝賀レセプションにおける国歌独唱	外務省
135		25	火	Atorionワンコイン vol.6 クリスマス・スペシャル	大星ビル管理(株)秋田アトリオン音楽事業部
136		6	日	平成19年度取手市小・中学校と交流事業(吹奏楽部指導)	取手市教育委員会
137		11	金	平成19年度学習院初等科邦楽鑑賞教室	学習院初等科
138	1月	17	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
139		17	木	期待の音大生によるアフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
140		19	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
141		28	月	財団法人日本視聴覚教育協会創立80周年記念式典	財団法人日本視聴覚教育協会
142	2月	2	土	平成19年度 第3回安曇野市立穂高東・西中学校	安曇野市教育委員会

143		3	日	楽器演奏指導・コンサート	
144		3	日	東京芸術大学演奏会(トランペットと打楽器によるコンサート)	坂東市文化振興事業団
145		10	日	「だて噴火湾アートビレッジ構想」関連演奏会(仮)	北海道伊達市
146		14	木	芸術鑑賞会	茨城県つくば市立二の宮小学校
147		14	木	平成19年度碧南市芸術文化ホール自主事業「小・中学生音楽教室・一般向けコンサート」 金管楽器	碧南市・碧南市教育委員会
148		15	金	のヒミツ	
149		16	土		
150		18	月	【受託演奏】文部科学大臣優秀教員表彰式における演奏	文部科学省
151		21	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
152		22	金	平成19年度邦楽鑑賞教室	恵泉女学園中学・高等学校
153		23	土	取手市夢のコンサート	取手市教育委員会
154		23	土	隅田公園梅まつり2008 箏・尺八演奏会	台東区役所 都市づくり部公園緑地課
155		24	日		
156		1	土	平成19年度旧奏楽堂デビューコンサート	(財)台東区芸術文化財団
157		3	月	第4回日本学術振興会賞及び日本学士院学術奨励賞授賞式	日本学術振興会
158		6	木	平成19年度台東区立小・中学校音楽鑑賞教室(中学校)	台東区教育委員会
159		7	金	平成19年度台東区立小・中学校音楽鑑賞教室(小学校)	台東区教育委員会
160		7	金	東京藝大表参道フレッシュコンサート	カワイ音楽振興会
161	3月	7	金	オペラ「カルメン」コンサート	(財)金沢芸術創造財団・(財)石川県音楽文化振興事業団
162		13	木	木曜コンサート	(財)台東区芸術文化財団奏楽堂
163		13	木	JT アフタヌーンコンサート	日本たばこ産業株式会社
164		14	金	合唱コンクールにおける模範演奏	足立区立第十中学校
165		22	土	藝大オペラ in 君津「椿姫」	房総オペラ愛好会
166		26	水	東京上野ロータリークラブ・第22回奏楽堂コンサート	東京上野ロータリークラブ
167		27	木	平成19年度音楽大学卒業生演奏会	当番校・桐朋学園大学
167(合計) 14(教員のみ) 153(学生参加)					

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

授業形態・指導方法ともに、学生の研究進捗を促すべく有効な取り組みが行なわれている。アンサンブル教育を重視した授業形態は、本研究科に期待されているより高度な演奏水準に応えるための1つとして特筆すべきものである。また、公開の場での演奏に結びつく主体的学習の場の提供や、競争的要素の導入は、学生の成果創出に大きな役割を果たしており、数多くの依頼演奏等においてその水準の高さが如実に示されている。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

特に実技系専攻における学力・資質・能力については、数多くのコンクールにおいて本研究科学生が高い評価を受け、輝かしい成果を示していることによって形となってあらわれている。(別添資料 4-① (P. 4-27) 参照) また、コンクールにとどまらず、在学生・修了生が新聞・テレビ等において頻繁に取り上げられることは、本研究科の教育成果が常に注目を集め、その期待に違わぬ内容を持っていることを証明している。(別添資料 4-② (P. 4-28～4-33) 参照)

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

アンケート結果に見られるように(資料 4-15 参照)、特に専門分野において学生の満足度が高いことは、高度な専門性を求められている大学院という教育課程において、その充実度がうかがえるものとなっている。また、卒業生が専門科目と卒業後の仕事の関連性において高い評価を与えていることは、学業の成果に対する満足度の高さを示している。

資料 4-15 在学生、卒業生アンケート関連設問抜粋(1)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	(大学院学生の方)受講している授業の内容や進め方、教員の研究指導の進め方について全体としての満足度	満足である+どちらかといえ ば満足である	78.6%
	(大学院修士2年生以上、博士2年生以上の方)あなたは、昨年度はじめに立てた研究計画を達成できましたか	達成できた+ほぼ達成でき た	44.4%
	あなたは本学の「魅力」は何であると思いますか 自分の好きな勉強ができる		100%
	あなたは本学の「魅力」は何であると思いますか 専門分野で活躍する先生が多い		92.9%
	あなたは本学の「魅力」は何であると思いますか 個人指導、少人数教育が充実している		85.7%
	本学での教育・学習、学生生活などに関して、全体として「良い」、「楽しい」と感じるなど、満足していますか	満足である+どちらかといえ ば満足である	95.2%
卒 業 生	あなたの大学時代の生活は、全体としてどの程度充実していましたか	非常に充実していた+どち らかといえれば充実していた	86.4%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか 専門教育科目	とても役立っている+役立 っている	90.8%

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準を上回る

(判断理由)

コンクールの結果等(別添資料 4-①, 4-② (P. 4-27～4-33) 参照)に見られるように、本研究科の教育課程を経た(あるいは在籍している)学生は、国内外において非常に高い評価を受けており、専門的な学業の成果を社会に向けて示していると考えられる。特に声楽部門における受賞の率が高いことは、声楽界における大学院教育への期待に十二分に込められていることの現われである。

分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

修士課程・博士後期課程ともに、実技系専攻の学生については、必ずしも一般の大学におけるような就職の形態をとるわけではない。むしろ音楽家として広く社会において活躍することが、学生本人の希望であると同時に社会的要請でもある。修了生たちは一流の音楽家として国内外で活躍しているが、こうした分野においては数値的把握が難しいのが実状である(資料4-16, 4-17, 4-18)。

一方音楽学専攻(現音楽文化学専攻)においては、芸術に関わるような企業への就職も見られるが、特筆すべきは博士学位取得後数年、もしくは取得直後に大学教員としての就職が一定数見られることである。ポスドク問題など、学位取得者の就職については非常に困難な状況が続いており、特に人文科学系分野においては改善の方向性が見られない中で、この数年専任教員を輩出していることは、博士後期課程における、学位授与促進も含めた課程改革の成果の一つであると考えられる。

資料4-16 音楽研究科 平成20年3月修了者の進路状況

(H20.5.1までに判明した分)

■修士課程

区 分	修了者	就職		非常勤 自営	進学				未定・ 他
		教職	企業等		大学院 (本学)	別科等 (本学)	他大学 等 (国内)	海外留 学	
作曲専攻	6			2	2	1			1
声乐専攻	20			2	4				14
器楽専攻	38	1	1	13	1			2	20
指揮専攻	2							1	1
邦楽専攻	10			5	1				4
音楽文化学専攻	39	1	8	5	12	1			12
計	115	2	9	27	20	2		3	52

■博士後期課程

区 分	修了者	就職		非常勤 自営	進学				未定・ 他
		教職	企業等		大学院 (本学)	別科 (本学)	他大学 等(国 内)	海外留 学	
音楽専攻	18	1	1	9					7
計	18	1	1	9					7

資料 4-17 最近3年間の修了生の主な就職先企業名

埼玉大学(准教授), 富山大学(講師), 香川大学(講師), 北海道教育大学(講師), 沖縄県立芸術大学(准教授), 東京音楽大学(専任講師), 上野学園大学(専任講師), 札幌大谷大学(専任講師), 相愛大学(専任講師), 武庫川女子大学(専任講師), 昭和音楽大学(専任講師), 桜美林大学(専任講師), 南京芸術学院(教員), 茨城県公立学校(教員), Kバレエカンパニー(バレエピアニスト), アフィニス文化財団(職員), 読売新聞社(事業部), 新日鐵文化財団(職員), 三菱UFJ銀行(総合職), 神奈川共立(文化センター事業部), 東京オペラシティ文化財団(事業部), 日本マーケティング研究所(マーケティングプランナー), 京都市芸術文化協会(アートコーディネーター), 松竹(舞台制作), ヤマハ音楽振興会(講師), 劇団四季(俳優), 東京フィルハーモニー交響楽団(楽員), 航空自衛隊音楽隊(指揮), 情報技術センター(IT), NHK交響楽団(楽員), タント・ビュー(システム), ワールド航空サービス(旅行業), サクライ楽器(講師), 東京シティフィルハーモニー管弦楽団(楽員), 宝島(出版)

資料 4-18-1 卒業・修了生アンケート:現在の職業

(複数回答可 単位%)

会社社員, 団体職員	会社役員, 高等専門学校	教員(大学, 高等専門学校以外)	公務員 (教員を除く)	自営業主又は その手伝い	自由業(芸術家, 作家, 演奏家など)	パートタイマー・フリーター	学生	主婦(夫)	その他	無回答
5.1	39.1	6.5	1.0	11.6	63.6	3.1	3.4	20.4	4.8	1.0

資料 4-18-2 卒業・修了生アンケート:本学卒業・修了後の創作活動状況

(複数回答可 単位%)

公的なコンクールやコンペティション等に 参加したことがある	公的なコンクールや コンペティション等で 受賞したことがある	個展やコンサートな どの活動をしている	新聞, 雑誌などの メディアに紹介され たり, 執筆したこと がある	専門性を生かし て, ボランティア活 動, 地域活性化活 動, 生涯学習指導 などを行っている	その他	該当なし	無回答
41.1	28.6	46.5	47.7	25.7	7.1	13.3	4.6

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

上記コンクールにおける在学生への評価(別添資料 4-①, 4-②(P. 4-27~4-33)参照), また修了生の所属先での評価(次頁、資料 4-19 参照), 音楽関係の職業に従事している割合の高さ(上記、資料 4-17, 4-18-1, 4-18-2 参照)など, 音楽に関わる世界において本研究科が非常に高い評価を受けていることがうかがえる。また, 学生の保護者や修了生の満足度(資料 4-19)から, 本研究科の教育・研究システムが高い評価を得ていることも知ることができる。

特に, 音楽関係の大学・学部への就職数は目立つものがあり(次頁、資料 4-19 参照), 音楽を専門分野とする高等教育機関における本研究科修了生への評価の高さがうかがえる。

資料 4-19 在学生，卒業生アンケート関連設問抜粋(2)

	設問	肯定的選択肢を回答した者の割合	
在 学 生	あなたの保護者は、あなたの入学後の本学に満足していると思いますか	満足していると思う＋どちらかといえば満足していると思う	92.9%
	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか（専門教育科目）	とても役立っている＋役立っている	90.8%
卒 業 生	在学中に学んだ事は、仕事や生活に役に立っていますか（学内外での展示，発表，演奏活動）	とても役立っている＋役立っている	80.3%
	あなたが在学中に受けた授業の内容や進め方，教員の研究指導の進め方について全体として満足していますか	満足している＋どちらかといえば満足している	75.8%
	（企業，団体等に所属している方）職種や仕事は，大学時代の専攻等とどのようなかわりを持っていますか	非常に関係のある仕事である＋どちらかといえば関係のある仕事である	77.9%
	（企業，団体等に所属している方）所属先での，東京芸術大学又は卒業生・修了生への評価をどのように感じていますか	非常に高い評価を受けていると感じる＋どちらかといえば高い評価を受けていると感じる	87.6%
	自分の子ども，後輩・教え子等，芸術を学ぼうとしている人に東京芸術大学への進学を薦めたいと思いますか	思う	78.9%

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）

本研究科を修了した学生の多くが，演奏・教育等，さまざまな音楽の世界において活躍の場を得ていることは，音楽関係者からの高い評価と結びついており，本研究科の特徴に応じた進路を得ていると判断できる。また，特に人文系分野における大学教員への就職が困難な状況の下，本研究科修了生が上記のようにそのポストを得ていることは，修了生たちが競争率の高いポスト獲得を可能にするだけの専門的な知識・技能を身につけており，そうした能力に対して，高等教育・研究機関の関係者より，他大学修了者と比較してもきわめて優れた評価が与えられていることを示している。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例１「博士後期課程における教育体制の改善と学位授与促進」（分析項目Ⅰ）

（質の向上があったと判断する取組）

①学位委員会の設置，②複数指導教員制の確立，③学位委員会による学生個々の研究進捗状況の把握，④カリキュラムの簡素化による課程の目的の明確化，などきめ細かな指導体制を作り上げることにより，学位授与が大きく増進した。こうした取り組みに対する評価は，平成20年度から新たに開始する「リサーチセンター」が特別教育研究費の事業として採択されたことにもあらわれており，今後は，このセンターを利用した，よりきめ細かな指導が可能な状況になっている。

②事例２「博士後期課程におけるカリキュラムの改訂」（分析項目Ⅱ）

（質の向上があったと判断する取組）

カリキュラムの改訂において，博士リサイタルおよび雑誌論文掲載（もしくは学会における口頭発表）を，「博士特別研究」として単位化し，目に見える形で評価するシステムを提供したことにより，学生の取り組みがより活発なものとなっている。

特に博士リサイタルにおいては，単に演奏を行なうだけではなく，演奏全体をマネジメントする意識が学生にも芽生えてきた。学生自身が外部資金の獲得により，より実践的な舞台づくりを行うことや，研究計画と関連付けたプログラム整備を行なうなど，演奏会全体をプロデュースする活動が見られるようになってきたことは，芸術家養成を目的とする大学院としては，非常に大きな質の向上であると考えられる。

5. 映像研究科

I	映像研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・	5 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・	5 - 3
	分析項目 I	教育の実施体制	・ ・ ・ 5 - 3
	分析項目 II	教育内容	・ ・ ・ ・ ・ 5 - 7
	分析項目 III	教育方法	・ ・ ・ ・ ・ 5 - 2 2
	分析項目 IV	学業の成果	・ ・ ・ ・ ・ 5 - 2 4
	分析項目 V	進路・就職の状況	・ ・ ・ 5 - 2 8
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	5 - 2 9

I 映像研究科の教育目的と特徴

1. 東京芸術大学大学院映像研究科は、平成 17 年 4 月に新設の国立唯一の映像教育研究のための大学院組織であり、基礎となる学部を持たない独立研究科である。所在地は、神奈川県横浜市である。

2. 本研究科は、映像に関する学術的な理論及び応用を教授研究し、その奥義を究め、自立して創作活動と研究活動を行うに必要とされる、表現者としての問題発見能力と専門家としての問題解決能力という二つの能力を兼ね備えた表現者と教育研究者を養成することを目的としている。

近年、わが国のコンテンツ産業の立ち遅れが指摘されており、「知的財産推進計画」(2004～2007の各年、知的財産戦略本部決定)などにおいても、「コンテンツ人材育成」に向けて、大学等における自主的取組(組織の設置などを含む。)への支援を一層充実するとされており、アニメやゲーム分野におけるコア人材の育成、若手映画作家の育成、コンテンツ技術に関する知識を有するプロデューサーとその指導者の育成などが謳われている。

本研究科は、こうした社会的要請に応えるため、具体的には、下記のような人材の育成を目指す。

(1) 修得した多様な知識や技術を活かした、独創的な発想ができる表現者(映画監督、映像作家、映画技術者、メディアアーティスト、アニメーション作家、クリエーター、制作ディレクター)の育成。

(2) 修得した多様な知識や技術に加えて、映像表現に関する専門知識と国際的視野を備え、映像文化に関する専門知識を必要とする社会・産業分野の要請に応じて活躍する人材(プロデューサー、映画祭やアート・イベントの企画立案者、プロデューサーコンテンツエンジニア、インターフェイスデザイナー、アーカイブエンジニア)の育成。

また、博士後期課程にあつては上記に加え、本学の伝統的な特質である「つくる」という知見と経験を重視しながら、映像メディアにおける言語と文法を研究し、この新しい分野の体系化に寄与することのできる教育研究者の育成を目指す。

3. 東京芸術大学は、大学全体として、国立大学の中で唯一の芸術大学としての使命(即ち芸術家の育成と芸術創造の具現化)を果たすだけでなく、芸術をもって、より社会に貢献できる大学として各種の取組・活動を行うことを重視している。

そのため、本研究科においても、社会との接点を持った取組を取り入れていくことを推進している。

[想定する関係者とその期待]

上記 2. に記述のとおり、本研究科には、映像コンテンツ創造、映像メディア技術、映像メディア教育、映像メディア文化創造等の分野で活躍する人材の育成が期待されている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点到係る状況)

映像研究科は資料 5-1 に示したとおり、修士課程 3 専攻（映画、メディア映像、アニメーション）、博士後期課程 1 専攻（映像メディア学）からなる。（※アニメーション専攻は平成 20 年設置。）

本研究科の映画専攻においては、映画制作の各過程で必要とされる技能別に、監督、脚本、製作、撮影、録音、美術、編集について、メディア映像専攻では、多様化するデジタルメディア映像作品の制作（メディアデザイン、メディアアート）、流通・保存（メディア文化財）、それらの背景となる技術（コンテンツウェア開発）について、アニメーション専攻では、アニメーションのプロデュース・企画製作（企画構成）、制作（立体アニメーション、平面アニメーション）、物語・理論（物語構成）について、それぞれ専門とする教員を配置している。また、寄付講座であるコンテンツ産業研究分野では、企業からの特任教員により、「ジャーナリズムと知的財産」、「技術移転プロデュース」という各分野に共通する観点からの講義の提供を受けている。

資料 5-1: 大学院映像研究科の教育研究組織

(博士後期課程)

(修士課程)

※専任教員の専門分野と氏名

映像メディア学 専攻 (H19 設置) 入学定員 3 名	映画専攻 (H17 設置) 入学定員 32 名	監督・脚本・製作 領域	監督分野	黒沢 清教授＊ 北野 武特別教授
			脚本分野	筒井ともみ准教授
			製作(プロデュース) 分野	堀越謙三教授＊
		映画制作技術領 域	撮影・照明分野	栗田豊通教授＊
			編集分野	筒井武文准教授
			録音分野	堀内戦治准教授
			美術分野	磯見俊裕准教授
	メディア映像 専攻 (H18 設置) 入学定員 16 名	コンテンツ創造研 究分野	メディアデザイン研 究領域	佐藤雅彦教授＊
			メディアアート研 究領域	藤幡正樹教授＊
		コンテンツ科学研 究分野	コンテンツウェア開 発研究領域	桐山孝司准教授＊
			メディア文化財研 究領域	桂英史准教授＊
	アニメーション 専攻 (H20 設置: 参考) 入学定員 16 名	アニメーション 表現研究分野	立体アニメーショ ン領域	伊藤有壱教授
			企画構成領域	岡本美津子教授
		アニメーション 創造研究分野	平面アニメーショ ン領域	山村浩二教授
			物語構成領域	出口丈人教授＊ (H19 着任)

＊は博士後期課程の専任教員。

博士後期課程においては、資料 5-1 に示したとおり、専任教員は 8 名となっているが、必要に応じて、その他の研究科教員が協力する体制としている。

このほか、制作課題の内容に応じて、関連の技術者、アーティスト、プロデューサー等の専門家を適宜、特別講師、非常勤講師として招請し、専任教員とともに指導にあたっている(資料 5-2, 5-3 参照)。

資料 5-2:平成 17～19 年度までの特別講師等の例

大塚英志	物語論, 漫画表現論	神戸芸術工科大学
梅本洋一	演劇特別研究	横浜国立大学
森 昌行	表現・制作技術ゼミ	(株)オフィス北野
片岡公生	脚本特別研究	東京映像工房
天野真弓	表現・制作技術ゼミ	ぴあ(株)
佐々木史朗	表現・制作技術ゼミ	(株)オフィス・シロウズ
西川 泉	領域ゼミ(録音)	(株)ガルエンタープライズ
吉川菜美	領域ゼミ(脚本)	(有)ステューディオスリー
岡田 勲	表現・制作技術ゼミ	ストーリーアーツサイエス研究所(株)
黒沢和子	制作技術ゼミ	(株)黒沢プロダクション
河東 努	領域ゼミ(録音)	コンチネンタルファーイースト(株)
上竹寛一	制作技術ゼミ	グリフィス
田坂博子	メディア文化財特別演習	(株)プロセスアート
伊奈英次	メディアアート特別演習	写真家
西嶋憲生	映像メディア学特別講義	多摩美術大学

資料 5-3:外国人招待講演等一覧(平成 17～平成 19 年度)

氏名	職/国名	講演テーマ	実施年月日
Park Ki-young	韓国映画振興会附属アカデミー 学長	「映画づくりは学校で学べる か」シンポジウム(パネリスト)	2005.6.17-20
謝 飛	北京電影学院 教授	「映画づくりは学校で学べる か」シンポジウム(パネリスト)	2005.6.17-20
ジャン＝ルイ・ボアシェ	メディア・アーティスト/パリ第8大 学教授, フランス	「映像の原点」	2007.4.28-30
ジャン＝シャルル・フィット ウーシ	映画監督, フランス	「見る事への方法論」	2007.4.30-5.2
ズビグニュー・リプチンスキ ー	映像作家, ポーランド	レクチャー	2007.6.5
ドミニク・オーブレイ	フランス国立映画学校 講師	特別講演及びワークショップ の実施	2007.6.27-29
ディミトリス・カリオフィリス	サウンドアーティスト, ギリシア	「音/音楽」の作品作り	2007.6.29
ベルナール・スティグレー ル	哲学者, ポンピドゥー・センター文 化開発研究所長, フランス	「映画分析における可能性 の開拓と批評空間の創出」	2007.7.12
ヴァンサン・ピュイグ	ポンピドゥー・センター文化開発 研究副所長	「映画分析における可能性 の開拓と批評空間の創出」	2007.7.12
アラナ・ハイス	PS1 ディレクター, アメリカ	修了制作展「作品講評」	2008.1.27

また、本研究科には事務部が置かれており、事務職員のほか、スタジオ運営等を担う技術職員が配置されており、本研究科の教育運営を支える組織となっている。

資料 5-4: 大学院映像研究科事務部



観点 教育内容，教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本研究科では，教員数が少ないこともあり，専任教員全員から構成される映像研究科教授会が，教育研究課程の編成や教育内容，教育方法の改善等についても審議する場となっている。

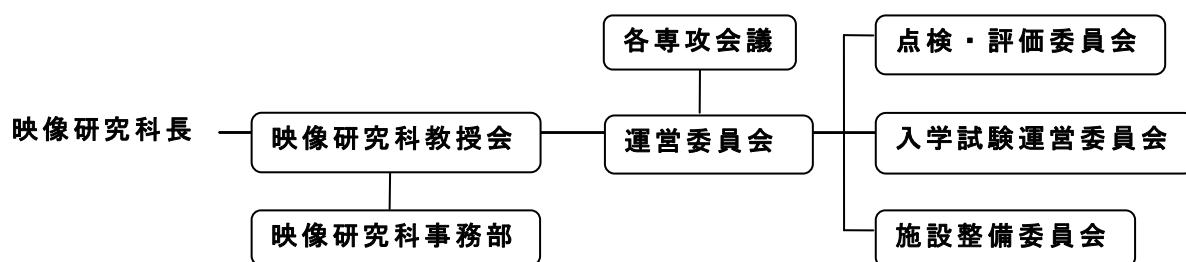
本研究科は，その設置にあたって，本学大学院の他研究科と同様に，個人指導を重視した教育体制を基盤とし，1) 学生と教員による小規模な編成，2) 集中的な教育編成組織，3) 実制作を中心とする教育課程の編成とすることを基本として，教育課程，教員組織，教育内容等を整備している。特に修士課程においては，実制作（「つくる」ということ）が教育内容の中心となっているため，少人数のグループによる実践的な制作を通じた指導方法が行われているため，必然的に学生・教員間のコミュニケーションが密となる。

そのため，実質的な教育内容，教育方法の改善等については，各専攻ごとの専攻会議の果たす役割が大きい。専攻会議では，各専攻の教育課程に応じ，日常的な学生との接触で知り得た個々の学生の個性やスキルを勘案しながら，制作課題の決定や課題に応じた適切な指導方法などについて，教員相互でディスカッションを行って決定し，授業を進めている。また，課題などの進捗状況に応じ，指導方法等を適宜見直すことにしている。これは，少人数グループ指導の利点と言える。

特に，制作課題が修了する際に行う講評会(担当教員以外の教員も参加)の後の専攻会議では，具体的な指導方法の評価や修正を行う場となっている。

また，教授会の下には，各専攻からの代表教員をもって構成する運営委員会を設置しており，専攻間の調整等が必要な事案については，運営委員会で検討を行った上で，教授会で審議することとしている。

本研究科は，平成 17 年 4 月に設置され，平成 19 年 3 月に初めての修了生を出したばかりである。平成 20 年度に設置するアニメーション専攻を含む全ての専攻が修了生を出すタイミングで，各専攻の就職，進学状況等を分析し，修了生を出すことで初めて顕在化する初期想定との違いを早急に把握し，更なる改善に努めたいと考えている。

資料 5-5：映像研究科の運営管理体制**(2) 分析項目の水準及びその判断理由**

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

(1) 映像にかかる専門的知識・技能について，様々な専門的背景を有する専任教員を配置し

ていること(資料 5-1(P. 5-3) 参照)。

(2) 特別講師, 非常勤講師を活用して, 課題に応じた特別講義や指導を行いきめ細かく対応していること(資料 5-2(P. 5-4) 参照)

(3) 映像にかかる技術スタッフを含んだ事務組織体制を整備して, 教員とともに教育指導を支えていること(資料 5-4(P. 5-4) 参照)。

(4) 課題等の進捗状況に応じて, 適宜指導方法等を見直す体制を整えていること。

上記のとおり, 映像にかかる様々な知識・技能の教授を行うための組織・体制を整えて, 本研究科の目指す人材養成を可能としている。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本研究科の教育課程は、「資料 5-6 教育課程表」(P.5-7~5-10)、「資料 5-7 授業科目の内容」(P.5-10~5-18)のとおりとなっている。

上述の「観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」で既述したとおり、本研究科では、映像表現のための様々な知識・技術の修得を目指して、特に修士課程においては、実制作(「つくる」ということ)が教育内容の根幹をなしている。

修士課程の教育課程編成にあつては、専攻ごとに必修科目Aの「特別演習」を通じて、専攻内の各領域に関する基礎的な知識、技術、ノウハウを修得し、そのうえで、領域別ゼミナール(選択必修科目A)で各学生の志向や技量に応じた、個別指導を行う。

領域別ゼミナールは、専任教員との作品制作やプロジェクト実践を進めながら、高度の専門を修得した表現者、プロデューサー等あるいは研究者としての基盤を築くため、学年横断型の作品制作と個人制作を平行して進めることとしている。

成績評価は、作品の発表、グループによる批評、自己評価、分析、教員によるチュートリアル、各ゼミナールでの発表、エッセイ(作品解説)等によって行われる。これらのスキル、知識と経験を修士課程における研究成果として、修士論文あるいは修了制作の形態で結実し修士の学位を授与することが、本研究科修士課程におけるカリキュラムの大きな特色である(資料 5-8(P.5-18~5-19)参照)。

資料 5-6 教育課程表

(大学院映像研究科映画専攻(M))

科目 区分		授業科目の名称	配当 年次	単位数		授業 形態	
				必修	選択	講義	演習
必修科目 A (演習科目)		映画表現特別演習Ⅰ	1	4			○
		映画表現特別演習Ⅱ	2	4			○
		記録映像特別演習Ⅰ	1	2			○
		記録映像特別演習Ⅱ	2	2			○
必修科目 B (講義科目)		映画表現理論特殊講義	1	2		○	
		映画・映像理論特別研究	1	2		○	
		脚本特別研究	1	2		○	
		映画史特殊講義	2	2		○	
選択必修科目 A (領域別ゼミナール)	監督・脚本・製作分野	映画表現技術ゼミⅠ	1		6		○
		映画表現技術ゼミⅡ	2		6		○
		小計（2科目）	—	0	12	—	
	映画制作技術分野	映画制作技術ゼミⅠ	1		6		○
		映画制作技術ゼミⅡ	2		6		○
		小計（2科目）	—	0	12	—	
選択必修科目 B (講義科目)		物語理論	1・2		2	○	
		現代芸術論	1・2		2	○	
		パフォーミング・アーツ論	1・2		2	○	
		写真史・写真論	1・2		2	○	
		デジタル・アーツ論	1・2		2	○	
		映画音楽論	1・2		2	○	
		小計（14科目）	—	20	60	—	
合計（18科目）			—	20	84	—	

修了要件及び履修方法
必修科目20単位、選択科目14単位以上を履修し、かつ必要な論文（制作）指導を受けた上で、本大学院が行う修士論文（制作）の審査に合格すること。

（大学院映像研究科メディア映像専攻（M））

科目 区分			授業科目の名称	配当 年次	単位数		授業 形態	
					必修	選択	講義	演習
必修科目A (演習科目)			メディアデザイン特別演習	1	2			○
			メディアアート特別演習	1	2			○
			コンテンツウェア開発特別演習	1	2			○
			メディア文化財研究特別演習	1	2			○
必修科目B (講義科目)			展示計画論	1・2	2		○	
			展示構成論	1・2	2		○	
			作品メディア構造論	1・2	2		○	
			作品メディア芸術史	1・2	2		○	
選択必修科目A (領域別ゼミナール)	コンテンツ創造研究分野	メディアデザイン	コンテンツウェア創造A ゼミナールⅠ（メディアデザイン）	1		6		○
			コンテンツウェア創造A ゼミナールⅡ（メディアデザイン）	2		6		○
			小計（2科目）	—	0	12	—	
		メディアアート	コンテンツウェア創造B ゼミナールⅠ（メディアアート）	1		6		○
			コンテンツウェア創造B ゼミナールⅡ（メディアアート）	2		6		○
			小計（2科目）	—	0	12	—	
	コンテンツ科学研究分野	コンテンツウェア開発	コンテンツウェア科学A ゼミナールⅠ（コンテンツウェア開発）	1		6		○
			コンテンツウェア科学A ゼミナールⅡ（コンテンツウェア開発）	2		6		○
			小計（2科目）	—	0	12	—	
		メディア文化財研究	コンテンツウェア科学B ゼミナールⅠ（メディア文化財研究）	1		6		○
			コンテンツウェア科学B ゼミナールⅡ（メディア文化財研究）	2		6		○
			小計（2科目）	—	0	12	—	
	選択必修科目B (講義科目)		コンテンツ産業A （ジャーナリズムと知的財産）	1・2		2	○	
			コンテンツ産業B （技術移転プロデュース）	1・2		2	○	
			物語理論	1・2		2	○	
			現代芸術論	1・2		2	○	
		パフォーミング・アーツ論	1・2		2	○		
		写真史・写真論	1・2		2	○		
		デジタル・アーツ論	1・2		2	○		
		映画音楽論	1・2		2	○		
小計（16科目）			—	16	112	—		
合計（24科目）			—	16	160	—		
修了要件及び履修方法								
必修科目16単位、選択科目18単位以上を履修し、かつ必要な論文（制作）指導を受けた上で、本大学院が行う修士論文（制作）の審査に合格すること。								

(大学院映像研究科アニメーション専攻 (M))

*平成20年4月設置(参考)

科目 区分			授業科目の名称	配当 年次	単位数		授業 形態	
					必修	選択	講義	演習
(必修科目A) (演習科)			立体アニメーション表現特別演習	1	2			○
			アニメーション作品研究特別演習	1	2			○
			平面アニメーション表現特別演習	1	2			○
			企画開発特別演習	1	2			○
(必修科目B) (講義科)			アニメーション構想設計論	1・2	2		○	
			サウンドデザイン論	1・2	2		○	
			アニメーション史	1・2	2		○	
			漫画表現論	1・2	2		○	
			小計（4科目）	—	16			—
選択必修科目A (領域別ゼミナール)	アニメーション 表現研究分野	企画 領域	企画構成ゼミナールⅠ	1		6		○
			企画構成ゼミナールⅡ	2		6		○
			小計（2科目）	—		12		—
		立体 シメ 領域	立体アニメーションゼミナールⅠ	1		6		○
			立体アニメーションゼミナールⅡ	2		6		○
			小計（2科目）	—		12		—
	アニメーション 創造研究分野	物語 領域	物語構成ゼミナールⅠ	1		6		○
			物語構成ゼミナールⅡ	2		6		○
			小計（2科目）	—		12		—
		平面 シメ 領域	平面アニメーションゼミナールⅠ	1		6		○
			平面アニメーションゼミナールⅡ	2		6		○
			小計（2科目）	—		12		—
(必修科目B) (講義科目)			写真史・写真論	1・2		2	○	
			演劇論	1・2		2	○	
			デジタル・アーツ論	1・2		2	○	
			現代芸術論	1・2		2	○	
			小計（4科目）	—		8		—
修了要件及び履修方法								
原則として2年以上在学し、必修科目を16単位、選択必修科目Aを12単位、選択必修科目Bを4単位以上、合計32単位以上を修得し、必要な研究指導を受けた上で修士論文又は修了制作を提出し、その審査に合格すること。								

(大学院映像研究科映像メディア学専攻 (D))

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数		授業 形態	
			必修	選択	講義	演習
映像メディア学 専攻	映像メディア学特別講義	1	2		○	
	映像メディア特別研究Ⅰ	1	2			○
	映像メディア特別研究Ⅱ	2	2			○
	映像メディア特別演習Ⅰ	1	2			○
	映像メディア特別演習Ⅱ	2	2			○
	特別研究指導	1～3	－			○
	小計（6科目）	－	10	0	－	
合計（6科目）		－	10	0	－	
修了要件及び履修方法						

必修科目10単位を履修し、かつ必要な論文指導を受けた上で、本大学院が行う博士論文の審査に合格すること。

資料5-7 授業科目の内容
(大学院映像研究科映画専攻(M))

授業科目名	講義等の内容
映画表現特別演習Ⅰ	映画を成り立たせる理論とその表現手法について研究する科目である。作家の世界観は物語によって構築され、まず脚本という形式によって表現される。他の物語表現形式である小説や戯曲との差異を通して検証し、映画における物語形成の特殊性を考察する。映画では、物語を撮影という形式を通して再表現するのであり、音楽や音の効果、画面の構成、俳優の演出等々が相まって、初めて映画の物語世界が表出される。演出プランを構築して行く上でのさまざまな理論を過去の優れた作品を通して検証すると同時に、実際に映画の制作を映画メディアの原点であるフィルム(16mm)で行う。
映画表現特別演習Ⅱ	映画を成り立たせる理論とその表現手法について研究する科目である。映画を構築するためには、脚本を撮影という形式を通して、物語を映像と音声によって再表現しなくてはならない。従って撮影を通じた映画の文体を知ることが必要である。音楽や音の効果、画面の構成、俳優の演出等々が相まって、初めて映画の物語世界が表出される。 過去の優れた作品の文体を検証するとともに、表現のための新旧の撮影メディアにも着目し、デジタル・ビデオ、ハイデフィニション、35mmフィルム等による作品制作を行う。
記録映像特別演習Ⅰ	ドキュメンタリー映画等、記録を目的とした映画制作について研究する科目である。ニュース映像や記録のための映像はそれ自体では表象的な事実を示すものでしかないが、それに意図的な撮影や編集を加えることによって、特定の価値観、世界観を表現することができる。主題の選択と調査研究、映画の脚本に相当する構成の立案、インタビューの構成、ドキュメンタリー編集の基礎理論などを、少人数グループによるドキュメンタリー映画の制作を通して検証する。
記録映像特別演習Ⅱ	ドキュメンタリー映画等、記録を目的とした映画制作について研究する科目である。作りものではない映像はドキュメンタリー最大の武器だが、記録映像は本当に客観的であり得るのか、被写体と撮影者(表現者)との関係性とは何かといった美学哲学的な問題を、小川紳介とマイケル・ムーアとの手法の相違に着目して検証するとともに、編集という行為のもつ作為性の問題を考えるために、各自1作品のドキュメンタリー映画制作を通して研究する。
映画表現理論 特殊講義	映画に何ができて、何ができないのか。それは技術的な限界もあれば、倫理的なコードの問題もあるが、そうした映画の限界に挑戦することで、新しい表現が切り開かれることも多い。 映画のドラマツルギーの一応の完成をみた1950年代以降、それを果敢に打ち崩し、新たな映画の表現を獲得しようと今も戦い続けるジャン=リュック・ゴダール、ジャン=マリー・ストロブ等々の作品を通して、映画における数々の試みを再発見しつつ、改めて映画にできることは何かを問う。
映画・映像理論 特別研究	革命後のソヴィエトのモンタージュ理論から、アンドレ・バザンの存在論、クリスチャン・メッツによる映像記号論、ジル・ドゥルーズの時間への考察へと飛躍していく映画・映像理論を学びつつ、それが実作とどう連動し、映画の作り方、見方を変化させたのかを、コンピュータによる映像編集プログラムなどを用いて実証的に検証する。また、それら映画・映像理論が今日のメディア・リテラシーのなかで、いかなる役割を果たしているのかも考察する。
脚本特別研究	映画の脚本と演劇の戯曲の違いは、いったいどこにあるのか。映画が光と影であるとすれば、舞台には実在としての人間がいる。脚本が映画の設計図だとすれば、ではいったいどこで映画は成立するのか。台詞の用いられ方ひとつとっても違いは尽きない。過去の優れたシナリオを読み、主題、表現について考え、討議するとともに、実際に短編、中篇の脚本を書き、完成させる。

映画史特殊講義	リュミエール兄弟、エジソンに始まった映画が100年の歴史を経て、いかに現在の映画言語、映画文法へと発展してきたかを分析研究する。 編集の発見、カメラ・アングルの発見、ニュースからドキュメンタリーへの展開、トーキーの発明や色彩の獲得による表現の多様化などを考察し、それらがいかに映画的話法の変化をもたらしたか、その結果何を表現しうるに至ったかを、各回映画作品を見ながら検証し、その今日的意義を問い直していく。
映画表現技術ゼミⅠ (監督・脚本・製作領域)	映画の企画立案から、脚本の制作、実際の撮影までのすべてのプロセスをゼミナールとして研究する。 脚本の制作に主眼を置き、原作と脚本の関係、キャラクター設定、プロットの手法などを、脚本を各自に執筆させつつ、過去の名作の分析とともに比較研究する。また、実際に脚本から部分的な演出プランを作成し、俳優を使って監督の演出意図をどう伝えるかなどを学んでゆく。録音や美術をともなった撮影を行った後、編集して1シークエンスを完成させる。
映画表現技術ゼミⅡ (監督・脚本・製作領域)	映画の企画立案から、脚本の制作、実際の撮影までのすべてのプロセスをゼミナールとして研究する。映画制作全体のあり方に注目し、企画立案とマーケティングとの相互関係、製作進行上さまざまな問題点を検討しつつ、より良い脚本をどのように作り上げてゆけばいいのか、どのように実際の撮影現場でよりスムーズな演出をしてゆけばいいのか、完成した作品をどのように上映して行けばいいのか、といった点について実際の制作を通して、現実に応じた形で学んでゆく。
映画制作技術ゼミⅠ (映画制作技術領域)	脚本を理解し、実際の撮影を通して物語を完成させて行くまでのすべての表現のためのステップをゼミナールとして研究する。表現の質を向上させて行くためには、まず一番にカメラやレンズ等撮影機器の特性や照明や録音機器の特性を理解し、これを使いこなせなくてはならない。その上で、カメラワークがあり、スタジオ・セット、ロケ・セットの組み立てがあり、照明があることを学ぶ。すでに名作と呼ばれる脚本などを元にして、実際の演出プランを作成し、撮影編集を行う。また、台詞や効果音、音楽を加えて、如何に表現が変化するかなど実験的に作品を制作し、表現の可能性を探る。
映画制作技術ゼミⅡ (映画制作技術領域)	脚本を理解し、実際の撮影を通して物語を完成させて行くまでのすべての表現のためのステップをゼミナールとして研究する。脚本から表現しようとする意味内容を汲んで、それをカメラワークとの関連性、撮影機材の特性、美術の視点で読み、場面をセットやロケセット、ロケの異なった条件下で成立させ、空間をつなぐ手法、撮影現場での録音技術など、制作技術全般を映像表現という視点から研究する。映画表現技術ゼミと組んでの制作においては、与えられた作品内容を読解しながら、シーンごとに必要な合成やCG作業、台詞、効果音、音楽、モンタージュ等のあり方について、さまざまな可能性を提示することができるような十分な能力を身につける。

(大学院映像研究科メディア映像専攻(M))

授業科目名	講義等の内容
メディアデザイン 特別演習	視覚情報の理解手段あるいは分析の手段として、メタ文法について研究してゆくための手法を演習を通して学ぶ。目に見えている視覚情報の背後にある構造化や抽象化に注目し、そこで発見された構造をメディアとしてデザインし、作品として制作する。また、インタラクティブ(相互作用)な環境でのインターフェイスなども実作することによってこれを検証することからはじめる。
メディアアート特別演習	メディアを通して表現することをテーマとするのではなく、メディアを作り出すことによって伝える意味内容が変化してしまうことに注目し、意味内容(メタファや世界観)をメディアテクノロジーで表象することの優位性について演習を通して学ぶ。実際には、インタラクティブ(相互作用)な環境(インターフェイス)を実現することによって生まれるさまざまな手法を、実際の作品制作を通して検証することからはじめる。

コンテンツウェア開発 特別演習	コンテンツウェアとはコンテンツに関わる環境を整備するコンピュータソフトウェアをさす。近年のウェブ環境などでは、常時更新されるコンテンツを管理するためにフレームワークを用いることが一般的になっている。しかし単にこれらが提供するフォーマットを利用するだけでは、既存の表現を越えたコンテンツを制作することは難しい。そこでこれまで情報工学分野において開発されてきた知的情報処理、創造的設計支援等の知見を背景に、コンテンツの構造にまで立ち入って、ある構造を持つコンテンツをインタラクションを含めてどう表現すればよいかという観点から分析を行う。その分析に基づき、新しい表現方法やインタフェース機能を持つコンテンツウェアを開発する。
メディア文化財研究 特別演習	物語がデジタルメディアによって記録保持されることを前提に、その可能性を演習を通して検証する。例えば、「物語」を広帯域配信することを目的として、話者の発話行為を研究し、ビデオ映像の編集などの作業がもっている物語性の問題を考えるための作品制作を行ういながら、可能性と限界について検証する。
展示計画論	作品制作と展示のプランについて学ぶ科目である。過去の優れた展覧会や空間演出あるいはコンテンツ配信等について、資料を通した研究手法を学ぶ。同時に、過去の作品の持つ主題や表現手法について学び、自作の展示計画に生かしてゆく。
展示構成論	作品制作と展示の実現について学ぶ科目である。先行するさまざまな作品の実際の構成理論や技術を学びつつ、それが実作とどう連動することで映像の見方や作り方を変えてきたかについて研究し、自作の展示構成に生かしてゆく。
作品メディア構造論	デジタルメディア技術を用いて作品の構造的な理解の手法について学ぶ。回路図や工学的機構、光学技術や情報技術について知り、作品の背後にあるメディアの構造やアルゴリズムを知る。さまざまなサンプルに触れながら、構造的な理解手法を理解させる。
作品メディア芸術史	ニューメディア、マルチメディアと呼ばれてきた新規のメディア技術の進化に対して、歴史的な視点を提供する講義である。現代のメディア技術を芸術史とのコントラストの中で振り返り、各個人の作品制作における視点と立場を提供する。
コンテンツ創造AゼミナールⅠ (メディアデザイン)	映像コンテンツの企画立案から、制作台本や絵コンテ、実際の制作までのすべてのプロセスをゼミナールとして研究する。企画立案に主眼を置き、映像シーケンスと音楽との関係、キャラクター設定、プロットの手法などを、制作台本や絵コンテを各自が執筆してゆく。さらには、インタラクティブなコンテンツ等の制作手法についてさまざまな実験を行い、多様な表現手法を身につける。
コンテンツ創造AゼミナールⅡ (メディアデザイン)	映像コンテンツのあらゆるプロセスをゼミナールとして研究する。映像コンテンツの制作全体のあり方に注目し、企画立案とマーケティングとの相互関係、制作のプロセスにあって生じるさまざまなボトルネックを検討しつつ、より良い映像コンテンツをどのように完成させればいいのか、どのように実際の撮影現場でよりスムーズな演出をしてゆけばいいのか、完成した作品をどのように公開して行けばいいのか、といった点について実際の制作を通して研究する。コンテンツ科学領域との共同制作の可能性もある。
コンテンツ創造BゼミナールⅠ (メディアアート)	コンテンツの創造とメディア技術の融合するところに生まれる表現の可能性についてゼミナールを通して研究する。メディアアート作品の企画立案から、構想の制作、必要となる要素技術の開発までのすべてのプロセスを研究しメディアアートの手法で実現した作品を、メディアコンテンツとして流通させるための技術移転やコンテンツ転用の方法についても研究する。
コンテンツ創造BゼミナールⅡ (メディアアート)	メディアアート作品の制作により特化したゼミナールである。表現しようとする意味内容やアイデアを、メディア技術を使ってどのように実現させたらよいか研究し、必要とする基盤技術や方法論の特性を芸術表現の観点で解釈し、メディア芸術をパッケージメディア、展示、ネットワークなどの異なった条件下で成立させる手法や制作技術全般をインタラクティブという視点から研究する。コンテンツ科学領域との共同制作の可能性もある。

コンテンツ科学AゼミナールⅠ (コンテンツウェア開発)	デジタルメディア・コンテンツの環境を科学するゼミナールである。このゼミナールでは具体的にコンピュータソフトウェアを設計制作し、メディア環境の変化による人間の創造性の変化を研究する。そのため情報工学分野における知的情報処理、知識表現、創造的設計支援環境等の知見を縦横に学び、これを基礎としてデジタルメディアコンテンツの環境を研究開発する。特にネットワークを対象とした映像メディアのあり方を考える時、これまでのパッケージ化されたコンテンツ以外のコンテンツが想定されるために、コンテンツ創造ゼミナールとも密接な関係を持った共同制作をおこなって行く。
コンテンツ科学AゼミナールⅡ (コンテンツウェア開発)	デジタルメディア・コンテンツの環境を科学するゼミナールである。このゼミナールでは具体的にコンピュータソフトウェアを設計制作し、これまでにない映像コンテンツが生まれる環境を研究する。そのため情報工学分野における知的情報処理、知識表現、創造的設計支援環境等の知見を縦横に学び、これを基礎として映像コンテンツそのものの未来形を模索する。特にネットワーク経由で、作り手と受け手をつなぐようなメディア環境を考える時には、パッシブ(受動的)な環境ではなく、インタラクティブ(相互作用的)な環境についての十分な研究が必要であり、本ゼミナールでは背景となるソフトウェアが構築するメディアの仕組みに特化し、実際にはコンテンツ創造ゼミナールと共同して実際のメディアを設計制作してゆく。
コンテンツ科学BゼミナールⅠ (メディア文化財研究)	新規なメディアによって生まれている新しい文化財の可能性について研究するゼミナールである。例えば、これまでの画像やテキストに加えて、映像やインタラクティブな機能をもったアーカイブなどが考えられる。インターネットを使って配信するインタビューアーカイブなどが考えられる。メディアの一側面である記録の手法の更新とそれによって生まれる価値の関係性を電子メディアばかりではなく、紙メディアや映像(フィルム等)メディアをも扱い相対化すること研究し、芸術文化の価値観について新しい視点を導入するための研究を行う。
コンテンツ科学BゼミナールⅡ (メディア文化財研究)	データベースをアーカイブとして利用価値のあるものにしてゆくためには、さまざまな研究が必要であり、本ゼミナールでは、アーカイブの実作を通して研究を進めてゆく。メディアアートの作品制作にもデータベースはなくてはならない物であり、データベースの技法的な意味の構成とそれをユーザーインターフェイスを介して取り出させるためのさまざまな実験を作品を通して制作研究する。コンテンツ創造領域との共同制作の可能性もある。また、日本映画研究で有数の基礎資料である牧野守文庫を購入し、映画専攻と共同研究を行う計画である。
*コンテンツ産業A(ジャーナリズムと知的財産)	半期のプロジェクト実現型のゼミナールである。出版や放送分野、マスコミ等ジャーナリズムに関連する分野および、知的財産、著作権等の問題について現役の弁護士等の人材を招いて、デジタルメディア分野における現状について学ぶ。
*コンテンツ産業B(技術移転プロデュース)	半期のプロジェクト実現型のゼミナールである。撮影技術、通信技術、家電製品メーカー等の主に技術系と連携し、実現直前の製品技術や未使用の技術の移転を受けて、デジタルメディア・コンテンツの可能性を研究する。

(大学院映像研究科アニメーション専攻(M)) *平成20年4月設置(参考)

授業科目名	講義等の内容
立体アニメーション表現特別演習	粘土等の材料でつくられた対象物(人形やオブジェなど)を能動的に動かすとなる立体アニメーションにとって、観察と描写との関係を実感することがきわめて重要である。そこで本演習では、入学者全員が1年次に受講する演習であることを考慮して、身の回りにあるモノの「動き」について観察と描写を繰り返しながら、絵コンテでストーリーを構想し短編の立体アニメーションを実制作する。表現媒体としては粘土等を用いた人形を製作し、ある状況を設定して身体的な所作や振る舞いについてデジタル技術(デジタル撮影やCGなど)を用いて検証しながら、対象に「動き」を与えるための動機と背景について明確にしていく。

アニメーション作品研究特別演習	アニメーション作家の世界観は物語によって構築され、まず脚本という形式によって表現される。そこで本演習では、入学者全員が1年次に受講する演習であることを考慮して、革新的な技法や個性的な画風をもつ作品を重点的に取り上げ、各技法の発生と発展、文化的時代背景を歴史的に作品研究を各自が行うことのできるような方法論について演習を行う。具体的には、他の物語表現形式である劇映画、小説あるいは漫画との比較研究によって検証し、アニメーションにおける物語形成の独自性を考察する。
平面アニメーション表現特別演習	実写映像は1秒間を24コマに分割して定着させる「動きの再現」であるのに対し、平面アニメーション映像はある状況を1コマ1コマ描写した絵を物語として結実させる表現である。その物語は状況に対する鋭い観察と、その本質に迫る絵画的な表現力によって支えられている。本演習では、入学者全員が1年次に受講する演習であることを考慮して、この表現の原点である「描く」という行為と「動き」との相互作用によって物語性や生命観を表現する方法論について、デジタル技術(デジタル撮影やCGなど)を適材適所に動員し実制作を通じて検証する。
企画開発特別演習	アニメーション作品を製作する前段階としての企画構成は、きわめて重要なプロセスである。本演習では、作品の流通の目的に従って、世界観やキャラクター設定、物語展開などを討議によって構想する。現在コンテンツ市場で一般化しているいくつかの流通形態をケーススタディするとともに、構想した企画の独自性や市場における優位性などを分析・検証する作業も行なう。
アニメーション構想設計論	アニメーションの物語世界における演出プランを構築して行く上でのさまざまな必要条件を実践的に考察する。魅力的なキャラクター創造および表現に必要なとされる要素を検証するとともに、作品世界の諸相をとらえ全体の枠組を想起させる「世界観」、さらにそこから作品が派生していく契機ともなる構想力について論じる。
サウンドデザイン論	道具や方法が表現に対して様々な影響を与えることは音楽の場合にもあてはまる事実であり、文明論やメディア論的な視点から、音楽の歴史の中に数多くの前例を指摘することができる。19世紀後半以降の西洋音楽の急激な変容が、同時に従来の作曲・演奏・聴取という枠組みから溢れ出てゆく「音楽・音」(サウンド)の実験的な営みでもあったことを論考していく。
アニメーション史	アメリカの完成点であるディズニースタイルはいまなお世界的な規範であり続けており、ピクサーに代表される3DCGの分野にまでその影響は及んでいる。一方で日本の商業アニメーションも「ANIME」として世界からの注目を集めつつある。それぞれの固有のスタイルがいかにして成立し発展したかを歴史的に概観する。
漫画表現論	戦後漫画の基本的な「方法」としての映像的手法、内面の描写法、記号論的リアリズム表現の3つが政治や社会状況における形成過程を実証的に検証する。「方法を歴史的に理解する」視点を獲得し、これらの方法が戦時下に成立したことの意味について考え、各ジャンルの歴史性、政治性を考察する。
企画構成ゼミナールⅠ	企画構成および制作工程管理、作品を企画しシナリオを作成する際に必要となるスキル(発想、調査・研究、文書化、プレゼンテーション)を、ディスカッションの繰り返しの中で創造的に検証する。特に企画立案と完成イメージの方法論を探求しつつ、劇場公開用フィルム、放送、DVDやインターネット等での二次流通など、多岐にわたるメディアについても具体的な事例研究を行う。
企画構成ゼミナールⅡ	アニメーションの映像構成に関する理論研究に基き、さまざまな映像メディア、映像作品を検証することによって、送り手の意図どおりの内容を受け手に伝達するための流通基盤について実践的に考察する。アニメーション表現の可能性ならびに映像構成理論と、物語性とをどう整合させて具体的な演出プランへと昇華させるかを、様々な作品を見ながら分析・検証していくとともに、実作品による実験的な展示や公開を行なう。
立体アニメーションゼミナールⅠ	立体アニメーションは、立体物(人形・造形物・自然物など)を扱って実際に1コマずつ撮影する映像表現である。本演習では各自作成したストーリーボードに沿って、基本的なキャラクター作りから背景、動きの設定、簡単な動画制作等を通して、アニメーション独特の表現を迫

	究する。様々な素材を用いたオブジェを作成し、撮影する実習を通して対象の操作と撮影技術との関係を探求する。
立体アニメーションゼミナールⅡ	アイデアをシナリオとして表し、具体的な絵コンテを描くという企画・演出作業を繰り返すことによって、各自の表現スタイルを確立する。特に、立体アニメーションにとって重要となるオブジェ製作と撮影技術との方法論を各自先鋭化し獲得することをめざす。フィルムや放送のみならずインターネット等さまざまな映像メディアとの親和性を考慮したキャラクター創造と現代的表現を開発研究し、修士制作に向けた技術と表現力の向上を図る。
物語構成ゼミナールⅠ	アニメーション作家によって考えられた企画は、現実には自己完結されるものではなく、プロデューサーおよびスタッフとのシナリオやサウンド・プラン、市場との整合性など細部にわたる検討が加えられる。本演習では映画の脚本研究で培われた物語分析・シナリオ評価の手法による比較検証を試みながら、アニメーション作品を実証的に検証することを通じて物語構造の分析を試みる。
物語構成ゼミナールⅡ	映画は運動する具体的対象の視覚像の記録と再現であるのに対して、アニメーションは運動する視覚像の創造であるというアニメーションが固有にもっている物語創造の基礎を、映画史の立場から比較研究するとともに、その結果を具体的に絵コンテやシナリオに反映させていくためのライティングの方法論を実証的に考察し、その方法論に基づいた分析を行う。
平面アニメーションゼミナールⅠ	絵巻物、絵の動く仕掛けおもちゃ、映画の発明など、絵に動きを与え映像表現として発展してきた歴史をたどり、描画の技術や技法といった観点から世界観やキャラクター設定、物語展開などをゼミナール形式によって検証していく。また、各自オリジナルに作成したストーリーボードや絵コンテを制作し、それをもとにしたキャラクター創造から背景、動きの設定、撮影技術の修得等の一連の作業プロセスを経ながら、アニメーション独特の表現を追究する。
平面アニメーションゼミナールⅡ	ここまで修得してきた知識、技術を基にして、オリジナルのシナリオ、具体的な絵コンテを描くという企画・演出作業を繰り返し、各自の表現スタイルを確立することを目指す。さらには、台詞や効果音、音楽あるいはCGなどが表現そのものをどのように変容させるかという実験を作品制作を通じて行いながら、キャラクター創造と現代的表現を開発研究し、修士制作に向けた技術と表現力の向上を図る。

★選択必修科目Bは、各専攻生が履修できる。(修了要件単位とできる科目は、教育課程表のとおり。)

授業科目名	講義等の内容
物語理論	世界の伝説や昔話を研究したウラジミール・プロップは、物語を31の原形に分類した。また、リチャード・ドーキンスは、物語を社会の文化的遺伝子(ミーム)を運ぶ媒体としてとらえ、人間の生存に欠かせないものであるとしている。物語は、なぜ生まれ、どのように機能し、どうやって伝えられ、どのように変化してきたのかについて論じてゆく。
パフォーミング・アーツ論	映画や演劇にとっても、身体は表現の根本となる重要な要素である。また、身体を使った表現の歴史は、人類の歴史と等しいと言っても過言ではない。しかし、こうした表現行為をひとつの芸術として成立させているものは、いったいなんだろうか？演劇や映画など、現代の身体表現から、その起源を遡り、こうした表現行為の根元を探る。
映画音楽論	多くの作曲家が映画のための音楽を手掛けてはいるが、映画音楽は特殊な進化を遂げた音楽分野である。音楽の歴史的な進化を背景としながら、映像という視覚を対象とした芸術と音楽という聴覚を対象とした芸術の融合のあり方について、さまざまな事例を紹介しながら考察を加えて行く。
写真史・写真論	写真術は19世紀末に画像定着技術として開発され、さまざまな技術革新とともに今日の映像メディアとして成熟してきた。本講義では、メディアとしての写真を技術の成熟度を検証しながら、近現代美術史の中に位置づけ、映像文化との多面的関係を探って行く。このような写真の歴史について、技術史的側面と同時に、その社会的な受容の変遷を学び、映像芸術の分野に先鞭をつけてきた写真芸術が示してきた可能性とその限界について、論じて行く。

演劇論	多くの演出家が映画のための演出を手掛けてはいるが、映画の演出は特殊な進化を遂げた分野である。映画という視覚を対象とした芸術と演劇という身体を対象とした芸術の融合のあり方について、ポール・レオトーの演劇論、ヌーヴェルヴァーグの映画論などさまざまな歴史的な事例を検証しながら考察を加えて行く。
デジタル・アーツ論	文化史や美術史あるいは関連諸科学が得てきた知見や方法論などを参照にしながら、メディア芸術がもっている核心的な「新しさ」と「おもしろさ」の発見と学習について考察する。写真、ビデオ、コンピュータ、ネットワークなどさまざまなメディアがもっている技術の特性を最大限引き出ししながら、「人間という存在とは何か?」という普遍的な問いを導いていく芸術様式の方法論と諸問題を探究する。
現代芸術論	現代芸術が背負っている核心的なテーマのひとつである、主体性のありかたとそこからアドホックに生じる他者との関係性の探求を、現代芸術のさまざまな作品を紹介しながら考察する。また、ミニマルアートにおける「反復と差異」あるいはアプロプリエーションやシミュレーションリズムといった現代芸術のジャンルをメディア論の立場から検証し、複製芸術が社会において投げかけている諸問題について整理し探究する。

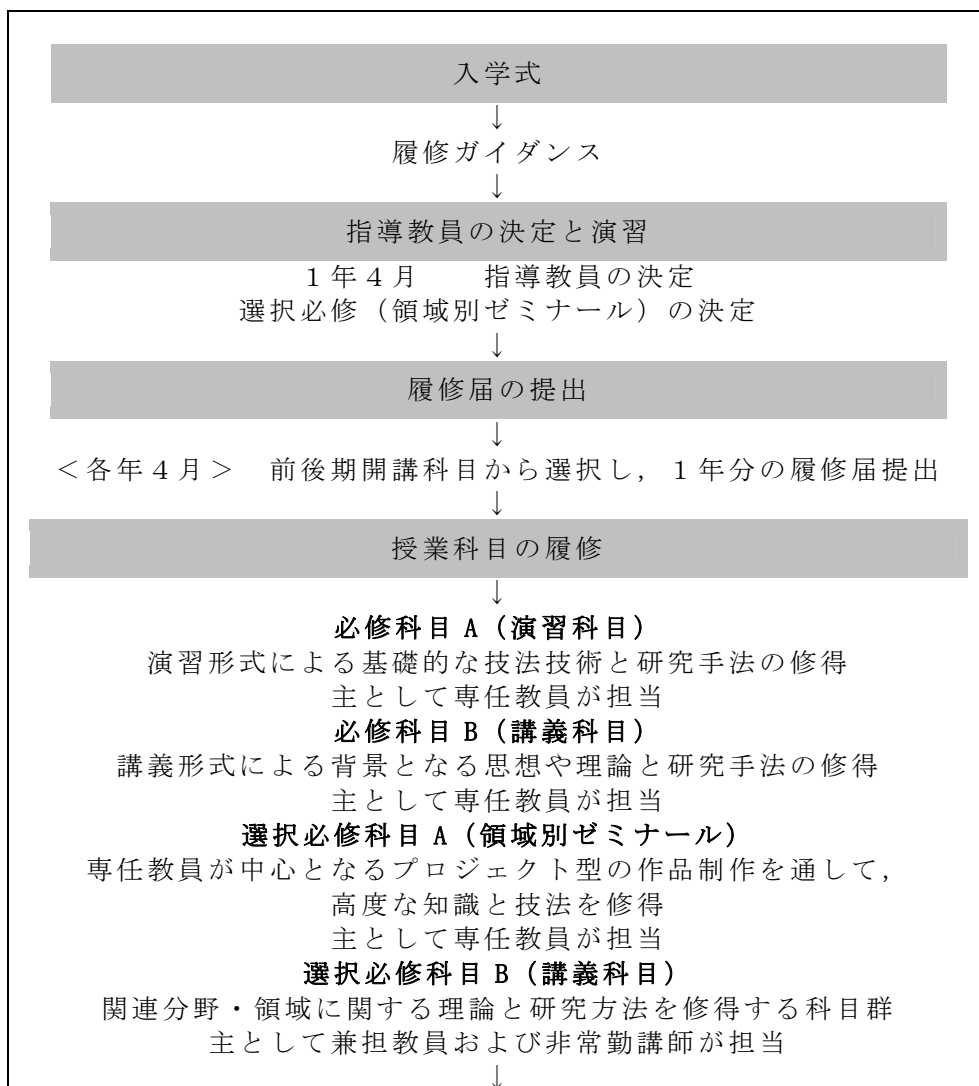
(大学院映像研究科博士(後期)課程映像メディア学専攻)

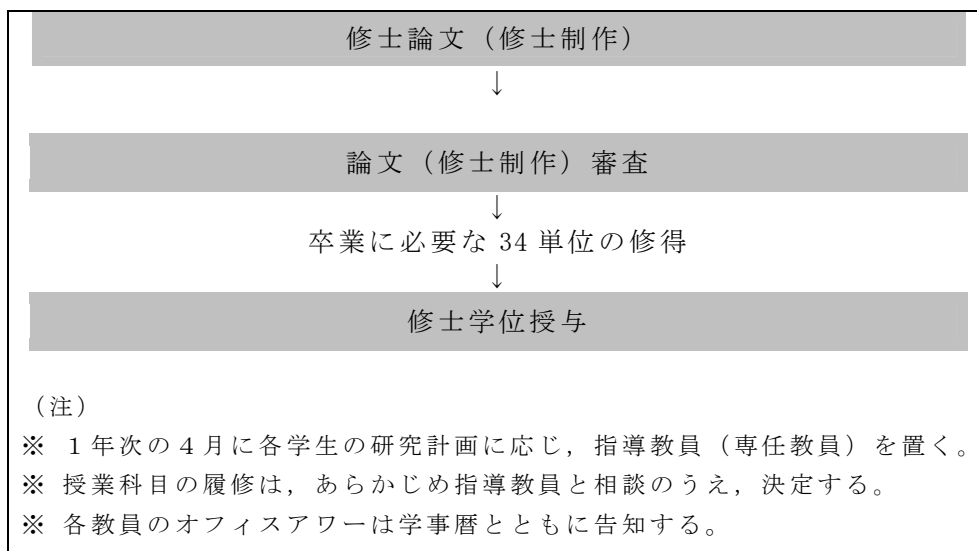
授業科目名	講義等の内容
映像メディア学 特別講義	「映像メディア学」について講義する。まず、映像メディア学の背景となっている「メディア学(メディアロジー)」や「メディア論」について、「文化研究」の立場から講義する。さらに映像メディアを用いた「ものづくり研究」をめざす映像メディア学の体系化に向けて、メディア論、メディアアート、映画史・映画論、映像映画教育等に関する理論的なアプローチについて講義を行う。 (桂英史／4回) 「映像メディア学のためのメディア研究(全4回)」 映像メディア学の背景となっている「メディア学(メディアロジー)」や「メディア論」について、「文化研究」の立場から講義する。 メディア研究の観点からアプローチする領域横断的な研究等を概説するとともに、メディア表現に不可欠な要素技術やその論点、研究方法、評価のあり方などについて講じる。 1) メディア研究の歴史 2) メディア研究に関する論点および理論 3) メディア研究に関する新動向 4) メディア表現の潮流と理論的枠組み (藤幡正樹／4回) 「メディアアートと映像メディア学(全4回)」 メディア技術の特性を理解するための理論研究や、メディア技術を用いた構想や着想を作品化していく上で、構想から制作、展示に至るまでのプロセスを研究し、どのように技術が作品化されていくかという根源的な「制作論」を、メディアアートというアプローチを通して講じる。 1) 作り手やプロデュースという立場からの作品創造論について 2) 作り手の道具として映像メディア 3) 現代芸術の中のメディアアート 4) メディアアートが誘導する映像メディア学の理論化 (出口丈人／3回)「映画史・映画論と映像メディア学(全3回)」 映画史・映画論という観点からの「映画の文法」や「映像メディア受容」に関する理論研究とその研究を実現するために必要とされる固有のメディア表現のあり方について講じる。 1) 映画史・映画論とメディア研究 2) テレビをはじめとする「番組」概念と映画やビデオアートなどの「作品」概念の比較論 3) 映画ジャーナリズムと映画表現 4) メディアの違いによる映像受容の比較研究

	(堀越謙三／4回) 「メディアリテラシーと映画教育(全4回)」 映画・映像を中心とするメディアリテラシーの国際的な比較に基づく理論研究の動向や、映画教育をはじめとするメディアリテラシーに関する理論的なアプローチを講じる。 1) 映画教育とメディアリテラシー 2) メディアリテラシーがもたらすメディア教育振興の方策に関する研究 3) 映画教育の国際的な比較 4) 映画教育から見たメディアリテラシーの国際的な比較
映像メディア 特別研究Ⅰ	「映像メディア特別研究Ⅰ」では、主に先行研究や技術動向の調査を含む研究方法の指導を行う。国際的な視野をもちつつ、映像メディアに関する理論研究を行うために、主に先行研究や技術動向の調査に重きを置いた研究方法について指導する。具体的には、どのように技術がメディアアートや劇場映画として作品化されていくかという「制作論」の研究、エンジニアリングプロセス研究という観点からの「インタラクティビティ」や「インタフェース」に関する理論研究、劇場映画作品を成立させる撮影技術の理論研究、「アーカイヴ」や「コミュニティウェア」に関する理論研究、メディアデザインという、メディア表現や映像論という観点からの「メディアデザイン」や「映像プログラム開発」に関する理論研究などをテーマとし、文献調査やテーマ開発などの文献調査および実地調査(対面調査を含む)の方法に関する指導を行いながら、論文執筆に向けたテーマ開発を行う。この文献調査とテーマ開発を通じて、映像メディア学理論の体系化とそれを実現するための調査研究方法について修得し、独創性のある研究テーマを開発できる資質の向上をめざす。
映像メディア 特別研究Ⅱ	「映像メディア特別研究Ⅱ」では、映像メディア特別研究Ⅰでの文献調査やテーマ開発などを深化させ、自らの研究方法の独創性と先進性について「つくる」という立場から分析と評価を行うことについて指導を行う。具体的には、技術を通して作品がどのように具体化されていくかという「制作論」のプロセス研究に関する分析方法と評価方法、「インタラクティビティ」や「インタフェース」に関するエンジニアリングプロセス研究の分析方法と評価方法、劇場映画作品を成立させる物語性と撮影技術との相関に関する理論研究と評価方法、「アーカイヴ」や「コミュニティウェア」に関する理論研究の分析方法と評価方法、映画や映像のメディア表現の違いによる理論研究の分析方法と評価方法や、映画史・映画論的なアプローチを重視した映画表現をはじめとする受容者研究の分析方法と評価方法、「メディアデザイン」や「映像プログラム開発」に関する理論研究のメディア表現や映像論という観点からの分析方法と評価方法、映画・映像を中心とするメディアリテラシーの国際的な比較に基づく理論研究や映画産業をはじめとする市場動向研究などに関する研究の分析方法と評価方法などをテーマとし、主に各人の先行研究とテーマ開発に基づき、分析と評価の方法に関する指導を行いながら、論文執筆に向けたテーマを「博士論文構想」として具体化する。この構想を具体化するプロセスにあって、映像メディア学理論の体系化とそれを実現するための分析と評価の方法について修得し、独創性のあるテーマをより具体的な論考として構想できる資質の向上をめざす。
映像メディア 特別演習Ⅰ	「映像メディア特別演習Ⅰ」では、映像メディアを用いた研究プロジェクトや作品制作などを通じた「つくる」という経験と知見を構想し実践する演習を行う。一年次に履修するⅠでは主に作品制作や研究プロジェクトを企画することについて指導を行う。具体的には、国際的な評価が得られるメディアアート作品や独自性の高い作品を制作するための固有のメディア表現、歴史性と同時代性を融合した質の高い作品を制作するための固有の映画表現、シナリオの物語構造と撮影技術についての研究、インターネットや都市デザイン、現代芸術などにおけるコモンズの比較研究に関する理論スキームの研究、メディアの違いによる映像受容の比較研究、映像における効果(CG、台詞、効果音、音楽、モンタージュなど)と映像受容の認知論的研究、メディアリテラシーがもたらすメディア教育振興の方策に関する研究などをテーマとし、学会発表や国際展出演などを前提とした研究プロジェ

	クトを企画する。この企画のプロセスにあつて、「つくる」という経験と知見を重視した映像メディア学理論の体系化を構想できる資質の向上をめざす。
映像メディア 特別演習Ⅱ	「映像メディア特別演習Ⅱ」では、一年次に履修する「映像メディア特別演習Ⅰ」で企画した作品構想や研究プロジェクトの計画を深化させ、履修者自らの企画を実践しながら理論化のために必要とされる評価方法について演習を行う。具体的には、国際的な評価が得られるメディアアート作品や独自性の高い作品を制作するための固有のメディア表現、歴史性と同時代性を融合した質の高い作品を制作するための固有の映画表現、シナリオの物語構造と撮影技術についての研究、インターネットや都市デザイン、現代芸術などにおけるコモンの比較研究に関する理論スキームの研究、メディアの違いによる映像受容の比較研究、映像における効果（CG、台詞、効果音、音楽、モニタージュなど）と映像受容の認知論的研究、メディアリテラシーがもたらすメディア教育振興の方策に関する研究などをテーマとし、学会発表や国際展出展などを前提とした研究プロジェクトを企画する。この演習を通じて、「つくる」という経験と知見を映像メディア学の研究成果として体系化するために必要とされる資質の向上をはかる。
特別研究指導	博士課程における文献調査の方法、分析手法、評価方法について各教員による指導を主に行う。授業科目とは異なり、基本的にマンツーマン形式の対面指導を原則とする。

資料5-8: 修士課程の入学から修了まで(メディア映像専攻を例として)





博士後期課程にあっては，映像メディアをめぐり「つくる」という知見と経験を重視しながら，新たな「実践的な知」を構築していくという観点から，教育課程が編成されている。その研究指導においては，修士課程同様に各学生の志向や技量に応じた，個別指導を行う。また，国内外の学会における発表，国内外の展覧会等への出品，国内外の関連機関でのインターンシップ，アーティストレジデンス等を重視し，早い時期から研究者としての国際的なキャリアを積むことを推進した内容としている。そのため，すべての科目が必須科目として体系化されている（資料 5－6（P.5-9），資料 5－7（P.5-16～5-18）及び下記、資料 5－9 参照）。

資料 5－9：博士後期課程履修モデル

映像リテラシー系教育者志望

D1 博士後期課程 1 年次 (6 単位)	D2 博士後期課程 2 年次 (4 単位)	博士後期課程 3 年次
映像メディア学特別講義の受講 (2 単位)	映像メディア特別演習Ⅱの受講 (2 単位)	博士論文執筆
映像メディア特別演習Ⅰの受講 (2 単位)	映像メディア特別研究Ⅱの受講 (2 単位)	
映像メディア特別研究Ⅰの受講 (2 単位)	↓ 10 単位取得後：学位論文構想発表会	
国内外の関連機関でのインターンシップ	国内外の関連機関でのインターンシップ	

★履修者は、1, 2 年次に特別講義、特別演習、特別研究を履修し必要な単位を取得しつつ、主査の指導のもと、国内においては、せんだいメディアテーク、山口情報芸術センター等、海外においては、ニューヨーク近代美術館やコロンビア大学等への短期のインターンシップ経験を経て、独自の視点を持った理論と実践を持って、博士論文の構想を発表し、博士候補者としての審査を受けた後、博士論文の執筆に入る。

★また、課程修了後想定される進路として、大学、大学院、専門学校等の映像コンテンツ系教育機関教員、映像メディア関連企業幹部候補、映画会社、出版社、広告代理店、公共文化施設映像学芸員、文化財団、NPO、指定管理者等、シネマテーク運営等が想定される。

理論系工学系研究者志望

D1 博士後期課程 1 年次 (6 単位)	D2 博士後期課程 2 年次 (4 単位)	博士後期課程 3 年次
映像メディア学特別講義の受講 (2 単位)	映像メディア特別演習Ⅱの受講 (2 単位)	博士論文執筆
映像メディア特別演習Ⅰの受講 (2 単位)	映像メディア特別研究Ⅱの受講 (2 単位)	
映像メディア特別研究Ⅰの受講 (2 単位)	↓ 10 単位取得後：学位論文構想発表会	
国内外の学会論文発表準備	国内外の学会論文発表	国内外の学会論文発表

観 点
学 生
や 社
会 会 会
の 要
の 請
の 対
応

(観 点
に 係
る 状
況)

本
研 究
科
は、「教
育 目
的
と 特
徴」

★履修者は、1, 2 年次に特別講義、特別演習、特別研究を履修し必要な単位を取得しつつ、主査の指導のもと、学会等で論文を発表しつつ、修士課程と連動したプロジェクト等を実現し、理論を実践的に検証した上で、博士論文の構想を発表し、博士候補者としての審査を受けた後、博士論文の執筆に入る。

★また、課程修了後想定される進路として、大学、大学院、専門学校等の映像コンテンツ系教育機関教員、講師、映像メディア関連企業幹部候補、映画会社、出版社、広告代理店、国立フィルムセンター等の公共文化施設映像学芸員、文化財団、NPO、指定管理者、ソフトハウス独立起業等が想定される。

「で言及したとおり、強い社会的要請に対応するために新設されたものである。設置申請に当たっては、特に、「映像文化都市」を目指して各種施策を推進している横浜市と覚書を交わして、教育施設の整備面に対する全面的な協力を受けているほか、関連産業の(株)

電通、ソニー(株)から設置を求める要望書が出されている(別添資料 5-①(P. 5-35~38)参照)。

また、本研究科設置前の平成 16 年時点における映像分野関連の教育を行う学科を有する大学は 26、それに対し関連専攻を有する大学院は 6 (H17 年本学調べ)であった。

この状況は、学部卒業後にさらに高度な専門知識・技術の修得を希望する学生のニーズが潜在的に高いことを示しており、本研究科の設置は、そうしたニーズにこたえるものであった。また、映像分野の産業と教育の発展は、これまで産業が先行してきており、映像分野ですでに実務についている者であっても、体系的な専門教育を受けていないことが多いため、本研究科の設置に当たっては、実務経験のある社会人が高度な専門知識を学びなおしたいというニーズがあると想定されていた。

分析項目Ⅰ及び前観点において示した本研究科の教育課程や教員構成は、これらの要請やニーズを勘案して構築したものである。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

本研究科の設置に当たっては、社会的要請や学生のニーズを十分に勘案して教育課程や教員構成を構築しており、本研究科の入学定員に対する入学試験志願者数(大学情報データベース基礎資料 B2:「3-4 入試状況」参照。平成 19 年度志願倍率 修士課程約 2.5 倍、博士後期課程約 5.7 倍)や実際の入学者に社会人が相当数含まれていること(大学情報データベース基礎資料 B2:「3-1 学生(年次別)」参照。平成 19 年在学生において、修士課程 47 人中 18 人、博士後期課程 8 人中 1 人)などの状況に、設置時の想定が誤りでなかったことが証明されていると考える。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

「観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」及び「観点 教育課程の編成」で既述のとおり、本研究科の修士課程では、実制作が教育内容の根幹となっており、演習科目では、少人数のグループによる実践的な制作を通じた指導方法が用いられている。

本研究科では、時間割及び年間のスケジュールを編成するにあたって、知識と技術の双方をより効率的に修得できるようにするため、講義科目と演習科目のバランスや、特定の課題について実制作を行う演習科目については集中的に行う方が効率的であり、特に映画制作を行う場合、一週単位に分断して行うことが困難であることを勘案して、下記の資料5-8にもあるように、演習科目によっては、比較的長い期間での集中授業の形式(週5日×3週間～2か月)で実施することになっている。

課題の決定、集中授業期間の調整、指導方法の見直し等については、専攻会議で行っている。期間の調整については、映画専攻の17年度での経験をふまえ、18年度からはより現実的、効率的になるように配慮を行った。

資料5-8 修士課程メディア映像専攻 年間スケジュール(例 H20 年度)

4/11(金)～17(木) M1オリエンテーション&スタジオ演習

4/18(金)～5/9(金) メディアアート特別演習(藤幡)

5/12(月)～5/30(金) メディア文化財特別演習(桂)

6/2(月)～6/20(金) メディアデザイン特別演習(佐藤)

6/23(月)～7/11(金) コンテンツウェア開発特別演習(桐山)

7/14(月) 研究室プレゼンテーション(博士を含む全学年を対象とした後期特別演習履修のためのガイダンス)

7/15(火)～25(金) M1面談期間(研究室選択のためのオフィスアワー)

7/25(金) M2中間審査会 M1講評会

7/26(土)～29(火) OPEN STUDIO

講義科目(10:30-12:00)

火:前期:メディア作品構造論(藤幡) 後期:メディア芸術史【桂】

水:メディア表現技法(木村)

D1 映像メディア学特別講義(藤幡, 桂, 出口, 堀越)

金:展示構成論(佐藤, 桐山)

※後期の演習科目は各研究室単位で行われる。

なお、課題として制作した作品を学内外で公開することとしており、横浜市主催の映像文化イベント EIZONE 等などへの参加を含めて年間のスケジュールを構成している。また、その準備、実施運営についても学生を中心として行っており、「つくる」だけでなく「みせる」こと、つまり展示設計や展示構成あるいは広報活動を通じて社会との接点を持つことと、実務能力を養うことも重視している(「分析項目Ⅳ 学業の成果」の「観点 学生が身に付けた学力や資質・能力」の資料5-10(P.5-24～5-25)参照)。

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

本研究科は、基礎となる学部がなく、大学本部のある東京都台東区とは別地の横浜市に所在し、本研究科専用の施設を有している。前述の覚書に記載のとおり、横浜市より施設提供を受けて、横浜校地(馬車道校舎及び新港校舎)を整備している。横浜校地では、教室

以外に、撮影や編集等を可能とするスタジオや編集室、工作室および必要な機器・機材を備えており、さらに制作した作品を上映する視聴覚設備も整えている(資料5-9参照。なお、コンピュータ、撮影カメラ、編集機、映写機などの教育研究用の機器・機材の所有点数は、平成19年4月20日現在605点)。

資料5-9 横浜校地施設概要

馬車道校舎(825 m ²)の設備概要	新港校舎(4851 m ²)の設備概要
1) 教室×3	1) 撮影スタジオ(大 600 m ²)
2) 教員室(小)1, (大)1	2) 撮影スタジオ(小 300 m ²)
3) 大視聴覚室	3) ギャラリー
4) 大映写室	4) 工作室
5) 小視聴覚室	5) 写真スタジオ
6) 小映写室	6) ブルーバックスタジオ
7) HD編集室	7) 音響スタジオ
8) AVID 編集室×2	8) VR スタジオ
9) 編集室×4	9) ポンプ室
10) 編集ブース	10) サーバー室
11) MA室	11) 共同研究室×4
12) MA室+録音 BS 室	12) ゼミ室×4
13) 製作室	13) 教員室

これらの施設・設備は、自主的な制作活動時においても使用することができる。

また、教育研究用資料として、図書 836 冊、学術雑誌 13 種、視聴覚資料 1000 点(平成19年4月20日現在、附属図書館の大学全体での共用分を除く)を用意している。図書等については、横浜校地内のものだけでは、充分とはいえないため、本学の附属図書館(所在地:東京都台東区)の間でデリバリーサービスを行って、学生の必要に応えられる態勢としている。

なお、平成20年には、アニメーション専攻の新設に伴って、さらに万国橋校舎(793 m²)を整備し、施設の充実が一層図られることになっている。

また、本研究科では、前観点までに既述してきたとおり、少人数のグループによる実践的な制作を通じた指導を行っているため、必然的に学生・教員間のコミュニケーションが密となる。また、本研究科での教育は、単に知識を理解させることに終わるものではなく、「つくる」こと、つまり実際の多様な場合にあって、応用・実践できて始めて完結する。そのため、課題の制作では、常に主体的に考えることが学生に要求される。ゆえに、制作を行う中で出てきた問題を、学生が講義科目の際や授業時間外に質問として提起してくるということも珍しくない。

本研究科では、こうした学生・教員間の密なやりとりにより、学生の志向や技量に応じたフォローを行い、学生が自ら主体的に学ぶように促すこととしている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

年間スケジュールを作成し、集中授業形式で行う演習科目の実施時期を調整することにより、制作から公開までを総合的に考えた教育方法を取っていること、また、少人数のグループによる実践的な制作を通じた指導等とおして醸成された学生・教員間の緊密なコミュニケーションが、学生自らが問題を発見し、解決していくことを可能にしていることは、本研究科の教育目的にかなうものであると考える。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

本研究科では、教育研究成果を教育成果を展覧会、上映会、シンポジウムなどを通じて発表し、その実施運営についても学生主体で行っている(資料5-10参照)。

このような発表を通じて、外部の専門家からの批評や一般の映像文化を楽しむ人々からの声を聴くことは、教育成果つまり学生が身に付けた学力や資質・能力が、社会の期待に応えたものとなっているかを確認し、教育内容や指導方法を見直す際の参考にしている。また、学生が自らの能力の向上について考える場としての役割もある。

資料5-10 教育研究成果の発表(平成19年度分)

	展覧会等名	会場	会期	概要
1	東京芸術大学大学院映像研究科第1期生修了制作展	①横浜校地馬車道校舎 ②渋谷ユーロスペース	①H19.5.12～H19.5.13 ②H19.5.19～H19.6.1	17年4月に新設した映像研究科映画専攻の第1期修了生(19年3月修了)の修了制作6作品を上映。渋谷ユーロスペースの上映では、授業の課題として制作したオムニバス作品『新訳:今昔物語』も上映。 なお、修了制作6作品を収めた作品集DVDを平成19年10月に刊行した。
2	大学院映像研究科メディア映像専攻修了制作展『OS1』	横浜校地新港校舎	H20.1.18～H20.1.27	2006年4月にスタートしたメディア映像専攻一期生による修了制作展。学生主体で運営を行った。2年間の修士課程を通して、新しいメディアテクノロジーを用いた映像作品や、インスタレーション作品の制作、研究に取り組んだ成果を、新しいメディア形態や論文で表現し、発表した。15作品等を展示。
3	Open Theater 2007	横浜校地馬車道校舎	H19.7.28～H19.8.5	「ヨコハマ EIZONE」(横浜映像文化都市フェスティバル http://www.y-eizone.jp/) 共催企画。新作長編作品特集として、「四谷怪談」(池田千尋監督は、18年度修了制作作品「兎のダンス」にて横浜市長賞受賞)、田辺聖子の短編落語集を映画化した「ホームスイートホーム」、SFの歴史的名作をリメイクした「SOLARIS」を上映。また、映画専攻1期生修了制作作品全6作も上映。映画専攻2期生短編作品を全作16mmで計6作品上映。
4	OPEN STUDIO vol.4	横浜校地新港校舎	H19.7.30～H19.8.5	「ヨコハマ EIZONE」(横浜映像文化都市フェスティバル http://www.y-eizone.jp/) 共催企画。「OPEN STUDIO」は大学院映像研究科メディア映像専攻の校舎(studio)を会場とし、大学院生が取り組んだ制作・研究の成果を公開する企画展。H18年度のvol.1～vol.3を経て「OPEN STUDIO vol.4」では、修士2年の研究制作展示とともに、修士1年の課題制作展示を行い、映像・インスタレーションなどの作品を発表。
5	日韓学生共同制作映画上映	①東京国際フォーラム/ホールD ②馬車道校舎3階大視聴覚室	①H19.11.19 ②H19.11.23	本学大学院映像研究科と韓国映画アカデミーの学生たちが、「Love or Misunderstanding」というテーマで、制作した2本の作品「覗」「消えない」を上映。11/19の上映後は、日韓交流シンポジウム「アジア映画の未来」も開催した。
6	OPEN STUDIO vol.5	横浜校地新港校舎	H19.12.22～H19.12.24	「OPEN STUDIO vol.5」では、修士1年の研究制作展示を行い、映像・インスタレーションなどの作品を発表。

7	夕映え少女	渋谷ユーロスペース	H20.1.26 ～ H20.2.1	「伊豆の踊子」など知られる文豪・川端康成の初期短編集から女性を描いた4本を選び、映画専攻の二期生の監督4人(山田咲、瀬田なつき、吉田雄一郎、船曳真珠)がメガホンをとったオムニバス映画。映画専攻二期生全員が参加し、一般劇場公開をめざして制作した作品。4人の監督をはじめ、約30人の学科生がそれぞれの学ぶ領域で力を発揮。教授陣らのアドバイスも受けつつ、企画立案、資金調達から、脚本作り、撮影、ポストプロ、宣伝に至るまで、映画制作のほぼ全過程を学生の手によりおこなった。
8	第12回釜山国際映画祭	釜山 MegaBox	H19.10.8 H19.10.11	第12回釜山国際映画祭のコンペ部門「New Currents」に、映像研究科第1期生修了制作作品「A Bao A Qu」(監督・脚本:加藤直輝)がノミネートされ、公式上映された。(世界有数の規模を誇る同映画祭で唯一のコンペ部門「New Currents」は、アジアの有望な新人監督を発掘し、奨励することを目的としている。今回は、7カ国から11作品がノミネートされた。)
9	第10回 京都国際学生映画祭	ART COMPLEX1928	H19.11.23 ～ H19.11.25	映像研究科第1期生修了作品6作品が、京都国際学生映画祭(10年という歴史のある、国内外の学生映画・映像作品を観ることのできる数少ない映画祭)に招待作品として、3プログラムに分けて特別上映された。
10	ポケットフィルム・フェスティバル	①ボンビドゥー・センター ②横浜校地新港校舎	①H19.7月 ②H19.12.7～9	ポケットフィルム・フェスティバルは、2005年に「フォーラム・ド・イマージュ(Forum des images)」(パリ市立映像フォーラム)が世界に先駆けて開催し、2007年6月にはその3回目ボンビドゥー・センターで開催されている。本学からも藤幡教授がメディア映像専攻修士課程所属の学生4名とともに参加し、登場人物に携帯を持たせ「演じる人」が同時に「撮る人」にもなる斬新な表現が注目を浴びた。2007年12月には、このフェスティバルを世界規模で発展させるため、本研究科とフォーラム・ド・イマージュが提携し、ソフトバンク、シャープなどの企業からの協賛を得て新港校舎を会場として『ポケットフィルム・フェスティバル・イン・ジャパン』を開催した。教員とともに学生も開催の運営等に携わった。
11	大学院映像研究科映画専攻第二期生修了制作展(上映会)	①馬車道校舎 ②渋谷ユーロスペース	①H20.3.29～30 ②H20.5.24～30	映像研究科映画専攻の第二期修了生の修了制作6作品を上映した。

映画専攻では、修了までの2年間に専攻全体で、10編の短編課題、10本の短編作品、2編の長編課題、2本の長編作品(内1本はオムニバス作品)及び6本の修了作品(長編作品)を制作する。こうした課題の制作のなかで、個々の領域での、知識や技術の蓄積はもちろん、集団が共同で行う製作技術を学び、またその前提となる集団内のコミュニケーション能力を高めていく。

メディア映像では、個人あるいは数人での制作が中心であるが、各自の探求する表現形態を深めるだけでなく、社会との接点を自覚し、作品を社会化する能力を高めていく。

これらの能力醸成のために、本研究科内だけでなく、他大学や外部組織と協力して制作等を行うことも、指導の中に取り入れている。(特に、上記の資料5-10のうち、No.5の「日韓学生共同制作映画上映」やNo.10の「ポケットフィルム・フェスティバル」については、そうした意図を持って行った取組である。)

本研究科は、平成19年3月にはじめての修了生が出たばかりである。学位の取得状況、修了者の進路状況は、次頁の資料5-11、資料5-12及び資料5-13のとおりである。

資料5-11 学位の取得状況

			平成18年度 (平成19年3月) 学位取得者数	平成19年度 (平成20年3月) 学位取得者数
映画専攻	平成17年度入学者	32	30	1
	平成18年度入学者	32		28
メディア映像専攻	平成18年度入学者	16		14

資料5-12 修了者の進路状況

			就職者	進学者	その他
映画専攻	平成19年3月修了者	30	9	4	17 ※起業1を含む。
	平成20年3月修了者	29	8	5	16 ※起業9を含む。
メディア映像専攻	平成20年3月修了者	14	8	1	5 ※起業2を含む。

資料5-13 主な就職先

シネバザールキャスティング分室(監督業), スターダストピクチャーズ
 博報堂 DY メディアパートナーズ, トリクスタ(起業)
 ラピュタ阿佐ヶ谷(映画館), トランスフォーマー
 アオイスタジオ, ディレクターズ
 (株)メディア・ファクトリー
 (株)イメージスタジオ・イチマルキュウ
 ミコット・エンド・バサラ(株)
 (株)ピクト
 (株)キュレイターズ
 川口市映像・情報メディアセンター
 東京都写真美術館
 (株)ライトニング
 (有)ディレクションズ
 武蔵野美術大学

修了者に占める就職者の割合は高いとは言えないが、その他に分類される者は、表現者としてフリーランスで映像関係分野での仕事に従事している。こうした状況は、本研究科の人材養成の目的から見ても、想定範囲の事象であると言える。

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

本研究科では、特別なアンケートによる学生の評価を聴取するという事を行っていないが、少人数のグループ指導を中心に教育を行っているため、日ごろのコミュニケーションを通じた緊密な意見交換の中で、随時学生からの授業に対する評価を受けていると考えている。新設されたばかりの研究科ということもあり、図書資料の整備や、指導上の独自のノウハウの蓄積などについて、まだ充分とは言えない部分もあり、そうした点において、不断の努力を続けてよりよく改善していかなければならない。

しかし、前観点に既述したとおり、修了生全員が就職、フリーランスを問わず映像関連分野の業界での仕事に従事していることは、基本的には本研究科での教育成果に対する学生からの肯定を示していると考えられる。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

標準修業年限内での学位取得率が高い(資料 5 - 11 (P. 5-26) 参照) こと、修了後の進路状況、就職先等(資料 5 - 12, 資料 5 - 13 (P. 5-26) 参照) からみて、本研究科が意図していた人材の養成が図られていると考えられること、また、本研究科の教育成果の発表等を積極的に行い(資料 5 - 10 (P. 5-24～5-25) 参照)、その取組が新聞等にも数多く取り上げられている(別添資料 5 - ② (P. 5-39) 参照) ことなどから、十分な教育効果が上がっていると考えられる。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 修了後の進路の状況

(観点に係る状況)

分析項目IVで既述のとおり、本研究科は、平成 19 年 3 月に映画専攻の第 1 期の修了生が出たばかりであり、修了者の進路状況は、前出の資料 5 - 12 及び資料 5 - 13 (P. 5-26) のとおりである。

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

平成 19 年 3 月に映画専攻が第 1 期の修了生を出してから、1 年余りと言うこともあり、関係者からの評価に関して十分なフィードバックが集まっているとはいえないが、下記の受賞等の状況は、本研究科の修了生に対する関係者からの高い評価を示していると言える。

(1) 本研究科の設置に当たって施設の提供をする緊密な連携関係にある横浜市は、本研究科の修了者の中から優秀な者を顕彰するため、「横浜市長賞」を特に設けた。

(2) 第 1 期生として脚本領域で学んだ修了生が、第 33 回城戸賞(社団法人日本映画製作者連盟による。映画脚本界での「芥川賞」と言うべき賞)を受賞。

(3) 第 1 期生の修了制作作品「A Bao A Qu」が第 12 回釜山国際映画祭のコンペティション部門「New Currents」にノミネートされ、平成 19 年 10 月に公式上映された。

(4) 監督領域の修了生 2 名および脚本領域の修了生 2 名のデビュー作が決定している。

また、平成 20 年 3 月にメディア映像専攻の 1 期生が 14 名修了した。修了直後の状況であるものの、下記の状況は、本研究科の修了生に対する関係者からの高い関心を示していると言える。

(1) メディア映像専攻は、修了予定者の中から、最優秀作品を東京芸術大学大学美術館の買い上げ作品として顕彰した。

(2) 修了展「OS1」に出展した修了者の中にはNHK『デジタルスタジアム』に取り上げられるなど、各種メディアの関心は高く、その後も問い合わせが続いている。

(3) MoMA/PS1(アメリカ)、東京都現代美術館などに所属する国内外のキュレーター、ディレクターが修了展「OS1」開催期間中に訪れ、今後当該組織が企画する展覧会等への非公式な打診も相次いでいる。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

修了生が国際レベルの表現者となることは、もちろん本研究科の目指すところではあるが、修了制作として、制作した作品が国際映画祭にノミネートされたことは、期待以上の成果をあげたと言えることが出来る。また、修了したばかりの者の中から早くもデビュー作が決定した者や起業した者がいることも特筆できる。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1『日韓学生共同製作』の実施(分析項目Ⅲ 教育方法, 分析項目Ⅳ 学業の成果)

教育指針:アジアにおける多面的な文化価値を活用した映画の共同製作

成果: 本学大学院映像研究科と韓国映画アカデミーの学生たちが、「Love or Misunderstanding」というテーマで、制作した2本の作品「観」「消えない」を上映。11/19の上映後は、日韓交流シンポジウム「アジア映画の未来」も開催した。

質の向上について: 言語や習慣あるいは歴史観が異なり国難を伴う映画の共同製作を、学生が中心となって現在および将来の表現様式にあった形で製作を、両国間のカリキュラム上の制約や低予算を乗り越えて模索、実践していくことができ、その教育効果はきわめて高いものと判断できる。

資料5-14 日韓学生共同製作 概要

日刊国立映画教育機関による短編映画共同制作



撮影期間 2007年3月〜4月
 撮影 韓国・ソウル市内(拠点:韓国映画アカデミー)/横浜市内(拠点:東京芸術大学横浜校地)
 上映及びシンポジウム 2007年11月19日(月)
 東京国際フォーラムホールD1(有楽町)
 共催:韓国映画アカデミー
 助成:財団法人文化財保護・芸術研究助成財団
 財団法人上月スポーツ・教育財団
 協賛:松下電器産業株式会社
 東京フィルメックス
 助成認定:社団法人企業メセナ協議会

映画がその言語の国際性と大衆性によって、国境を超えた相互理解に最も適したメディアであることを念頭に、アジア文化の世界発信に向けて主導的役割を果たすべき日韓両国が、共同で映画作品の制作に当たった。

本企画においては、アジア映画の未来を確実に担うこととなる、それぞれの国の国立映画教育機関に学ぶ学生たちが、各国個別にはなく、混成チームを編成して映画を創り上げることに主眼を置いた。これは、単に作品のクオリティを上げることよりも、コミュニケーションを通じて互いの文化に対する理解を深め、また、将来へと繋がる映画人同士の人脈を形成することを目的としたためである。

具体的には、各校がそれぞれ脚本を用意し、監督・製作・撮影を含む4名から成る演出チームと俳優1名を相手国に派遣、他のスタッフを受け入れ国側の学生が務めて、1本の共同制作作品を撮り上げるという作業を相互に行った。

参加学校:東京芸術大学大学院映像研究科/韓国映画アカデミー

制作本数:各校学生の演出による短編を1本ずつ。計2本。

作品のテーマ:「Love or Misunderstanding」(愛または誤解)

脚本:各学校内で、学生より公募。

完成作品:『観』(吉井和之監督/35分/ステレオ/カラー)『消えない』(ピョン・ピョンジュン監督/20分/ステレオ/カラー)

○制作

2007年3月〜4月にかけて、撮影地となる相手国へ渡航して事前調査ならびに撮影を行い、帰国後、ポストプロダクションに入った。

○上映

11月19日(月)、東京国際フォーラムにて完成した2作品の上映を行った。併せて、「アジア映画の未来」と題し、日韓の映画人をパネリストに招いてのシンポジウムを開催した。

シンポジウムパネリスト

- ・安貞淑(韓国映画振興委員会 委員長)
 - ・朴起鏞(映画監督/韓国映画アカデミー 院長)
 - ・李鳳宇(プロデューサー/シネカノン 代表取締役)
 - ・市山尚三(東京フィルメックス プログラム・ディレクター)
- 司会:堀越謙三(東京芸術大学大学院映像研究科 教授)



(上映時の監督、出演者の舞台挨拶)



(シンポジウム)

「Love or Misunderstanding」を作品のテーマに掲げた今回の共同制作であったが、互いに十分な言語コミュニケーションもままならない日韓の学生たちは、まさにその主題の意味するところを、作品の内外で体感することとなった。

「困難を極めた初めての合同ミーティングを経て、やがて皆の目論見がゆっくりと一致していった。この映画は面白いものになるぞという確信が、我々を共犯関係にした。すれ違い(Misunderstanding)の多かった一方通行の関係が、相互理解(Love)へと至ったのである。」(『観』監督・吉井和之)。

日韓の混成チームが映画制作という濃密な時間を共有し、映画に対する考え方や製作の方法・技術などを含め、互いの文化の共

通点あるいは相違点といったものを深く理解する——これこそが本企画の目指したところであり、このような交流の積み重ねが、アジアの映画人のネットワークを活性化させ、ひいてはアジア映画の発展へと繋がっていくことを考えると、今回の共同制作は、単に学生個々人にとって貴重な経験であったという以上の意味を持っていたと言えるだろう。

また、これを機に、映像研究科と韓国映画アカデミーの間で国際交流協定が結ばれ、今後、一層の交流・協力を進めていく体勢が整った。新たにアニメーション専攻をスタートさせる映像研究科にとって、その分野でも既に実績を持つ韓国映画アカデミーから学ぶべきことは数多い。

完成作品の上映会には予想以上の観客が訪れ、関係者席を開放し補助椅子を出すなどしたが、なお立ち見が出る盛況ぶりであった。上映後は、挨拶に立った日韓の監督・俳優に大きな拍手が送られ、引き続いて行われたシンポジウムでも、映画会社シネカノン代表の李鳳宇氏から、両作とも「予想していたよりも数段高い水準」にあり「商品としてもかなり完成されている」という評価を頂いた。

シンポジウムには、韓国映画アカデミーの上部組織でもある韓国映画振興委員会委員長の安貞淑氏と、アカデミー院長の朴起鏞氏がパネリストとして参加し、堀越謙三教授の司会のもと、李氏、東京フィルメックスのプログラム・ディレクターである市山尚三氏を交えて、「アジア映画の未来」をテーマに活発な議論が展開された。商業主義的な映画が台頭する一方、国内外いずれの市場でも厳しい時期を迎えているアジア映画の現況、そうした中でアジア諸国、特に日中韓の3国が中心となってネットワークを築き、共同制作を含む様々な形の交流を通してアジア映画を守り発展させ、アジアの文化を発信していく重要性などが確認された。

『硯』

【スタッフ・キャスト】

監督	吉井一之	(修士課程映画専攻 2年)
脚本	小林美香	(修士課程映画専攻 2年)
プロデューサー	塩原史子	(修士課程映画専攻 2年)
アシリエイト・プロデューサー	藤井智	(修士課程映画専攻 2年)
撮影	森永泰弘	(博士後期課程映像メディア学専攻 1年)
編集	横山昌吾	(修士課程映画専攻 2年)
ライン・プロデューサー	RHIM Youn Sook	(韓国映画アカデミー学生)
助監督(チーフ)	KIM Hyun Sung	(韓国映画アカデミー学生)
助監督(サブ)	LEE Min Woo	(韓国映画アカデミー学生)
撮影助手	JUNG Hee Sung	(韓国映画アカデミー学生)
	LIM Kyung Woo	(韓国映画アカデミー学生)
照明	OH Tae Seok	(韓国映画アカデミー学生)
通訳	LIM Kyoung Suk	(韓国映画アカデミー学生)
メイク	LIM Kyung Ran	(韓国映画アカデミー学生)
美術	LIM Jin Young	(韓国映画アカデミー学生)
マイクオペレーター	SEO Min Su	(韓国映画アカデミー学生)
出演	遠藤雅	
	CHA Soo Yeon	



『消えない』

【スタッフ・キャスト】

プロデューサー	KWON Oh-Sung	(韓国映画アカデミー学生)
監督	BYUN Byung-Jun	(韓国映画アカデミー学生)
撮影	KIM Hyun-Ok	(韓国映画アカデミー学生)
助監督	LEE You	(韓国映画アカデミー学生)
ライン・プロデューサー	藤井智	(修士課程映画専攻 2年)
制作進行	三塚公子	(修士課程映画専攻 2年)
助監督	山田咲	(修士課程映画専攻 2年)
	船曳真珠	(修士課程映画専攻 2年)
	瀬田なつき	(修士課程映画専攻 2年)
	吉田雄一郎	(修士課程映画専攻 2年)
照明	佐々木靖之	(修士課程映画専攻 2年)
グリップ	小林英彦	(修士課程映画専攻 2年)
HD エンジニア	湯沢祐一	(修士課程映画専攻 2年)
美術	田中浩二	(修士課程映画専攻 2年)
衣装	三塚公子	(修士課程映画専攻 2年)
	山本良子	(修士課程映画専攻 2年)
マイクオペレーター	光地拓郎	(修士課程映画専攻 2年)
協力スタッフ	五十嵐文暢	(修士課程映画専攻 2年)
	成田耕祐	(修士課程映画専攻 2年)
	山田卓	(修士課程映画専攻 2年)
	山崎梓	(修士課程映画専攻 2年)
	菅野あゆみ	(修士課程映画専攻 2年)
編集助手	山本良子	(修士課程映画専攻 2年)
出演	KIM Bo-Ram	
	三宅恭代	



②事例2：『教育成果の発表機会をめぐる地域・行政・企業・関連分野とのパートナーシップ確立』

(分析項目Ⅲ 教育方法、分析項目Ⅳ 学業の成果)

教育指針： 学外において多様な評価を受ける機会の創出

成果： 横浜市・創造都市事業本部との「ヨコハマ EIZONE」(横浜映像文化都市フェスティバル <http://www.y-eizone.jp/>) 共催企画により、Open Theater(馬車道校舎での映画作品上映)や Open Studio(新港校舎での作品展示)を定常的な成果発表の機会を確立した。

質の向上について： 公開にあたってさまざまなコストを伴う学生の成果発表をめぐる、地域・行政・

企業・関連分野の協力・提携等を得て企画・実践し多様な評価を受ける機会が創出した。この機会創出は教育効果という観点から見ると人材発掘型教育をめざす本研究科にとってきわめて高いものと判断できる。

資料5-15 「ヨコハマ EIZONE」2007 イベント案内抜粋

1. Open Theater 2007

タイムテーブル

■ 一般上映・上映
■ 一般上映・上映
■ ワークショップ

	7/28	29	30	31	8/1	2	3	4	5
11:00	心 11:00 12:00	CRISP 11:00 12:00	エイリアンズ 11:00 12:00	from GARDEN 11:00 12:00	月のダンス 11:00 12:00	A Day A Day 11:00 12:00	月のダンス 11:00 12:00	映画館と人 11:00 12:00	映画館と人 11:00 12:00
12:00									
13:00	エイリアンズ 13:00 14:00	from GARDEN 13:00 14:00	LARGE 13:00 14:00	映画館と人 13:00 14:00	SOLARIS 13:00 14:00	映画館と人 13:00 14:00	SOLARIS 13:00 14:00	映画館と人 13:00 14:00	映画館と人 13:00 14:00
14:00									
15:00	心 15:00 16:00	CRISP 15:00 16:00	映画館と人 15:00 16:00	映画館と人 15:00 16:00	SOLARIS 15:00 16:00	映画館と人 15:00 16:00	SOLARIS 15:00 16:00	映画館と人 15:00 16:00	映画館と人 15:00 16:00
16:00									
17:00	月のダンス 17:00 18:00	A Day A Day 17:00 18:00	映画館と人 17:00 18:00	映画館と人 17:00 18:00	SOLARIS 17:00 18:00	映画館と人 17:00 18:00	SOLARIS 17:00 18:00	映画館と人 17:00 18:00	映画館と人 17:00 18:00
18:00									

映写室たんけん！(ワークショップ)

8/4[土]-5[日] 11:00-12:00

内 容：映写室および上映機の見学、映写スタッフによる解説
 参加方法：当日受付 無料にて参加可能(1Fホールに集合)
 入 場：先着20名程度
 対 象：小学生以上(一般の方の参加可)

お問い合わせ

東京藝術大学 大学教務部事務局
〒231-0292 東京都文京区千駄木4-4-4
TEL: 03-5555-2572
FAX: 03-5555-2717
URL: 東京藝術大学 大学教務部事務局 <http://www.togeigaku.ac.jp/>
 日本ハイツZONE事務局 <http://www.jpzone.jp/>

交通のご案内

【最寄駅】
池袋駅有楽町線 池袋駅西口 徒歩10分
池袋駅有楽町線 池袋駅西口 徒歩10分
池袋駅有楽町線 池袋駅西口 徒歩10分

2.OPEN STUDIO vol.4

7.30.mon → 8.5.sun 11:00 → 20:00

科学と芸術の融合の観点から新しいメディア、映像コンテンツについてアプローチをしています。「OPEN STUDIO vol.4」は新港校舎を一般に開放し、修士1年・2年合同で制作や研究の成果を紹介します。

<http://www.fnm.geidai.ac.jp/openstudio/>

■場所:新港校舎 ギャラリー



③事例3：国際提携に基づく複合的な教育プラットフォームの構築

(分析項目Ⅲ 教育方法、分析項目Ⅳ 学業の成果)

教育指針：『ポケットフィルム・フェスティバル・イン・ジャパン』を通じた教育と研究(表現)を複合化したメディア実践の確立

成果: 2007年12月には、このフェスティバルを世界規模で発展させるため、本研究科とフォーラム・

ド・イマージュが提携し、ソフトバンク、シャープなどの企業からの協賛を得て新港校舎を会場として『ポケットフィルム・フェスティバル・イン・ジャパン』を開催した。教員とともに学生も開催の運営等に携わった。

質の向上について： 研究科が扱う分野が表現や研究の先端的諸課題や国際的な問題と密接に関係することも多いため、表現研究と教育実践の協調が非常に重要となる。この協調を、コンテンツ産業講座という寄附講座を基盤として組織化し、『ポケットフィルム・フェスティバル・イン・ジャパン』の開催を通じて教員と学生が新しいメディア実践にとって必要とされる問題群を共有できた。映像メディア表現のジャンルを超えて持続的な理論と方法論を探究する本研究科にとって教育効果はきわめて高いものと判断できる。

資料 5 - 16 ポケットフィルムフェスティバル公式 Web 抜粋

資料 5—17 ポケット・フィルムフェスティバル報道データ

日付	媒体	媒体名	番組/コーナー/見出し など
2007/12/12	携帯	QuickTV	「ケータイ魂 (スピリッツ)」ケータイ NewsFlash (毎週水曜日 18 時更新) ※ DoCoMo から視聴可能
2007/10/18	雑誌	Web Designing	1 億 2000 万人 総アーティスト時代
2007/11/19	雑誌	CUT	イベント情報
2007/11/24	雑誌	Invitation	パリ発、携帯電話ムービーによる映画フェスティバルが日本初上陸
2007/12/9	雑誌	読売ウィークリー	ポケットフィルム・フェスティバル 東京芸術大学映像研究科横浜キャンパス新港校舎、馬車道校舎
2008/1/20	雑誌	WEDGE	読む TV 携帯電話の映画祭 東京の 24 時間を観る

2007/7/6	新聞	朝日新聞夕刊	熱いケータイ映像
2007/9/14	新聞	日経新聞	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	新聞	スポニチ	東京芸大とソフトバンクがコラボ
2007/10/13	新聞	毎日新聞	小学生が「携帯」映画に挑戦―八王子・一小 NPOが撮影法指南
2007/10/18	新聞	毎日新聞	携帯撮影の動画映画に―墨田押上小で授業
2007/10/25	新聞	毎日小学生新聞	携帯電話で映画作り 東京都墨田区押上小
2007/11/3	新聞	毎日新聞	初の「ケータイ映画祭」来月開催
2007/11/21	新聞	日本経済新聞	携帯で撮影、初の映画祭
2007/12/1	新聞	神奈川新聞	市民の広場 ポケット・フィルムフェスティバル 携帯電話による日本初の映画祭
2007/12/3	新聞	東京新聞	ネットの話題 初の「ケータイ映画祭」心動くままに撮る新たな芸術
2007/12/5	新聞	毎日新聞 夕刊	日本初の携帯映画祭 7日から横浜で 48 作品を上映
2007/12/8	新聞	毎日新聞	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開催
2007/12/9	新聞	Zaobao (SPH)	※シンガポール最大の中国系新聞
2007/12/11	新聞	毎日新聞	ポケットフィルムフェス閉幕
2007/12/17	新聞	東京新聞	ネットの話題
2007/12/18	新聞	東京 IT 新聞	ポケットフィルム・フェスティバル大賞決定、イベント開催 携帯＝電話という概念を超えて
2008/1/8	新聞	毎日新聞 夕刊	”携帯電話映画祭”大賞は「720/24」に
2007/12/7	通信社	AP 通信	ニュース配信
2007/9/14	通信社	共同通信	ケータイ映像の映画祭開催 東京芸大とソフトバンク
2007/9/24	テレビ	tvk	日本初の携帯映画祭
207/10/2	テレビ	NHK	日本初の携帯映画祭
2007/12/4	テレビ	テレビ朝日	やぐちひとり◎ 藤幡実行委員長がゲスト出演。25:34 頃から 7 分間、ポケットフィルム・フェスティバルが紹介されました。
2007/12/7	テレビ	tvk	ニュース 17:30～
2007/12/7	テレビ	イッツコム	イッツ 365 17:00～ お出かけ情報
2007/12/8	テレビ	NHK	おはよう日本「首都圏」7:30～
2007/12/8	テレビ	tvk	Hi! 横浜編集局 18:00～
2007/12/11	テレビ	日本テレビ	NEWS ZERO 23:40～ 携帯電話で映画制作ポケットフィルム・フェスティバル
2007/12/11	テレビ	フジテレビ	FNN スピーク 11:30～12:00 ニュースの最後(天気予報の前)に紹介
2007/12/14	テレビ	フジテレビ	めざましテレビ「ヒト調」 7:16～7:25 東京芸大・末宗さんの作品制作に密着取材、中野アナのリポートなど
2007/12/14	テレビ	MTV JAPAN	MTVニュース 実行委員長インタビューほか
2007/12/24	テレビ	NHK	おはよう日本「首都圏」7:11～ 携帯電話の動画が拡大しているという事例の一つとしてポケットフィルム・フェスティバルが紹介されました。
2007/12/25	テレビ	テレビ朝日	やぐちひとり◎ 25:10～26:10 携帯シネマ・フェスティバル受賞作品決定!
2007/12/31	テレビ	tvk	音楽で年を越しますtvk 25:50～25:55
2007/9/14	ネット/オンライン	日経NET	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	日経NETモバイル	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	ケータイ watch	東京芸大とソフトバンク、携帯を使った映画祭を開催
2007/9/14	ネット/オンライン	ITmedia	ケータイ動画の祭典「ポケットフィルム・フェスティバル」を横浜で開催―東京藝大とソフトバンク
2007/9/14	ネット/オンライン	RBB TODAY	日本初の携帯電話で撮影した映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	CNET	ケータイは今や映画撮影の道具に―「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	livedoorNEWS	日本初の携帯電話で撮影した映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	JCN Newswire	ソフトバンク、日本初の携帯電話によるムービーフェスティバル「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	ケータイ watch	ソフトバンクと東京藝大が仕掛けるケータイ映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	カナコロ	横浜で日本初開催、携帯で撮影した作品使い映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	カナコロ	横浜で日本初開催、携帯で撮影した作品使い映画祭
2007/9/18	ネット/オンライン	ITmedia	「ポケットフィルム・フェスティバル」ってなに?:「写メール」のように「ポケットフィルム」のカルチャー広めたい―藤幡正樹氏
2007/9/18	ネット/オンライン	ヨコハマ経済新聞	日本初の携帯ムービーフェスティバル―横浜で開催
2007/9/19	ネット/オンライン	nOObs	「ポケットフィルム・フェスティバル」携帯ムービーで世界を目指せ
2007/9/19	ネット/オンライン	eventcast incs	ポケットフィルム・フェスティバル POCKET FILMS Festival in Japan あと 74 日
2007/10/9	ネット/オンライン	公募ガイド	(参考)公募ガイドにおいて公募アワード 2007「クリエイティブ賞」を受賞しました。選考理由:ここ数年、ケータイを利用したコンテンツが急激に増加しました。ケータイフォトや小説といったジャンルは今ではすっかりおなじみになりましたが、ケータイを使った映画祭というのは、非常に斬新な試みです。常に進化していくケータイの、さらなる可能性を感じさせる企画です。
2007/11/19	ネット/オンライン	Yahoo!動画	一映画―「ポケットフィルム・フェスティバル」
2007/11/22	ネット/オンライン	tvkコミュニケーションズ	アートチャンネル 10 作品、各 30 秒抜粋掲載
2007/12/3	ネット/オンライン	東京新聞	ネットの話題 初の「ケータイ映画祭」心動くまま撮る新たな芸術
2007/12/3	ネット/オンライン	東急沿線スタイルサイト「SALUS」	みなとみらい周辺のニュース一覧 携帯電話を撮影機材とした映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/12/4	ネット/オンライン	sperfuture.com	yokohama:moviemania don't miss picket films festival,japan's first mobile phone

			film festival at the yokohama shinko campus on dec 7-9
2007/12/5	ネット/オンライン	毎日jp	日本初の携帯映画祭 7日から横浜で
2007/12/5	ネット/オンライン	white-screen.jp	white-screen.jp
2007/12/6	ネット/オンライン	ITmedia	”ケータイで撮った映画”祭「ポケットフィルム・フェスティバル」12月7日開幕
2007/12/7	ネット/オンライン	ケータイ watch	ケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開幕
2007/12/7	ネット/オンライン	abc NEWS	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	BusinessWeek	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	MIT Technology Review	Japan holds works shot on camera-equipped cell phones
2007/12/7	ネット/オンライン	San Jose Mercury (Mercury News.com)	Japan puts phone films in its Pocket
2007/12/7	ネット/オンライン	THE Hollywood PERORTER	Japan puts phone films in its Pocket
2007/12/7	ネット/オンライン	USA TODAY	Japan honors films made via cellphones
2007/12/7	ネット/オンライン	washingtonpost.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	modbee.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	Local news leader	Japan festival shows cell phone films
2007/12/7	ネット/オンライン	Herald News Daily	Japan festival shows cell phone films
2007/12/7	ネット/オンライン	Idaho Statesman.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	PHYSORG.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	Yahoo!News	Japan holds cell-phone film festival
2007/12/8	ネット/オンライン	毎日.jp	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開幕
2007/12/8	ネット/オンライン	TOKYO Web	携帯で映画祭 あすまで横浜で日本初のフェス
2007/12/8	ネット/オンライン	Telegraph.co.uk	Festival for mobile phone films in Japan
2007/12/8	ネット/オンライン	毎日.jp	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開幕
2007/12/8	ネット/オンライン	オーマイニュース	TV ケータイ電話の映画祭! ? ポケットフィルムフェスティバルが開かれる
2007/12/8	ネット/オンライン	オーマイニュース	記事 ケータイ電話の映画祭! ? ポケットフィルムフェスティバルが開かれる
2007/12/9	ネット/オンライン	ケータイ watch	ケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」の大賞決定
2007/12/10	ネット/オンライン	Yahoo!動画	ポケットフィルム・フェスティバル一次通過作品掲載
2007/12/12	ネット/オンライン	日経トレンディネット	政木桂の「トコトン楽しむビデオ道場」「ポケットフィルム・フェスティバル in Japan」レポート—携帯電話で映画を作る(2)
2007/12/13	ネット/オンライン	Yahoo!動画	第一回ポケットフィルム・フェスティバル受賞作品を公開!
2007/12/14	ネット/オンライン	MTV JAPAN	携帯で映画製作! 「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
207/12/14	ネット/オンライン	STELLA	STELLA CINEMA「シネマ NEWS」携帯ムービーが作品に! 日本初の映画祭が横浜で開催—「第1回ポケットフィルム・フェスティバル」
207/12/17	ネット/オンライン	STELLA	STELLA CINEMA「シネマ NEWS」携帯ムービーが作品に! 日本初の映画祭が横浜で開催—「第1回ポケットフィルム・フェスティバル」
207/12/17	ネット/オンライン	中日新聞	初のケータイ映画祭大賞 初のケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」の大賞は、東京の24時間の風景を映像化
207/12/18	ネット/オンライン	東京 IT 新聞	ポケットフィルム・フェスティバル大賞決定、イベント開催 携帯＝電話という概念を超えて
2007/12/31	ネット/オンライン	tvk	音楽で年を越しますtvk 25:55～26:10
2008/1/7	ネット/オンライン	South China Morning Post	Films Shot and edited on cellphones are coming to a small screen near you
2007/11/26	フリーペーパー	R25	Precious! R25 日本初上陸!! 携帯電話によるムービーイベント「POCKET FILMS Festival in Japan」
2007/12/3	フリーペーパー	Job aidem(首都圏版)	イベント情報
2007/12/3	フリーペーパー	Job aidem(首都圏版)	イベント情報
2007/12/6	フリーペーパー	L25	ポケットフィルム・フェスティバルが横浜で開催 ケータイ動画機能で撮ったオモシロ映像を見に行こう
2007/12/7	フリーペーパー	シティリビング	30 面
2007/9/25	ラジオ	J-WAVE	日本初の携帯映画祭
2007/12/4	ラジオ	J-WAVE	COLOUR YOUR DAYS 若手指名作家の千葉大樹氏がパーソナリティを務めている、J-WAVE「RENDEZ-VOUS」の”COLOUR YOUR DAYS”コーナー内で紹介
2007/12/4	ラジオ	TOKYO FM	SKY7:20～7:30の約10分間、藤幡実行委員長が電話で生出演
2007/12/8	ラジオ	NHK ラジオ	ラジオ朝いちばん 7:40～首都圏情報
2007/12/8	ラジオ	FM Salus	E-Style 11:25～35 実行委員長インタビュー生放送